

# 東京財団研究報告書

2006-2

## 日越関係発展の方途を探る研究

ヴェトナム独立戦争参加日本人

—その実態と日越両国にとっての歴史的意味—

井川一久 大阪経済法科大学アジア太平洋研究センター客員教授



---

東京財団研究推進部は、社会、経済、政治、国際関係等の分野における国や社会の根本に係る諸課題について問題の本質に迫り、その解決のための方策を提示するために研究プロジェクトを実施しています。

「東京財団研究報告書」は、そうした研究活動の成果をとりまとめ周知・広報（ディセミネート）することにより、広く国民や政策担当者に問いかけ、政策論議を喚起して、日本の政策研究の深化・発展に寄与するために発表するものです。

本報告書は、「日越関係発展の方途を探る研究」（2005年4月～2006年3月）の研究成果をまとめたものです。ただし、報告書の内容や意見は、すべて執筆者個人に属し、東京財団の公式見解を示すものではありません。報告書に対するご意見・ご質問は、執筆者までお寄せください。

2006年5月

東京財団 研究推進部

---



# 日越関係発展の方途を探る研究

## 研究体制

■研究代表者 井川 一久 大阪経済法科大学アジア太平洋研究センター客員教授

■共同研究者 加藤 則夫 NHK国際放送局チーフ・ディレクター

白石 昌也 早稲田大学大学院アジア太平洋研究センター教授



# 日越関係発展の方途を探る研究

ヴェトナム独立戦争参加日本人

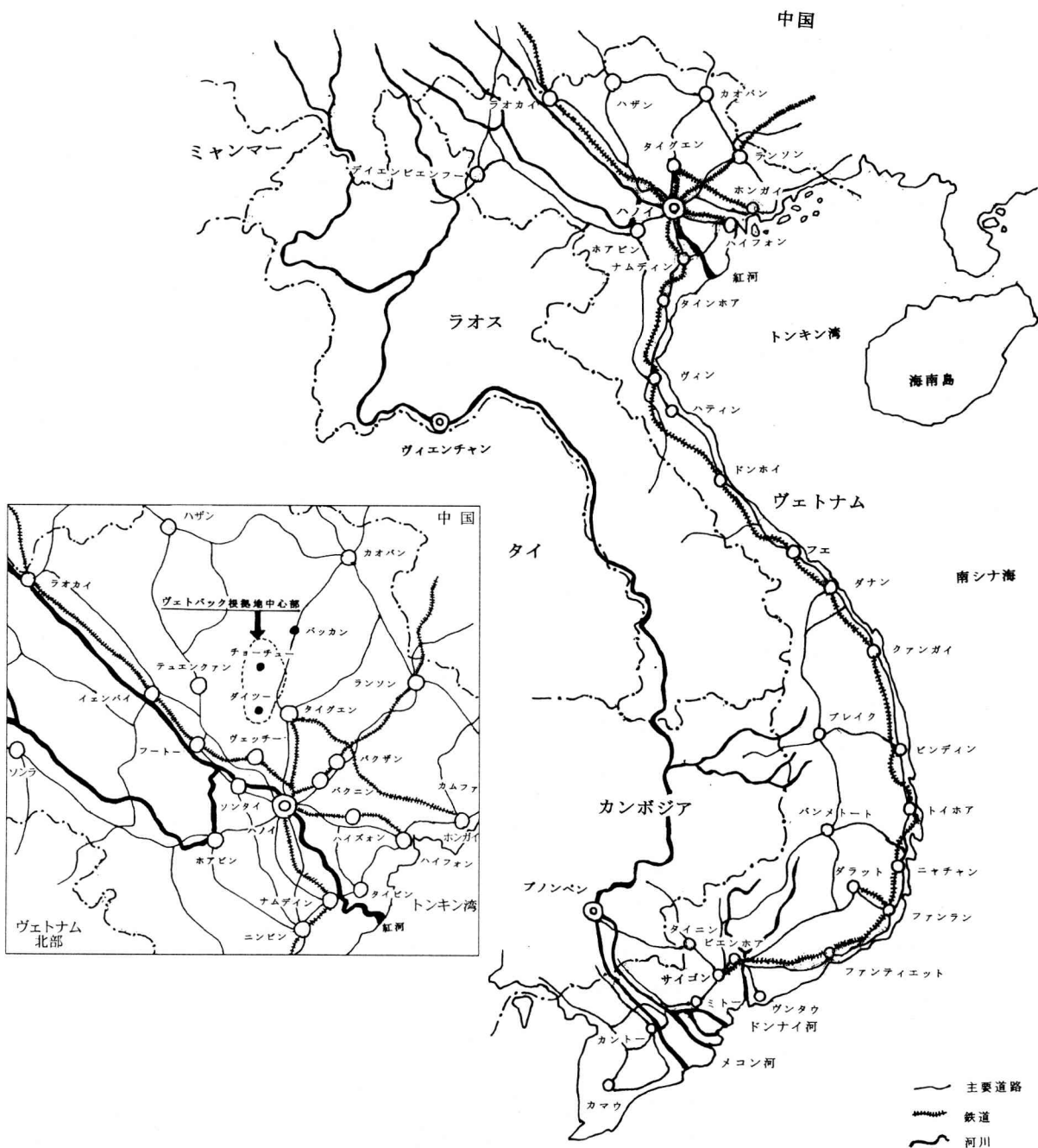
—その実態と日越両国にとっての歴史的意味—





# 「ヴェトナム独立戦争関係地図」

(井川一久作成)



## 前書き——ようやく発掘された歴史的事実

一国の民が自己の歴史を忘れるとき、その国の文明力はただちに衰亡の道を辿り始めるという。今の日本がそうでなっているといたいわけではないが、わが国の歴史、とりわけ近現代史に関する同胞の知識に多くの欠落部分のあることは否めない。その欠落部分の中でも特に重大と思われるものの一つは、第2次大戦中に仏領インドシナ連邦（ヴェトナム、カンボジア、ラオス）に駐留していた日本軍の将兵多数（推定約600人）が帰国を拒み、数十人の在留民間人とともに、ヴェトナム独立同盟（ヴェトミン）を主役とする対仏独立戦争（第1次インドシナ戦争）に参加し、その約半数が現地に骨を埋めたという事実である。

我々は東京財団の委託により、2004年後半から2005年5月まで、ハノイ国家大学ヴェトナム学・開発科学研究所（I V I D E S）の協力を得て、この「ヴェトナム独立戦争参加日本人」の事跡を日越両国で調査し、そこで知ることのできた個々の独立戦争参加者の事例を第1次インドシナ戦争史の流れに正しく位置づけようと試みた。これは両国を通じて過去に一度も行われたことのない系統的調査研究であった。その結果、次第に明らかになってきたのは、彼らの活動が軍事の全領域のみならず、ヴェトミンを主体とするヴェトナム民主共和国（D R V）政府の行政分野の一部にまで及ぶ多様性を帯びていたこと、また少なくとも戦争の初期（1945～47年）においては、彼らが民兵から正規軍まで全レベルにわたってD R Vの戦力構築と戦闘に必要不可欠ともいべき役割を果たし、54年のD R Vの勝利に大きく貢献したことである。

2005年10月の報告書は、この調査研究結果に1990年代から入手していた各種の情報を加えて、彼らがヴェトナム独立戦争に参加した経緯と内面的理由、活動の実態、独立戦争前半期における役割などを、D R V最初の士官学校の一つとされるクァンガイ陸軍中学の日本人教官を中心的モデルとして概括したものである。だが、ヴェトナム独立戦争における日本人参加者の役割は、これだけで全容がわかるような底浅く幅狭いものではなかった。それゆえ我々は第1次報告書のほぼ完成した2005年5月以降も同じく東京財団の委嘱とI V I D E Sの協力により調査研究活動を継続した。本報告書（第2次報告書）は、その成果をまとめたものである。

井川はこれに日本人のヴェトナム独立戦争参加がいかなる歴史的意味を持っていたのか

ということについての個人的評価を加えた。後述するように、彼らの活動は、現代世界史の転回点となった第2次インドシナ戦争（ヴェトナム戦争）に間接的に影響を残すもの、また日本近代史の深部構造と近代日本人の精神史を鮮明に象徴するものとして、極めて深刻かつ重大な意味を帯びていたと考えたからである。

文中、敬称はすべて省略した。また混乱を避けるため、DRV側の統一戦線組織、政府諸機関、軍などの名称は、戦争遂行過程で変遷したものでも、なるべく一つの、最も一般的に使われていた呼称で代表させることにした（例えば「ヴェトミン」）。

## ヴェトナム・ナショナリズムとの交響

—日本人にヴェトミン参加を促した理念的要因—

日本敗戦直後、600名もの日本人（大多数は日本軍将兵）がヴェトナム独立戦争に参加した内面的理由は第1次報告書に述べた通りであるが、敗戦の屈辱に堪えられないとか、ろくな武器も持たずにフランス軍に立ち向かおうとしているヴェトナム人を見捨てて帰国するのは日本男児の恥であるとか、米軍占領下の日本に住む気になれないとか、現地女性への愛情が断ち切れないとか、戦犯に問われるのが怖いとかいうような理由だけで、彼らが夢にまで見たであろう故郷を捨てて、異民族の独立戦争に命懸けで参加したとは到底考えられない。彼らに独立戦争参加を決意させるには、それなりの条件が必要であった。その条件とは、独立戦争の主役であったヴェトナム独立同盟（ヴェトミン）が、インドシナ共産党（1951年からヴェトナム労働党）を指導中核としながらも、左翼イデオロギーとは余り縁のない純然たるナショナリズムの集団として彼らの前に立ち現れたということである。

井川は独立戦争に参加して生き残った日本人約40名とのインタビューに際して、次の3点をたずねるのが常であった。

① ヴェトミンがインドシナ共産党傘下の組織であることを最初から知っていたか。

② あなたの接触した、またはあなたに戦線参加や武器提供を求めたヴェトミンの要員もしくは協力者は、自分たちが共産党員ないし共産党のシンパサイザーであることをみずから明らかにしたか。

③ (①または②の答えが「イエス」であった場合) あなたはヴェトミンの最終目標が社会主義革命であり、独立戦争はこれを達成するための一過程にすぎないと考えていたか。

①については、約6割が「知らなかった」、「噂としては耳にしたことがあるが、真偽はわからなかったし、確かめるつもりもなかった」、「そんなことはどうでもよかった」などと答えた。「明確に認識していた」と答えたのは、ヴェトナム北部で敗戦前にヴェトミン討伐作戦に際して上官からそのことを教えられていた人、もしくは第34独立混成旅団の情報将校であった中原光信少尉や陸軍中野学校出身の谷本喜久男少尉のようにヴェトミン上級幹部との対話や独自の諜報活動でそのことを確認していた人にとどまる。

②については、ほぼ全員の回答が「ノー」であった。相手の所属政党やイデオロギーを確かめたうえでヴェトミン参加を決意したという人は全くいなかった。

③についても、ほぼ全員が「ノー」と答えた。

これらのことから判断できるのは、第一に、彼らが濃淡の差はあっても例外なくベトナム人一般の愛国の熱情に対する共感からベトナム人の戦列に加わったのであり、ベトナムの独立に貢献することが目的のすべてであったということ、従ってベトナムをいかなる政治集団が指導しているのか、その政治集団が独立後にベトナムをいかなる国家に仕立てようとしているのかなどということは関心の外にあったということである。

サイゴン近辺で終戦の日を迎えた某陸軍下士官（本人の希望により匿名）によると、英軍による武装解除に続いてフランス軍が到着し始めた1945年8～9月、キャンプの門には毎晩のように若い女性たちがやってきて、兵士たちにバナナなどを手渡ししながら、「日本の兵隊さん、私たちを助けて！一緒に戦って！」と呼びかけた。その真剣な声を聞くうちに、彼はすぐにも離隊して対仏武装闘争に加わりたくなかったが、離隊した場合の処罰や年老いた故郷の父母のことを思って、辛うじて思いとどまったという。「とにかくベトナム人たちは、男も女も独立をめざして全身火の玉のように見えた。その姿を見てみると、敗戦の衝撃が和らぐような気分になった。俺たちは負けたが、俺たちに代わって同じアジアのベトナム人が白人の軍隊と戦おうとしているからには、戦争はまだ終わっていないんだ、と。どんな組織が戦おうとしているかというようなことは全く気にならなかった。彼らと理屈抜きで運命を共にしたいと思った」と彼は語っている。

これは当時の若い在越日本軍将兵多数が多少とも共有した心情であったと思われる。独立戦争の渦中に飛び込みたいという心理的衝動は、まさに理屈抜きであった。その衝動と、日本へ帰りたいという同じく理屈抜きの願望と——この分岐点に立って、彼らはどちらを選ぶべきかに思い悩んだ。そして、それまで現地人との日常的な接触・交渉を通じてベトナムの土と人に断ち難い親愛感を抱いていたり、現地女性と愛人関係にあたり、アジア諸民族解放という理念（これは大東亜戦争の公式理念の一つでもあった）に深く影響されていたり、故郷の親族に対して格別の扶養義務を感じなくてすむ若い独身者であったり……というような個人状況（これらの状況要素は多かれ少なかれ複合していた）にあった者は、ベトナム人とともに再び戦う道を選んだ。それは一種の使命感による選択であった。これは少数ながら独立戦争に参加した日本民間人についてもいえることである。そういう人々にとって、ベトナム人が共産党に指導される組織であろうとなかろうと問うところではなかった、と断定してよい。

ナショナリズムという概念は簡単に定義できるものではないし、使い方によっては少々

危険な方向性を帯びる可能性がある」と指摘する向きもあるかもしれない。だが、1945年8月から翌46年にかけての一時期に限定していえば、フランス軍の再来とベトナム人の抗戦は必至という状況にあって、敗戦で宙に浮いた日本人（とりわけ日本軍将兵）のナショナリズムが、まさにその日本敗戦を無二の好機として独立を達成しようとしたベトナム人のナショナリズムと激しく交響したということができる。

第二に指摘できるのは、ヴェトミンに結集した一般ベトナム人はもとより、その中核組織であったインドシナ共産党の各級幹部も、1945年から49年にかけて、社会革命などはほとんど口にせず、もっぱら愛国と独立、つまりナショナリズムの言葉だけを唱えていたという事実である。これは対仏独立戦争の本質と、そのベトナム側の当事者であったヴェトミンおよびインドシナ共産党の基本体質にかかわることなので、やや詳しく説明しおておきたい。

1939年、ナチス・ドイツに敗れたフランスには親独のヴィシー政権が生まれた。ナチス・ドイツの同盟国であった日本は1940年、そのヴィシー政権との協定にもとづき、中国国民党政府に対する米英の援助ルートを断つとの理由でベトナム北部へ陸軍部隊を送った（北部仏印進駐）。フランスのインドシナ統治には介入しないとの条件であった。日米関係が極度に悪化した翌41年6月、日本軍はベトナム南部にも展開した（南部仏印進駐）。ホー・チ・ミンを最高指導者とするベトナム独立同盟（ヴェトミン）が結成されたのは、その直前の41年5月である。それは共産党を中心に、当時のベトナム社会のあらゆる階層を「愛国と独立」という共通目標で結集しようとする統一戦線組織であって、地主や資本家（おおむね零細であった）にも参加を求めていた。

第2次大戦中、ヴェトミンが「ベトナム人民の敵」としていたのは、フランス植民地主義者と「日本ファシスト軍」である。当時は米国など連合諸国の大義名分も反ファシズムであったから、これを格別に共産主義的な姿勢とみなすことはできない。

日本敗戦後、もはや「日本ファシスト軍」は敵ではなくなった。ヴェトミンはフランスを含むいかなる国家にも「敵」のレッテルを貼ることをやめた。ヴェトミンを主役とし、ホー・チ・ミンを主席として45年9月に独立を宣言したベトナム民主共和国（DRV）政府は、フランス政府との外交交渉を通じて平和裡に実質的独立を獲得しようとした。この政府にはグエン朝最期の皇帝バオダイ（\*1）が最高顧問として参加し、閣僚には旧チャン・チョン・キム政権（\*2）の閣僚や中国国民党につながるベトナム国民党の最高幹部も加わっていた。だがフランス政府は、その交渉がベトナムをフランス連合にとど

めるという線でひとまず大枠合意に達し、DRVに外交・軍事の権限をどこまで与えるかという最終局面に至って難航したとき、インドシナ支配時代に郷愁を抱く強硬派の主張に押され、インドシナの統治権者は相変わらずフランスであるとの既成事実をつくろうとして再征服の軍隊をベトナムに派遣した。その結果、全国民を結集するためのDRV政府とヴェトミンの公式スローガンは「愛国」と「独立」、そして「徹底抗戦」の三点に絞られることになった。

\* 1 仏印時代には安南保護王国の最期の国王。日本軍が45年3月の明号作戦でフランスの統治機構を解体して「ベトナム王国」を名目的に独立させたとき、その国王となった。49年、フランスがサイゴンに擁立した「ベトナム国」政府の国家元首となり、独立戦争後の55年に米国がこれをベトナム共和国としてゴー・ディン・ジェム独裁政権を擁立したときフランスに亡命。

\* 2 日本軍の擁立した「ベトナム王国」政府。チャン・チョン・キム首相ら閣僚の多くは愛国知識人で、完全独立を志向していた。

日本人のベトナム独立戦争参加の歴史を考える場合の問題の一つは、こういったインドシナ共産党の路線が、独立戦争の主導権を握ることによって社会主義革命という戦略目標を達成しよう（戦争を革命に転化しよう）という、1930年代以来の共産党独特の統一戦線戦術であって、そのために同党はベトナム国民はもとより日本人に対してもヴェトミンを純然たる愛国組織のようにみせかけていたのかどうかということである。

この問題について、我々は日越双方の関係者とのインタビュー、ベトナムの歴史、社会、文化に関する研究、また長期にわたるベトナム滞在の体験にもとづき、愛国主義を掲げてすべてのベトナム国民と在留外国人に独立戦争参加を呼びかけるというインドシナ共産党の方針は単なる戦術ではなかったという見解を持つ。

その理由を略説すれば次の通りである。

### ①インドシナ共産党の独自体質

インドシナ共産党は、創設者ホー・チ・ミンの別名グエン・アイ・クオック（阮愛国）が象徴しているように、もともと極めて愛国的な政党として出発し、いかなる運動に際しても、まずもって国民の愛国心に訴えてきた。その結果、国民の意識を大きく占めるに至った愛国の熱情が、党員たちの内面に時とともに逆浸透し、この党のナショナリスティッ

クな体質をさらに強めたということもできる。共産党と名乗る以上、共産主義（マルクス・レーニン主義）の革命イデオロギーと無縁ではありえなかったが、この党に限っては、それよりもナショナリズムの方が本来はるかに強かった。祖国解放・独立は、革命よりも重要な目標であった。

この体質は、世界で最も強靱といわれた血縁・地縁の村落共同体（サー）を基盤とするヴェトナム古来の社会構造とも無関係ではなかった。資産の多寡や職業の貴賤や政治的立場の違いを超えて同族・同郷の人間関係を最も大切に、何を決めるにも全員一致を尊ぶサーの「和」のエートスは、階級闘争を至上の原則とする共産主義のイデオロギーにはなじみにくい。

そこに形成されたのは極めて強靱なパトリオティズム（→ナショナリズム）の伝統であり、それは古代から相次いだ中華歴代帝国の侵略に対する民族あげての抵抗によって補強され続けた。この社会で自己形成を遂げたインドシナ共産党も、この精神的伝統を強烈に受け継いでいた。それは独立戦争のはるか後年、米国を相手とする第2次インドシナ戦争（ヴェトナム戦争）に際して中ソ両国の大規模な援助を命綱としながらも、両国の政治的・思想的干渉には常に抵抗し、一貫して「独立と自由ほど貴重なものはない」というホー・チ・ミンの標語を叫び続けたことや、1978～79年に主として国防上の理由から中国の衛星国カンボジアのポル・ポット政権を打倒し、ただちに中国との武力対決を強いられ、さらに「世界の孤児」となりながら10年にわたるカンボジア武力紛争に耐えたことで十二分に察せられる。

「愛国」ないし「自主独立」が「革命」に先立つ価値であること、あるいは「革命」が「愛国」と同義であること——この精神姿勢を堅持し続けたからこそ、この党はヴェトナム・ナショナリズムを代表する存在となり、国民大多数の胸中に揺るがぬ権威を打ち立てることができたのである。

ついでにいえば、第2次大戦以前の日本にも、ヴェトナムと同様に強靱な血縁・地縁の共同体を基盤とする社会構造と「和」のエートスが根強く残っていた。両国の間には文化（例えば宗教や儀礼）にも共通項が多かった。その戦前の日本、それも多くは農村に生まれ育った日本軍将兵がヴェトナムに強い親近感を抱き、ヴェトナム人のパトリオティズムに共感したのは、ごく自然な成り行きであったということができる。独立戦争に参加した日本人の多くは、「別の国で、別の民族のために戦っているという気がしなかった」、「ヴェトナムの戦友たちが故郷の知人や友人のように思えた」などと語っている。



## ②簡単な推定材料

インドシナ共産党とヴェトミンの愛国主義が単なる戦術的偽装であったとすれば、日本人が日常生活を共にした末端民衆はもとより党员やヴェトミン要員の言動には、革命のイデオロギーが何らかの形で必ず滲み出ていたはずであるが、その気配は1940年代後半を通じて皆無に近かった。これは愛国主義がヴェトミンの血肉と化していたことを簡単明瞭に物語る事実である。

中原光信の回想によれば、敗戦前からヴェトミンに好意的であった第34独立混成旅団参謀の井川省少佐は、当時の職業軍人としては極めて開明的かつ教養豊かな人物で、アジア植民地諸民族解放という理念の持ち主でもあったが、必ずしも左翼的な革命思想には共鳴していなかった。また井川少佐と親交を結んだヴェトミン大幹部のグエン・ソン將軍は、中国共産党员として毛沢東らと延安に住んだ経歴の持ち主であったにもかかわらず、井川少佐やその部下の日本人に対して革命思想につながる言葉を洩らしたことはほとんどない(\*)。彼とその部下のヴェトミン幹部の周辺には、常に徹底した愛国主義の雰囲気漂っていたという。

\* 50年代初頭のことと思われるが、クエン・ソンはヴェトバック根拠地で日本人を含むDRV軍事部門の上級幹部たちに、彼の中国での経験にもとづいて革命の理念を講義したことがある。彼はブルジョワジー打倒とかプロレタリアートの決定的役割とかを語った。しかし講義のあと、中原に彼独特のいたずらっぽい笑顔を見せながら、「そんな明確な階級なんてベトナムにあるものか。理屈だけさ」と話したという。

ヴェトミンに加わった日本人の多くは、独立戦争が比較的短期間で片づくと思っていたようである。井川少佐はヴェトミンに加わった直属部下たちに、「長くても3年で(ベトナム独立達成の)目鼻がつくだろう。それから帰国しても遅くはない」と語っていた(中原や、グエン・ソン將軍の根拠地ビンディンへ少佐と同行した旧日本陸軍第34独立混成旅団の伝語通訳大西貞男の回想)。その彼らが、切実な望郷の思いと飢渴に耐えて第2次大戦の2倍(10年)に及ぶ長期戦争を戦い抜いたことは、彼らにいわば感染したヴェトミンの愛国主義が本物であったこと、つまりヴェトミンにとって民族独立が革命に先立つ無上の価値であったことを示唆している

さて、日本人戦士の多くが純然たる愛国組織と思っていたヴェトナムの路線に、微妙な変化が現れたのは、中国内戦が中国共産党の勝利に帰し、中華人民共和国が成立した49年から、朝鮮戦争の勃発した翌50年にかけてである。北部で活動していた南洋学院出身の駒屋俊夫（ヴェトナム連区参謀部勤務）らは、「あのころから労働党員を中心とする政治学習会が頻繁に開かれるようになった。テーマの一つは社会主義的な社会改造だった。軍のそれぞれの機関・部隊で共産党員だけがひそかに会議を開き、機関・部隊はその決定に従って動くようになった」と語っている。共産党中央は、このころ初めて「革命」の方向に路線を修正し始めたのである。この路線修正は次第に明確なものとなり、北部では40年代末まで尊重されていた『愛国地主』や『愛国資本家』、さらに上・中流出身の非党員インテリが要注意人物として監視されたり、職務を解かれたりするようになった（\*）。

\* 当時タインホア省の山地チネで少数民族の一部族とともに独立戦争に協力していた東大出身の鉱山技師Yの失踪は、こういった政治路線の変化と無関係ではないかもしれない。彼は部族長の娘と結婚していたが、ある日、部族長一家もろとも消息を断った。1990年代初頭、彼の妹が日本からハノイを何度も訪れ、ヴェトナム外務省報道局、人民軍関係者、現地の老人などの協力を得て兄の運命を調べた。しかし、フランス軍との小戦闘で死んだという説がある一方、フランス側に寝返ろうとした部族長らのグループと、これを阻止しようとしたヴェトナムの戦闘の渦中で死んだという説もあって、真相は遂にわからなかった。

軍の統制システムも次第に変化した。政治委員制度はそれ以前からあったが、これが大隊（旧日本軍の中隊）以上の軍事単位すべてに厳密に適用され、しかも労働党員の政治委員は司令官とほぼ同格——実質的にはしばしばそれ以上——の権限を持つようになったのである。政治と思想にかかわる問題はもっぱら政治委員の管轄となった。指揮命令系統が政治分野と純軍事分野にくっきりと二分されたわけで、指揮命令系統が一本化されていた旧日本軍に育った日本人戦士たちには、これもすぐには馴染みにくいシステムであった。

独立戦争に参加した日本人の中には、このころ初めて共産党とヴェトナムに違和感を覚えたという人が少なくない。しかし彼らは、ヴェトナムの戦列にとどまって戦い続けた。この時期、すでに彼らはヴェトナム社会に余りにも深く溶け込み、現地妻子や戦友と切ろうにも切れぬ愛情と友情の紐帯で結ばれていたし、ヴェトナムの一員として武器を執った——つまりDRVに忠誠を誓った——からには、彼らの信頼を裏切ることはできないとい

う、いかにも当時の日本人らしい「名誉と仁義」の意識が強烈に作用していたのである。我々の聞き取り調査によれば、彼らの多くは、労働党のこのような路線修正が、49～50年に激変した国際環境によって余儀なくされた選択であることを薄々知ってもいて、愛国主義という基本体質には何の変化もないと信じていたようである。

1950年は第2次大戦後の世界史を画する重大な年であった。この年に勃発した朝鮮戦争によって、東西冷戦はにわかに武力対決の気配を帯びた。それまで中立的で、時にヴェトミンに好意的ですらあった米国(\*1)は、この年、明確にフランスの側に立って大々的な軍事援助を開始した。そしてDRV政府とその武装勢力は、仏軍の攻撃から身を守る力量をようやく身につけていたとはいえ、武器弾薬や食糧の補給という兵站線に大きな弱点を抱え、米国の援助で増強された仏軍の大規模な根拠地覆滅作戦に耐えうるかどうかは疑問であった(\*2)。

仏軍はDRVのヴェトバック根拠地を攻めあぐね、戦線は表面的には膠着(対峙)状態にあったが、46年以来、いかなる国からも軍事・経済援助を受けることのできぬ状態で孤独な戦いを続けてきたDRVは、ようやく反攻可能という段階に至って、物資の絶対的な不足、とりわけ現代兵器、輸送・通信手段、医薬品、被服その他あらゆる軍事必需物資の欠乏に直面し、つまり台所が窮迫し、実のところ危機を迎えようとしていた。まさにその時期に、DRVの支配地域は中国共産党の支配地域と地続きになり、新中国の本格援助を受ける道が開かれたのである。新中国は実際に援助を開始した。DRVの危機脱却と反攻準備には、それが必要不可欠であった。

\*1 大戦中の米大統領スズヴェルトはフランスのインドシナ再支配に反対し、米戦略情報機関(OSS)は大戦末期にヴェトナム北部の山岳地帯でヴェトミンを支援していた。OSSはDRV政府樹立の直後、ハノイに事務所を置いた。

\*2 ヴェトバック根拠地とその周辺で活動していた元日本人戦士の多くは、武器弾薬や食糧の欠乏に最も苦しんだのは47～49年であり、50年からは中国援助で各種の物資がにわかに供給されるようになったと回想している。

かつてヴェトナムを何度も支配した記憶を持つ中国人には、ヴェトナムを属領視する姿勢が顕著である。この点では中国共産党員も例外ではない。一方、中華歴代帝国の侵略に対する抵抗の歴史を生きてきたヴェトナム人には、中国に対する文化的親愛感と同時に、

それよりも強烈といってよいほどの警戒心がある。中国への期待感と警戒感と——このアンヴィヴァレントなベトナム人の意識は、共産党員を例外としないものである。抗仏戦争の時代にも、その意識は当然存在したであろう。明文の記録はないが、DRV指導者の胸中には、もしも仏軍が優勢に立った場合、新中国が朝鮮戦争のように直接軍事介入に踏み切るのではないかとという危惧感も皆無ではなかったのではないかと、と元日本人戦士の一人は推測している。そのような事態を避けるには、DRVは自前の軍隊だけで仏軍に勝たなければならない、自前の軍隊だけで勝つには新中国の援助が必要で、その援助を受けるには多少とも中国共産党の歓心を買うことのできるような政治姿勢を見せなければならなかったのではないかと。

中国共産党が何らかの形で要求したのか、それともベトナム労働党が自発的に選んだのかは判然としないが、いずれにせよ「革命」に向けての路線修正が、この時期の内外状況によって迫られたという一面を持つことは容易に推測できる。ある元日本人戦士は、そのことについて「馬鹿でなければ（路線修正がやむをえない選択であることが）感じ取れたはずだ」と井川に語った。日本人戦士の多くがそういう認識を共有していたとすれば、彼らがこの路線修正を受け入れて戦い続けたのは当然ということになる。

日本人戦士の一部が労働党の勧誘によって、または自発的に入党したのも主に49年以降、特に50年代初頭である。帰国後の彼らは、概してそのことを語っていないが、我々の調査では入党者は20名を上回っている。

DRV人民軍の中樞で働いていた中原によると、新中国の援助開始の少し前（49年）から、上級軍事幹部の作戦会議に中国人軍事顧問がしばしば顔を出すようになった。ある日の会議に出席していた中国人顧問二人は、ある重要な作戦に関するヴォー・グエン・ザップ総司令官やホアン・ヴァン・タイ参謀総長の説明に「反対」というに近い批判的な言葉を何度も口にした。ザップ將軍はしばらく黙って聞いていたが、やがて怒りが抑えられなくなったらしく、二人に「あなたがたはどこにいるつもりか。ここは中国の領土ではなくてベトナムの領土だ。戦っているのは我々であって、あなたがたではない。この会議場から即刻出て行ってほしい」と怒鳴った。中原はそのとき、DRV首脳部の自主独立精神に少しの衰えもないことを感じたという。

ベトナム労働党はこの修正路線を「革命」の方向にさらに推し進め、独立戦争終結（54年）ののち、北緯17度以北の北ベトナム全域で地主・ブルジョワ打倒の本格的な国家改造に着手した。新中国のそれを模倣した人民裁判がしきりに行われた。ヴェトミンの

闘士も、出身階層によっては処分の対象となった。それまで肩を並べていた戦友たちが「反革命分子」として処断されるのは、元日本人戦士には心理的に堪え難いことであつたろう。

この中国風の国家改造方針は55年に農民の大暴動を引き起こし、ホー・チ・ミン主席の自己批判とチュオン・チン労働党書記長の引責辞任によって収束したが、政府・党の指導者たちにも深い傷を残したらしく、古参幹部の多くはこの時代のことを余り語りたがらない。少なからぬ日本人と接触する機会があつたDRV初代財務相レ・ヴァン・ヒエンの日記（90年代末に刊行）も、46年12月19日の全国抗戦開始当日に始まり、51年11月26日で終わっている。

元日本人戦士の大多数は今なおベトナムに好意的で、かつての上官や戦友にも深い親愛感を抱いていることを前提としていうのであるが、井川のインタビュー要請に全く応じようとせず、電話による対話すら拒んだ人が、50年代後半からの帰国者（いずれも北緯17度以北から）にほぼ限られているのは、彼ら自身のみならず現地妻子とその近縁者にも影響の及んだその時代の急激な国家改造を思い出したくないからかもしれない。

ただし、こういう完全沈黙派の元日本人戦士は極めて少数である。北緯17度以南からの帰国者を含む元日本人戦士大多数は、50年代の国家改造路線に批判的ではあつてもベトナム労働党とヴェトミンが基本的に愛国者の集団であつたと信じ、その愛国心をベトナム人の妻や戦友と共有できたことを誇りに思っていることを付言しておこう。

## 個別事例研究

独立戦争参加日本人の事跡にはかなりの共通性があるように見えて、ヴェトミンに参加した経緯、DRV内部での地位と役割、ヴェトナム人との公私の関係、活動の場所、個人生活など、細部は実に多様である。ヴェトナムにおけるそれぞれの個人史が興味津々のドラマであるといつてよい。聞き取りを中心とする個別の調査研究は不可欠であろう。

我々は1954～60年に北緯16度以北から帰国した人々からの聞き取り調査の結果に、以南（特にサイゴン）に54年以降も残留して75年の第2次インドシナ戦争（ヴェトナム戦争）終結以降に帰国した人々からの聞き取り調査の結果を加え、さらに現地ヴェトナムの関係者（ヴェトミンの古参活動家、家族、人民軍関係者など）の回想や文献記録を照合して必要な事実を追加し、事実関係の誤りと思われる部分とプライバシーに触れる部分を削って、一応正確と思われる個別記録をまとめた。以下に代表的なものを提示する。第1次報告書に述べた人物については重複を避けて除外した。

元山久三の記録のうち、ヴェトミン参加前後の部分は極めて錯綜している。しかし、これはヴェトミン参加前後の旧日本軍人の典型的な行動パターンを示すものと思われるので、そのまま収録した。

## [藤田勇]

東南アジアには第2次大戦の前から多数の日本人が在留し、貿易、商店・農園経営、漁業、運送などの経済活動に従事していた。その数は大戦中、日本軍の展開に伴って急増した。軍そのものの膨大な需要などによる企業活動の拡大に加えて、現地行政や外交、さらには学術研究や教育といった活動も盛んになったからである。南方総軍司令部のあったヴェトナムにも、サイゴンとハノイを中心に、多数の政府要員と民間人が住むことになった。1943年、日本の敗色が明らかになるにつれて日本企業の撤退などにより総数は次第に減り、44年末からは兵員消耗を補うための「現地召集」によってさらに減ったが、それでも敗戦時になお数千人の日本民間人が在留していたと推測される。

敗戦後、彼ら民間人も少数ながらヴェトナムに加わったことは既述の通りである。彼らについては軍人と違って公式記録が皆無に近く、従ってどのような業種の者がどこでどのような活動をしていたかを確認することは極めてむずかしいが、我々の推計では、その総数は、DRVの政府・軍の機関に所属せず、自営業者として間接的にヴェトナムに協力していた者を含めて50名内外である。

彼らのうち、DRV政府機関で重要な役割を果たした人物としては、大阪商船ハノイ駐在員であった安藝昇一（早大出身）と、横浜正金銀行ハノイ支店員であった藤田勇（東京外語大出身）が最も著名である。第1次報告書で述べたように、独立戦争に参加した日本人は個人としての彼らの功績についてはほとんど語らないのが常であったが、この二人は特にその傾向が強かった。安藝は54年の第1次帰国グループに加わって帰国したのちヴェトナムの文化活動に関する小冊子を出版したが、これにも彼自身のことはほとんど書かれていない。しかも彼は帰国の十数年後（1958年）に死去したため、困苦に満ちていたであろう彼の日常活動を知ることは、今となってはもはや不可能といってよい。

藤田などDRV中枢部にいた日本人たちによると、安藝はフランス語、英語、ヴェトナム語に堪能であった。彼が顧問をしていたDRV中央の文化工作団には、レ・ヴァン・ヒエン財務相の娘も加わっていたらしい。

藤田は東京・浅草に生まれた生粋の江戸っ子で、東京外語大卒業後に横浜正金銀行に入社、仏語科出身であったためか、結婚翌年の1943年にハノイ支店へ単身派遣され、フランスのインドシナ統治機構を武力で接収した日本軍の明号作戦（45年3月）ののち、横浜正金銀行によるインドシナ銀行（仏領インドシナ連邦の中央銀行）ハノイ本店の管理

業務に従事、日本敗戦直後、日本軍の武装解除のため中国雲南省から南下してきた中華民国軍（雲南軍）への業務移管を準備すべくハノイ南方のヴィン（ゲアン省都）に赴き、雲南軍の臨時雇員となった。その作業は46年初頭に終わったが、彼は雲南軍の指示（「ハノイは危険」との理由）でヴィンとハノイの間にあるナムディン（ナムディン省都）に移った。やがて雲南軍は去り、ナムディンはヴェトミンの重要拠点となった。彼は同年秋、そのヴェトミンに誘われてハノイに戻った。すでに日本軍の姿はなかった。

ヴェトミン中枢は藤田が銀行員であったことを知っていたらしく、彼はただちにDRV財務省に配属され、ヒエン財務相のもとで財政機構の整備、通貨管理、さらに国家銀行設立準備の作業に当たることになった。タイン・トゥン（青い松）というヴェトナム名はヒエンの与えたものらしい。

財務省という役所はできたものの、財務管理や金融の機関を含む仏印時代の行政機構はすべて解体されていた。その方面の経験に富むヴェトナム人専門家は、ヴェトミンには皆無に近かった。財務省は、軍隊と同じく、いわばゼロに限りなく近い状態から出発しなければならなかった。それだけに近代的な財政と金融に明るい藤田は、DRV政府にとっては貴重きわまる人材であったろう。その藤田にしても、専門家としての腕を振るうには、状況は余りにも厳しかった。国土は戦火によって寸断され、政府中枢機関はいかなる国の援助も得られぬまま、圧倒的な火力を持つ仏軍の包囲網の中で防戦に明け暮れていたのである。それでもDRVの党・政府・軍の幹部たちは、この状況への臨床的対応だけでなく、近代的な国家機構を築くという長期目標を見失わなかった。財政や軍事の専門家が極度に乏しく、政府組織そのものも発足したばかりというのに、財務省だの参謀本部だのという堂々たる名称の中央機関を設立し、国家銀行設立の準備にまで着手したこと自体、その愛国的かつアンビシャスな姿勢を物語っている。

独立戦争に参加した日本人の中には、そういうヴェトミン幹部たちの姿が、明治初年の日本人の姿とダブって見えた、という人が少なくない。「だから命懸けで手を貸したかった」と。藤田も井川にそういう意味の言葉を洩らしたことがある。

46年末、仏軍とヴェトミン軍の戦闘がハノイ周辺でも始まり、藤田は財務省などDRV中央行政諸機関の幹部とともにヴェトバック根拠地に移った。初期の「庁舎」はすべて少数民族の高床式家屋の階下（階上は家主一家の住居）で、それは宿舍でもあった。「豚と同居していた」と当時のヴェトナム人スタッフはいう。

当時の財務省の最も重要な業務は、財政や会計の専門家を育成しながら、平野部すなわ



ち仏軍支配地域から食糧、衣料、医薬品その他の必需物資を購入するために、その地域で通用している仏印時代からのピアストル通貨を手に入れること、そのためにもDRV独自の通貨をつかって平野部住民の間に浸透させること、そして獲得した物資を戦況の変化に合わせて適正に配分することであった。財務省は戦時日本の統制局のような仕事もこなさなければならなかったのである。

紙幣（いわゆるホー・チ・ミン紙幣）は、46年12月の「全国抗戦」宣言のころ、すでにハノイで印刷されていた。DRV財務省はその印刷機をヴェトバック根拠地へ運んだが、付属資材の不足などからたちまち使用に耐えなくなり、紙幣は竹の繊維などでつくった日本の仙花紙のようなものにホー・チ・ミン主席の顔を謄写版で印刷した極めて粗末なものとなった（最高額は10ドン）。DRV最初の郵便切手も、同じ方法で財務省が印刷・発行していた。

財務省はまた、1946年末から48年にかけて、ヴェトナム初の国債を発行していた。農民から食糧を調達するのが主目的で、その額面も米で記載されていた。通常は1枚5kg、ほかに10～100kgの特別国債もあった。5年据え置きであったが、抽選で当たると1年で償還する仕組みになっていた。藤田は造幣事業のほかに国債発行の事業にも従事し、村々でルーレットを回してみせたこともある。

財務省の諸機関は47年以降、「安全区」のフクチャー付近に分散し、仏軍の空襲を避けてしばしば移動した。それらの建物（おおむね財務省スタッフ手製の、竹の柱に茅葺きの小屋）は、すべてジャングルの中にあった。空をゆっくり見上げることのできるの移動のときだけであった、と藤田は回想している。

ヴェトバックでの公務と私生活は困難を極めた。食糧調達には特に苦労した。食事は米飯とザオムン（水草の一種）とヌックナム（魚醤油）があれば上等の部類であった。動物性蛋白の入手には特に苦しみ、当時まだヴェトナム北部の山岳地帯にいた野生の虎（今は絶滅状態）を射殺して食ったこともある。衛生設備は極めて不完全で、藤田は何度もマラリアに罹患した。

財務省スタッフの月給は平均米38kgであった（\*）。15kgは自家消費、残りは貨幣に換えるか、あるいはそのまま日用雑貨の購入や貯蓄に当てるのである。しかし藤田には、彼の存在が極めて重要であったためか、特別に70kgの米が毎月与えられていた。ヴェトバック根拠地で上級または中級の顧問職に就いていた日本人には、軍事部門でも同格のヴェトナム人よりも多い給料の与えられるのが常であった（実戦部隊では必ずしもそ

うではなかった)。

\*レ・ヴァン・ヒエンが井川に語ったところによると、DRV中央政府の非軍事部門職員の月給は、米15～100kgであった。

その間、彼の直接の上司は、のちに財務相(レ・ヴァン・ヒエンの後任)や社会・労働・傷痍軍人相を勤めたダオ・ティエン・ティ(別名レ・ヴェット)であった。藤田が一時マラリアと国債発行事業による過労で意識不明の重体に陥ったとき、仏軍支配地域から取り寄せた液剤を注射して彼を救ったのはティ夫人であるが、それはフランス医学辞典を見ながらのシロウト医術であったという。

藤田とティは、実はそれ以前から知り合っていた。藤田がヴィンにいた45年秋、雲南軍はインドシナ銀行ヴィン支店の金で米を買い占めようとし、これを阻止しようとした藤田を投獄した。折しもティはDRVのゲアン省知事に任命されたばかりであった。彼は仏領時代末期にフランス公安当局に捕えられて死刑を宣告され、処刑寸前に明号作戦を発動した日本軍によって救出された独立運動家で、雲南軍と交渉して藤田を釈放させた。ティとのこの信頼関係が藤田のヴェトミン参加の大きな心理的要因となったであろう。

財務省はしばしば仏軍支配地域の農民から米を提供してもらい、代わりにホー・チ・ミン紙幣を渡していたが、この紙幣はその地域ではほとんど役に立たなかったから、これは実質的には買い上げではなくて借り上げであった。農民の方はこの取引に愛国心から応じていたにすぎない。財務省はこのほか仏軍にミカンなどを売ってピアストル貨幣を獲得するというような覆面組織も設けていた(藤田によると、一時はミカン1個が1ピアストルで売れた)。こういう秘密工作のために仏軍支配地域に潜入して殺された財務省の職員は少なくない。

この分野で活躍した元日本軍人は、日本敗戦直後にハイフォン付近でヴェトミンに加わった野波勝三郎である。野波はヴェトナム北部から中部、時には南部でも、こういう物資・貨幣調達活動に単独で従事していた(54年に帰国)。

藤田はDRV軍事部門にいた日本人と、一度だけ森林地帯を移動中に擦れ違ったことがある。その日本人(氏名不詳)は彼を日本語で呼び止めた。彼の方は、すぐには日本語で応ずることができず、そのことを陳謝したという。その後、二人はヴェトナムでも日本でも再会しなかった。その日本人はヴェトナムで戦死したとおぼしい。

ホー・チ・ミン主席は年に一、二度、中央諸機関を視察に訪れていた。いつも予告抜きで衛兵一人か二人を連れて突然現れ、日本人を見ると必ず近づいてきて「苦勞が多いだろ

うが、我慢してほしい」などと声をかけた。主席は同じく年に一、二回、中央諸機関の職員を集めて講義していた。出席は必ずしも義務ではなかったが、藤田は何回かこの講義を聴いたことがある。

国家銀行設立の準備は、その間にも少しずつ進められていた。財務省には元インドシナ銀行職員が数人いたが、彼らの知識は末端業務に限られていた。仏印時代には役職すべてをフランス人が独占し、ベトナム人はせいぜい地方支店の係長にしかなれなかったからである。そのため、この分野では藤田が実質的な指導者にならざるをえなかったようである（藤田がそう語ったことは一度もないが）。

藤田とともに国家銀行設立準備に努めていたベトナム人には、のちに財政・金融部門で枢要の地位に就き、1980年代末からのドイモイ（刷新）による市場経済化過程で大役を演じた人物が多い。その一人は、90年代初頭にベトナムで初めて設立された株式金融機関「越華（ヴェトホア）銀行」（本社ホーチミン市）の頭取となったヴー・ゴック・ニュオンである。

「銀行のことは、簿記、口座、現金管理その他、何から何まで藤田に教わった」とニュオンは井川に語った。彼によると、藤田は中国語にも通じていて、しばしば銀行業務に関する中国の本や雑誌を越訳してベトナム人スタッフ全員に教えていた。

財務省の紙幣は、中国援助の開始された1950年から中国で印刷されるようになった。国家銀行がヴェトバック根拠地で正式に発足したのは翌51年である。初期のスタッフは約30人、初代総裁は藤田の上司の一人グエン・ズン・バンであった。国家銀行はただちに通貨（銀行券）発行に着手した。これも中国で印刷された。ベトナムでは財務省のホー・チ・ミン紙幣、国家銀行の銀行券、仏軍支配地域のピアストル貨幣という3種の貨幣が通用することになった。いまベトナム国家銀行本店に展示されている当時の各種紙幣には、藤田ら初期財務省職員の汗と涙がにじんでいるとあってよい。

藤田は54年に帰国、しばらく中原光信や岩井古四郎とともに日越貿易会で活動したのち、1970年代に日越経済技術協力を組織し、両国の経済・科学技術交流に心血を注いだ。一銀行員としてのヴェトミン参加から協力会長としての活動まで、彼は経済・技術面におけるベトナム支援という一筋道を歩き続けたのである。

2005年10月、米寿（88歳）を迎えた藤田は、ようやく自分の過去を詳しく語る気になったらしく、個人としての体験を話してほしいという日越友好協会の講演依頼に快く応じた。帰国後初めてのことであった。しかし車椅子で演壇に上って五分後、昭和18

年（1943年）にベトナム行きの船が出航して……と話し出したところで急性心不全の発作を起こし、そのまま世を去った。

この項目に数点を追加しておこう。

1. レ・ヴァン・ヒエンが側近者の手を借りて最晩年に刊行した『一閣僚の日記』に最初に登場する日本人は、日本軍の輸送部隊にいたらしい専属運転手（ベトナム名ディン）である。DRV中央諸機関がヴェトバック根拠地へ逃れてまもない1947年1月12日、彼はディンの運転する車でホー・チ・ミン主席を囲む会議に出席した。往路も帰路も物凄い悪路で、帰路は夜間であったが、ディンは高度のテクニックの持ち主で、途中でライトが消えたにもかかわらず無事に彼を住居へ送り届けたという。ヒエンの部下には、このほかに日本人数名がいて、うち二人は鉱山技師であった（ルオンとトゥアン）。彼らが日本軍の仏印進駐のちベトナムの鉱物資源調査に送り込まれた民間人であったことは明らかである。これら財務省勤務日本人の本名は概してわからず、この日記の途絶えた51年以降の彼らの運命もわからない。井川は90年代後半にハノイでヒエンの自宅を訪問したが、彼はすでに90代という高齢に加えて病身で、旧部下の日本人たちのことなど詳しく話せる状態ではなかった。

2. 横浜正金銀行のハノイ支店は明治時代からあり、続いてサイゴン支店とハイフォン支店が開設された。日本軍の進駐のち、サイゴンやハノイには三井、三菱などの大商社やデパート（大丸と三菱）も続々進出した。日本企業の事務所は、ハノイではチャンティエン街とオペラ座周辺に密集していた。藤田によると、日本敗戦時の横浜正金銀行ハノイ支店長は、ジョン・レノン未亡人小野ヨーコの父であった。

3. 安藝の未亡人幸によると、彼は大学卒業後に陸軍に召集され、山梨の連隊に配属されたが、除隊後に大阪商船に入社、神戸支店を経て横浜支店に移り、1942年春にハノイ支店に赴任した。海と音楽の好きなロマンティストであった。日本敗戦後は全く連絡がなく、夫人が夫のヴェトミン参加を知ったのは数年後に未知の人物からの電話連絡によってである。54年に帰国したのち、安藝は日越友好協会に加わり、その機関誌『Viet Nam News』（1956年創刊）の編集に携わった。同誌掲載のベトナム文献の翻

訳は、安藝がほとんど一手で引き受けていた。「ヴェトナムは第二の故郷」というのが口癖であった。

彼の死後数年を経て、幸未亡人は作家石川達三から一通の手紙を受け取った。「ペンクラブの国際会議でモスクワへ行ったところ、ヴェトナム代表からAngei（安藝）の消息をたずねられた」という内容で、未亡人は彼の貢献が簡単に忘れられるような小さなものではなかったことを心ひそかに喜んだ。安藝家は彼の死後も音楽好きな一家で、指揮者の小沢征爾も若いころ同家に下宿していた。

4. 藤田は生前、横浜正金銀行ハノイ支店からは落合茂も独立戦争に参加し、中部のハティン省のヴェトミン地方部隊に属して戦っていたと井川に語った。しかし落合自身によると、彼は1943年に朝鮮で日本軍に召集され、台湾からサイゴンを経てヴェトナム北部に来た。彼は敗戦直後のことは語っていないので詳細はわからないが、彼の知人たちの話を総合すると、彼は日本敗戦の直後に離隊して一時的に横浜正金銀行ハノイ支店に身を寄せ、やがて独立戦争に短期間かかわったらしい。1972～73年に朝日新聞サイゴン支局長を勤めた井川の記憶によれば、彼は第2次インドシナ戦争（ヴェトナム戦争）の後半期に東京銀行（横浜正金銀行の後身）のサイゴン支店に勤めていた。夫人（ヴェトナム人）は南ヴェトナム解放民族戦線の秘密活動家であった。

## [橘信義]

1921年（大正10年）、徳島県で生まれた。42年、陸軍に入隊、満洲の関東軍で1年を過ごし、下士官になってから陸軍中野学校で諜報訓練を受け、フィリピンからサイゴンを経てハノイの第38軍（信兵团）司令部付の特務軍曹となった。翌年3月の明号作戦を準備するためであった。明号作戦のあと、フランス軍諸部隊追討のためライチャウ省など北部各地を回った。ラオス国境のソンラ省で日本敗戦を知り、大雨の中を1週間歩いてハノイへ帰った。八月革命さなかのハノイ市内の至るところにヴェトミンの金星紅旗（のちのヴェトナム国旗）が翻っていた。橘はヴェトミンの組織力に驚いた。

上級・中級士官の多かったインドシナ駐留日本軍の中野学校出身者たちは、敗戦後も「残置諜者」として現地に残留して諜報活動を行うための「安機関」をつくっていた。北部における「安機関」の中心人物であったI大尉やO大尉は、諜報要員であったがゆえに連合軍に処罰されるのを恐れてもいたらしい。第38軍離隊者名簿によると、この2名は45年10月15日に離隊している。彼らの指揮下にあった橘もこれに同調して離隊せざるをえなかった。

I大尉らは離隊後、高原避暑地のサパ（ハノイ西北）でヴェトナム国民党に対する軍事訓練を始めた。橘はたまたまアマーバ赤痢に罹ったので、サパからハノイに戻って入院した。DRVの独立宣言のあと、ヴェトミンが全国で統治の主導権を握り、国民党が孤立したため、I大尉らはサパから中国へ逃れようとしたが、途中でヴェトミンに全員殺されたらしい。底辺の民衆にまで根を張るヴェトミンの情報収集能力は物凄かった。橘にいわせると、国民党は「浮いていた」。

橘が退院してまもなく、第38軍で橘の通訳をしていたヴェトナム人が彼の隠れ家にやってきてヴェトミン参加を勧めた。続いて、すでにヴェトミンに加わっていた湯川克夫とその仲間の春木某という元軍人が来て、橘をヴェトミン部隊の軍事訓練に誘った（\*）。「ヴェトナム人の愛国心に応えるのが我々日本人の務めだ。共産党もへったくれもない」と。橘の記憶によれば、湯川はもともと民間人だったが、敗戦の少し前に現地召集で軍人になったらしい。橘はこの勧誘に応じてハノイに隣接するハドン省へ行き、湯川の斡旋でヴェトミン軍の小隊長級幹部（旧日本軍でいえば分隊長級幹部すなわち下士官）を養成する学校に勤めることになった。この学校はヴェトミン正規軍第66中団（連隊）の管理下にあった。チャン・ドック・チュン（漢字では陳徳忠）というヴェトナム名は、このころ自分

でつけた。

\*湯川はハイフォンで離隊した第38軍の元士官で、日本敗戦直後にヴェトナムに加わり、北部で仏軍と戦ううちに脚部に重傷を負ったが活動をやめず、54年に帰国したのち、元日本人戦士の親睦団体「ベトナム友の会」の幹事役を勤めた。春木はヴェトナムで病死した。この人物の名は旧厚生省の仏印未帰還者名簿その他、日本のいかなる関係名簿にも記載されていない。

仏軍との全面衝突に備えて、ヴェトナムは軍事幹部の養成を急ぎに急いでいた。そのためハドンの下士官学校も1期3ヶ月という短期促成型で、生徒は1期50人とされていた。校長は旧仏領インドシナ軍（仏印軍＝フランス軍将兵に仏印諸民族の男子を加えた現地編成の軍隊）の元尉官で温厚な人物、教官は橘と元日本軍下士官熱海政孝（宮城県出身）の二人だけであった。

生徒は軍事については全くのシロウトであった。文盲の生徒もいて、多少教育のあるヴェトナム幹部が彼らに文字を教えていた。教育時間の2～3割は政治を含む一般教養（校長が担当）、7～8割は橘と熱海による軍事訓練であった。橘らは「気ヲツケ、休メ」という初歩中の初歩（規律）から教えなければならなかった。そこから匍匐前進、散開、突進などの基本動作へ、さらに銃器操作や陣地構築（要するに塹壕の掘り方）や白兵戦やトーチカ攻撃へと進んだ。小銃は極めて少なく、竹で代用するしかなかった。最初は日本語の通訳がついていたが、橘と熱海は懸命にヴェトナム語を学び、やがて自前のヴェトナム語で教えることができるようになった。

学校での食事は日本人教官優先で、当時としては至れり尽くせりといってよかった。完全には健康を回復していない橘には、いつもオカユが提供された。

橘によると、この学校はDRV中央諸機関とヴェトナム軍主力がヴェトバック根拠地にたてこもり、仏軍がヴェトナム北部の平野部を制圧し始めた47年半ばまで存続していた。校長が高齢（60歳前後）で体調不良であったため、46年後半からは橘が実質的な校長となった。その後、橘は熱海と別れ、フン・テ・タイを司令官とする第66中団の戦闘部隊に移った。

この中団の主要任務は、ヴェトバック根拠地を粉碎しようとする仏軍主力の背後を脅かして兵力分散を強いる遊撃戦（小陣地攻撃、兵站線分断など）であった。橘は最初は副大隊長格の顧問、のちに大隊長（旧日本軍の中隊長）として、紅河下流域のニンビン省（\*）からハノイ西方の山地ホアビン省を経てラオスに接する中部最北端のタインホア省まで、

日本でいえば南関東と信越地方に相当する広い地域を転戦した。移動と戦闘に明け暮れる日々であった。同じ場所には7～10日しかとどまらなかった。この地域には日本人の正規軍実戦部隊指揮官はほかにいなかったうえ、小事にこだわらない性格と勇敢さに加えて敵状把握——この点では元日本軍諜報要員としての知識と経験が役立った——が的確であったために、彼は部下にも各地住民にも手厚く遇されていた。ヴェトバックにいた日本人戦士とは違って、栄養失調に苦しむようなことは一度もなかった。

\* ニンビン省はトンキン湾に面する低湿地で、無数の河川と沼がある。のちにタインホア省で活躍した杉原剛（海軍下士官）や、DRVの軍事参議官となった中川武保（海軍軍属）は、中国の海南島からこの地方に船で食糧調達に来てヴェトミンに拘束され、その説得によって独立戦争に参加したという。同省のファジエムは17世紀にフランス人宣教師が初めて上陸したヴェトナム・カトリック教会の聖地で、カトリック信徒の農民が多く、その一部は親仏武装集団「衛聖団」を組織してヴェトミンと戦ったが、同省周辺で活動していたヴェトミンの日本人戦士伊藤久雄らによると、ヴェトミンはカトリック信徒を敵に回さないよう、ファジエムでの軍事行動を極力避けていた。やや余談になるが、第2次インドシナ戦争（ヴェトナム戦争）のとき米国がサイゴンに擁立した反共政権の最強の支柱となり、いわゆるカトリック右派を形成して、最後までDRVの人民軍および南ヴェトナム解放民族戦線と戦ったのは、独立戦争終結後の1954～56年に南へ逃れた数十万の北のカトリック信徒で、その多くはニンビン省と隣のタイビン省の出身であった。

武器は仏軍に比べて極度に貧弱であった。仏軍の自動小銃と野砲と航空機に対して橘の部隊には単発銃とわずかな迫撃砲しかなく、火力には格段の差があった。この差を埋める最良の方法は、住民の協力を得た夜間の奇襲と待ち伏せ攻撃であった。

48年秋（?）、橘の部隊はホアビン省で仏軍陣地を夜襲し、激戦の末によりやく奪取に成功した。これが最初の本格的な陣地攻撃であった。ヴェトナム人兵士3名が戦死し、橘自身も上膊部に銃弾2発を受けた。完治まで1年近くかかった。

分厚いコンクリート壁を持つ仏軍のトーチカにはいつも悩まされた。トーチカは要所々に必ず設けられていた。ニンビン省で仏軍の小型砲艦に待ち伏せ攻撃をかけたときも川沿いのトーチカ群が障害となった。橘の部隊は、夜陰に乗じて匍匐接近し、射撃用の



狭い開口部から手榴弾を投げ込むという日本軍伝統の方法で、何とかこの障害を克服することができた。

ラオスの首都ヴィエンチャンなどからの仏軍の来襲を阻止するため、橘の部隊はラオス領内でも2回迎撃作戦を行った。1回に2～3ヶ月をかけた。山々の谷間に小屋をつくって宿営し、数日後には別の谷間に移るという移動キャンプ生活であった。上空には常に仏軍機が旋回していたため、橘は宿営地に着くと部下全員にまずタコツボ（個人用防空壕）を掘らせた。だが二度目のラオス作戦から帰る途中、炊飯の煙を仏軍機に発見されてナーム弾攻撃を受け、兵士2名が死んだ。橘と大隊政治委員は第66中団司令部に戻ったとき、その責任を問われて反省書（始末書）を書かされた。軍事行動中の失策について責任を問われたことは、これ以外にない（\*）。

\* 橘自身は語っていないが、これは状況から推して52年以降、恐らく53年のことと思われる。北部の実戦部隊には、この時期になっても少数ながら橘のように大隊長級（旧日本軍では中隊長級）の指揮官を勤める日本人戦士がいた。

49年の中華人民共和国成立は中団司令部からの情報で知った。翌50年から中国の大々の援助が始まったことは、中国製の服、帽子、靴や武器が支給されるようになったことですぐわかった。ディエンビエンフー決戦直前の54年春、第66中団にも中国軍の士官（軍事顧問）が来て、毛沢東思想などを講義した。その少し前からDRVの国内政策は急変し、それまでヴェトミンに協力していた者を含む地主の土地を没収して小作人たちに分与する土地改革が部分的に始まっていた。橘は作戦行動中に通過した村で、貧農が「地主・富農」を反革命分子として告発する中国式の「人民裁判」を見たことがある。

54年、橘は「帰国させるのでタイグエン省北部に集合せよ」というDRV中央からの通達書をタインホア省で受け取り、数日間歩いて集合地点のドイツーに着いた。2回の集合のあと、彼はハノイに数日間滞在し、妻子と別れを惜しんだ。出発直前、かなりの額の慰労金をもらったが、これは妻子に残した。

帰国後はヨーグルト販売、食堂経営、石油販売などをして暮らし、その後は隠居した。ヴェトナムで結婚した妻は現地ですべて病死した。長男はサイゴン、次男はハノイに住み、いずれも2004年に訪日して父の橘と半世紀ぶりに再会した。

戦勝勲章など2種の勲章を授与するとの決定はヴェトナムで知っていたが、現物は中川武保、小森由男らとともに1986年12月に東京のヴェトナム大使館で受け取った。橘

にとって、これは彼の生涯の意味を示す至宝である。

## [駒屋俊夫]

1923年、江戸時代から続く福井市の薬種問屋に生まれた駒屋は、地元の中学校を出た直後の42年、日本政府がサイゴンに設立した南洋学院に、激しい第1期選抜試験を経て入学した。南洋学院は東南アジア唯一の日本の公教育機関で、駒屋はほかの同期生と同様、大東亜共栄圏建設の熱情に燃える少年であった。第2次世界大戦たけなわの同年11月にサイゴンに到着し、仏越両国語と農業経済を学ぶうちに戦況は悪化の一途を辿った。44年、第1期生は兵力不足を補うための繰り上げ卒業で仏印派遣軍に召集され、駒屋はハノイに司令部を置く北部駐屯の第21師団（討兵団）第51山砲連隊に配属された。

日本の敗戦はハノイ西北のフートーで聞いた。日本の勝利を信じていた彼は、そのショックに堪えかねて自殺しようと拳銃まで用意したが、そのとき現地除隊の知らせが届いたので、ベトナムで生き抜こうと決意した。彼はハノイに戻り、大戦中から支店を構えていた多数の軍需品調達会社の一つ「下村洋行」に身を寄せた。

日本軍諸部隊からは脱走者が続出していた。DRV政府樹立直後のころで、ヴェトミンが民衆の圧倒的な支持を得ていたとはいえ政情は安定せず、ヴェトミンとベトナム国民党（\*1）が旧日本軍将兵の勧誘競争を演じ、フランス軍もまた旧日本軍の脱走将兵を捕えたり味方に引き入れたりしていた。旧仏印軍は45年3月の日本軍の明号作戦で解体されたが、日本敗戦後、この植民地軍のフランス人将兵は新たな軍隊を編成して、日本軍に占拠されていた主要都市の旧キャンプに戻っていたのである。彼らは南部では英軍の支援を得てヴェトミンと銃火を交え、本国から派遣された増援部隊とともに9月にサイゴンを制圧した。北部にいた旧仏印軍の仏人部隊は、11月に本国からの大部隊がハイフォンに上陸するまで、ベトナム独立問題に関する仏越交渉中とか武器不足とかの事情もあって軍事行動を差し控えていたが、それでも旧日本軍離隊者の動きには警戒を怠らなかった。仏軍の最も恐れたことの一つは、旧日本軍将兵のヴェトミン参加であった（\*2）。

\*1 ヴェトナム国民党は1927年に結成され、武力独立闘争に失敗、処刑を免れた指導者たちは仏印当局の弾圧で中国に逃れ、45年に中国国民党軍に従って帰国、DRV政府に一時参加したが、ヴェトミンと独立闘争の主導権を争って敗れ、のちに旧王バオ・ダイとともにサイゴンで傀儡政権のヴェトナム国政府に参加した。

\*2 独立戦争の前半期に、特に南部で、仏軍がヴェトミン軍に加わ

った旧日本軍将兵を殺害、逮捕、あるいは寝返り工作の主要対象としたのは、彼らをヴェトミン軍の抗戦力のかなめと見ていたからである。ヴェトミンの側も日本人の仏軍側への寝返りを恐れていた。今なお真相のよくわからない日本人の失踪事件は、こういった双方のいささか過剰な警戒心と無関係ではなかったかもしれない。

ヴェトナム残留を決意したころの駒屋は、再び武器を持つなどとは考えていなかった。何らかの民間事業でヴェトナムの人々に貢献しながら、自己の運命を開拓したいと思っていた。

これは独立戦争参加日本人全員について多かれ少なかれ共通していることであるが、駒屋は南洋学院在学中からヴェトナム社会とヴェトナム人にいかなる抵抗も感じなかった。「何もかも日本に似ていた。ヴェトナム人の情感の形までが似ていた。日常のつきあいも、冠婚葬祭のときのふるまいも、すべて日本式にやればよかった。南洋学院の生徒はサイゴンの若い女性に大モテだったが、彼女たちは男まさりの強気という一点を除けば、心理表現まで日本女性にそっくりだった」と彼は回想している。

45年9月下旬ごろ、彼は旧日本軍の御用商人であった窪田某の家で日本軍離隊者3名と出会った。ヴェトナム語のわかる駒屋は、窪田に頼まれて、彼らを連れてDRV政府の末端行政機関へ行き、在留希望を申し出て即日許可され、ハノイ市外への通行証と地方行政機関への紹介状をもらった。彼ら5名は、新生活の場を捜して、窪田の知人のいるバクザン省（ハノイ東北隣）のボハへ出発した。

リーダー格の窪田は長野県出身の真面目な中年男で、日本軍離隊者3名はいずれも28歳の元陸軍伍長紺野豊作（岩手県出身）、元陸軍兵長丹尾久二（福井県出身）、元軍曹日野某（満蒙開拓団出身）であった。紺野と日野はヴェトナム女性と婚約していて、それがヴェトナム残留の動機の一つであったらしい。

5人は窪田の知人の世話で3,000haほどの桑畑と洋風家屋を借りて、サツマイモの栽培を始めた。しかし、これは失敗に終わった。窪田は46年春、持ち金の残りを駒屋に渡し、日野とともに、折から日本軍諸部隊が帰国のため集結していたクアンイエン（ハイフォン港近傍）へ去った。

残された駒屋ら3名は、近くの山麓に小屋を建てて移り住み、木炭の製造・販売を始めた。当時ヴェトナム北部ではガソリン不足のため自動車の大半が木炭を燃料としていたし、紺野の実家は炭焼き農家であったからである。住民は極めて好意的で、地元の営林署長は

彼らに木炭用の木の最も多い山の伐採権を無償で与え、ある商人は無利子で資金を貸してくれた。農家の寡婦らしい中年の女性は、8歳ほどの少年とともに住み込みの炊事・雑用係として無給で彼らを助けた。

南洋学院で衛生班長をしていた駒屋には多少医学の心得があり、あるとき熱帯性潰瘍に罹った村民を治療したことから、当時のヴェトナムの村にはほとんどいなかったバクシ（博士＝医師）として重宝がられるようになった。木炭はよく売れ、多少の貯金もできた。「それなりに楽しい日々だった」と駒屋は語っている。

46年の夏も終わるころ、駒屋はDという日本人の訪問を受けた。Dは駒屋と同時に日本軍に召集された下村洋行の社員で、ヴェトナム人がらみの同社のトラブルを処理するために駒屋に通訳としてハノイに来てほしいと頼みに来たのである。駒屋は気軽に引き受け、Dとバスでハノイに向かう途中、バクニン市の旧仏印軍兵舎に元日本軍人がいると聞いて立ち寄ってみると、旧第21師団山砲兵第51連隊の北風政市大尉をリーダーとする6名の日本軍離隊者がいて、ヴェトミンの新兵を訓練していた。たまたま昼休みで、駒屋が同郷の北風らと歓談していると、突然ヴェトミン軍の一隊が乱入して日本人全員を訓練所の一室に監禁、所長に事情説明を求めようとした駒屋と北風を1kmほど離れた別の兵舎へ連行し、2日後にフランス軍が接近したということでさらに2～3km離れた村の古いデン（神社）に閉じ込めた。数日後の夜、監視のヴェトミン民兵グループは二人を近くの墓地へ連れ出して銃殺しようとした。駒屋を狙った民兵の銃は故障していた。自力で縄を解いていた駒屋は、その民兵と格闘して辛うじて脱走に成功した。北風は殺された。後日、駒屋は北風の部下5名とDもバクニンで殺されたと聞いた。

仏軍の北部侵攻（46年11月）が目前に迫っていたそのころ、ヴェトミンは外国人のみならず所属不明のヴェトナム人のちょっとした動きにも極度に神経質になっていた。そういう緊迫した空気の中で、戦争を経験したことのないバクニン新兵訓練所のヴェトミン部隊指揮官は、駒屋ら見知らぬ日本人二人の突然の訪問に驚き、北風らとフランス側への寝返りを打ち合わせるために来たと誤解し、恐怖感もあって独断で彼らを処刑したらしい。こういう一種の誤殺事件は、異常な混乱状態にあった当時のヴェトナムでは珍しくなかった。

駒屋は30kmの野道を歩いてポハに戻った。ポハのヴェトミン指導者は駒屋の事情説明に「気の毒なことをした」とだけ答え、駒屋ら3名の日本人の定住と木炭業の継続を無条件で許可した。だが、仏軍大部隊のハイフォン上陸に続いて全国抗戦が始まったとたん、

木炭の売れ行きは急減した。仏軍の進撃を阻むための道路破壊などで自動車の走行がむずかしくなったためである。そのうえ駒屋ら3名は、それぞれ近辺の村々から民兵訓練を依頼され、一緒に生活することもむずかしくなった。

47年2月、駒屋はバクザン省の民軍本部（民兵部隊本部）に呼び出され、省内各地の民兵部隊に配るための同省地図の手書きコピーを大量につくってほしいとの要請を受けた。当時のヴェトミンには測地や地図作成の専門家が極めて少なく、地図自体も極めて乏しく、駒屋はこの要請に応じたのをきっかけに、軍事地図作成のただ一人の要員として、同省民軍本部とともに仏軍の攻撃を避けて転々と移動することになった。彼は移動先の村々で歓迎された。ある村の村長の娘との結婚を迫られて困惑したこともある。もう木炭業には戻れなくなっていた。

1949年初頭、彼はヴェトバック連区参謀部の作戦班に配属され、バクタイ省ダイツ一の同参謀部に移った。主な仕事は、前線から集まる戦闘報告を総合して、折々の作戦に必要な軍事地図を作成し、これを作戦参加諸部隊に配布することであった。作戦用の地図作成は彼一人の手に委ねられることになった。彼は参謀部の必要に応じて作戦そのものに関与することもあった。

同年、仏軍がヴェトバックの要衝バクカンへの侵攻を企てたとき、参謀部の幹部の大半が現地へ出払ったため、参謀長はある作戦の立案を駒屋に命じた。駒屋は自作の軍事地図を片手に、対仏抗戦の全体戦略を述べた共産党書記長チュオン・チンの『戦争は必ず勝つ』を読み返しながらか、待ち伏せ、奇襲、後方攪乱などを含む作戦計画を練り上げた。後年わかったことであるが、このときの仏軍の侵攻作戦には、南洋学院同期のKが参加していた。Kは仏軍正規部隊に加わって54年までヴェトナム北部でヴェトミン軍と戦った唯一の日本人で、戦争終結のときはハイフォンのドーソン灯台守備隊にいた。Kの手記によると、当時の日本人としてはすこぶる奇異なこういう行動の一因は、彼の胸中に根づいていたフランスへの文化的憧憬であつたらしい。一方でアジア植民地諸民族の解放を志向しながら、他方で欧米文化に惹かれるという近代日本人——特に都市知識人——の矛盾した心理は、このKの姿にも染み出ている（本報告書「歴史的評価」参照）。

ヴェトミン軍内部で「整風運動」（自己批判・相互批判運動）が始まったのはこのころである。続いて「階級自己申告制度」が設けられた。それまで大隊長とか中隊長とかのポストしか持たなかった軍人に階級を与えることにし、能力や実績にふさわしいと思う階級を本人に申告させたうえで、それが妥当であるか否かを所属部隊の全員討論で決めることに

したのである。階級によって給料が違ってくるということもあって、泣く者もいれば怒る者もいるという全員討論の情景は、しばしば駒屋の微苦笑を誘った。駒屋もこういう討論を経て大尉に任命された。

連区参謀部にいたヴェトミン戦士の多くは、当時のヴェトナムには数少なかった中卒以上のインテリで、その半数以上は共産党（51年以降は労働党）の正式メンバーであった。しかし駒屋は彼らに全く違和を感じなかった。彼らは当時の日本人大多数の抱いていたような共産党員イメージとは違って、イデオロギーより現実、理屈より人情というタイプの、ごく平たくて開放的な人々であった。

ある日、駒屋は中級党幹部の一人が小さな村の神社に礼拝するのを見て、「マルクス主義では宗教は阿片ということになっているが？」とたずねた。その幹部は「私たちは一般民衆の信ずる宗教を認める。そして私たちもその宗教を信ずるという立場で彼らと話し合う。それが民主主義ではないか」と答えた（\*）。駒屋が民主主義という言葉聞いたのは、実はこのときが始めてであった。彼の思考は少々混乱した。ヴェトナムの共産党が通常の意味の共産党とは思えなくなった。

\*これが党幹部個人の見解であったのか、当時のインドシナ共産党の公式見解であったのかは判然としませんが、この党が各種宗教を国家の監督下に置くことはしても、原理的に宗教を否定するような方針を打ち出したことがなく、政策的に禁圧したこともない数少ない共産党の一つであることは事実である。

50年3月、駒屋は前年から開始された局地反攻作戦の一つであった「東北作戦」の前線司令部へ派遣され、100kmの行程を歩く途中、3年ぶりにボハの町に立ち寄り、かつて彼を息子のように可愛がってくれた老女の家に一泊した。駒屋は彼女を養母と思い、「メー」（母さん）と呼んで慕っていた。

翌早朝、「メー」の家を出てもなく、駒屋はカーキ色の軍服を着ていたためか仏軍機の機銃掃射を受け、腹部と腰に瀕死の重傷を負った。彼はたまたま通りかかったヴェトミン兵2名によって近くの洞窟にあった野戦病院へ運ばれ、ヴェトナム人軍医の懸命の手術で九死に一生を得た。その病院で3ヶ月、さらにボハの老女の家で1ヶ月休養したのち、ドイツの連区参謀部に復帰し、作戦班から情報班に移った。

彼の新たな任務は、北部全域から集まってくる敵情報を総合・分析し、これにもとづいて情勢の推移を予測することであった。ホアン・ヴァン・タイ人民軍参謀総長の主宰する

部隊長会議で情勢報告をしたこともある。

彼は53年、始めて大型作戦の最前線に出た。ランソン～モンカイ間の中越国境から中国広西省にかけて、中国国民党軍の残存部隊（兵力約5万）を掃討するための2ヶ月に及ぶ国外作戦に派遣されたのである。何度か危地に陥りながらも彼は連区参謀部に生還し、54年、北緯16度以北からの第1次帰国団に加わって故郷の福井市に帰った。13年を経たの帰郷であった。駒屋家の嫡男であった兄は第2次大戦中に戦死していたので、彼は兄の妻を娶って家業の薬品会社の経営者となり、16度以北から帰国した元ヴェトミン参加者百余人の親睦・相互扶助団体「ベトナム友の会」に加入、1980年代末に死去した湯川克夫の後継幹事として一死期を悟った湯川に頼まれて一帰国者とその家族の面倒を見続けた。

ボハで炭焼きをしていたころ、駒屋ら3名の日本人の小屋に住み込んで雑用とこなしていた女性は、抗戦終了前に病死し、駒屋と炭焼き仲間の丹尾が埋葬を手伝った。丹尾は抗戦終了までヴェトミン戦士として活動し、駒屋と一緒に帰国した。もう一人の炭焼き仲間の紺野も抗戦終了後に帰国した。紺野は恋人のヴェトナム女性と結婚して、50年ごろから北部で行商をしていたが、妻は彼の帰国前に男女二人の子を残して死んだ。子供たちはヴェトナムに残った。

炭焼き生活のころに養母同然であったボハの「メー」は、52年ごろの「地主打倒」運動で粛清され、二人の息子のうち弟の方はサイゴンへ逃れた。兄の方はボハの町長を勤めていたが、その後の消息はわからない。

バクザン省で殺された北風大尉は、日本敗戦直後にハイフォンに近いファライの女性と結婚し、子供もいたらしいが、彼女らの消息は不明である。井川が旧第51山砲兵連隊の関係者から聞いたところでは、北風は日本敗戦前からヴェトナム独立運動への共感を口に、敗戦直後にはひそかに部下たちをヴェトミン参加に誘っていた。その北風が当のヴェトミンによって誤殺されたのは、抗戦主体（DRV政府・軍）の指揮命令系統がまだ確立されていなかった混乱期の悲劇といってよからう。ただし、54年までヴェトミン軍の一員として戦った熱海政孝（チャン・ドック・フン）によると、北風のグループにはヴェトミン兵に対して侮蔑的な態度を見せる者がいて、訓練所の待遇に苦情を言い立てたりしたために、日本敗戦前に北部でしばしば行われた日本軍のヴェトミン討伐の記憶も重なるために、訓練所長らは「日本ファシスト」という疑惑の目で彼らを見ていた形跡がある。北風と同じ部隊から脱走した熱海も一時はこのグループに加わっていたが、危険な事態を予感して



訓練所を離れたために助かったという。

#### [井川付記]

仁尾（ヴェトナム名ルオン・ゴック・ティン）は1939年に故郷の福井県で陸軍に入隊、第21師団に配属され、対米開戦の41年に中国からハイフォンへ移動、そこにしばらく駐屯してから師団司令部所在地のハノイに移った。ハノイでは野戦貨物廠に勤務していた。中国戦線からタイなどに向かう部隊のために食糧や衣料を調達するのが仕事であった。そのころ日本軍に物資を納入していた安宅産業のスタッフ内海某と知り合って、ヴェトナム独立に寄せる彼の熱情に触れたのが、日本敗戦直後に部隊を脱走する動機の一つになったという。敗戦日本に未来はないという気分もあった。

仁尾が井川に語ったところによると、内海は日本軍の仏印進駐（40～41年）のはるか前にフランスへ留学に行く途中、寄港地のサイゴンで日本人の「芸者」（第2次大戦前に東南アジア各地で春を売っていた「カラユキさん」と思われる）と恋仲になり、そのままヴェトナムにとどまった。仁尾が出会ったころは50歳前後のスマートな紳士で、日本人の夫人（前記「芸者」）との間に二人の娘がいた。内海は日本敗戦後に安宅産業を辞め、一時は日本軍が45年3月の明号作戦で擁立したバオダイ政権のチャン・チョン・キム内閣やヴェトナム国民党に協力していたが、同年9月のDRV政府発足ののちヴェトミンへの協力に転じ、46年12月にハノイが仏軍に占領されたあと、妻子とともに市外のどこかへ逃れた。もしかしたら彼は日本軍の特務要員で、そのために仏軍に睨まれていたのかもしれない。

炭焼き仲間の駒屋がヴェトミン軍中枢に移ってボハを離れたのち、紺野もほどなくハノイへ去った。その直後、仁尾はボハに来たヴェトミン正規軍の一隊に拘禁されたが、DRVバクザン省行政副主席の介入で釈放され、村々を巡回しながら民兵部隊の組織と訓練に明け暮れることになった。49年からは自分の組織した民兵部隊を率いて、しばしばバクザン省内の仏軍陣地に奇襲を試み、逆に包囲されたり仏軍機に襲われたりして何度か九死に一生を得たこともある。

50～52年、仁尾はバクザン省当局の命令で、同省内でヴェトミンに敵対していた華人系武装集団（彼によれば「匪賊」）の帰順工作を行った。華人系武装集団は総じて中国共産党には敵対的であったが、なぜか日本人には好意的で、そのために仁尾の帰順工作はい

ずれも成功した。最初に帰順させた華人系武装集団の頭目（通称マジナム）の妻（ヴェトナム人）の故郷は、DRVのヴェトバック根拠地の南端に位置するタムダオ山に近い温泉地で、仁尾はそこに行ったとき日本人がいると聞いて会ってみたら、それは内海であった。内海は仏軍支配地域に出入りして通訳などで稼ぎながらヴェトミンの物資調達などに協力していたらしいが、詳しいことはわからない。内海の娘二人はすでにヴェトナム人男性と結婚していた。

二つ目の武装集団に対する帰順仕事を終えた直後、仁尾は中国人民解放軍の戦闘部隊が現れたことに驚かされた。中隊級のその部隊は、中国国民党につながる華人集団を一掃するため、ひそかに中越国境を越えていたのである。それがDRV中央の了解を得た行動であったかどうかは不明である。

\* 公式の戦史によれば、ヴェトナム独立戦争の全期間を通じて、中国人民解放軍の戦闘部隊がヴェトナム領内に足を踏み入れたことは一度もない。

その間、仁尾はバクザン省当局の要請で2ヶ月に一度は仏軍支配地域に潜入し、ヴェトバック根拠地に供給するための食糧、衣料、薬品などの調達にも従事した。防寒衣用の綿が足りないというので、遠くタインホア省までヴェトナム人の人夫約50人を連れて綿花を仕入れに行ったこともある。取引相手は主にヴェトミンに協力していた日本人で、彼らはすべてヴェトナム女性と結婚していた。その一人は紺野であった。仁尾は50年、仏軍機に銃撃されて重傷を負った駒屋に、当時極めて入手しにくかった特効薬の粉末ペニシリンを送ったが、これも日本人の「ヴェトミン商人」から購入したものであった。

52年末、仁尾はバクザン省当局を通じたDRV中央の指示で、民兵訓練のためランソン省に移った。ランソン省の主要部分はすでにヴェトミンの天下となっていて、彼は行く先々の村で歓迎された。食べ物と酒に不自由はしなかった。53年末、彼はランソン省行政主席から表彰状を受け、ほぼ同時に同省婦人同盟の世話でヴェトナム女性と結婚した。約半年後、北緯16度以北にいた日本人の集団帰国が決まり、彼は54年11月、第1次帰国団に加わって単身帰国した（現地家族の同行は許されなかった）。仁尾は後年、大阪で父の結婚斡旋業を継いだが、皮肉にもヴェトナムに残した妻と再会する機会は遂に持てなかった。

紺野は59年または60年に帰国し、養子縁組で小笠原と改姓した。

内海とその妻子がどうなったかはわからない。彼の名前は仏印残留日本人と帰国者のいかなる名簿にも記載されていない。ヴェトナム中部の人民軍野戦部隊で活躍したのち59

年か60年に帰国した内海静男とは明らかに別人である。

## [宮崎勇雄]

長野県出身の陸軍下士官。ベトナム名カオ・キイ・フック。対英米戦争の始まる前、海軍省や東京・青山の電話局に勤めていたが、もともと貧乏な家の生まれなので、軍にいたら一生食っていけると思って入隊を志願した。対米英戦争勃発ののち陸軍第21師団(討兵团)に所属してサイゴン経由でベトナム北部のファライ(ハノイ東方)へ。所属部隊の山砲兵第51連隊は現地編成の混成部隊であった。1945年3月の明号作戦ではハノイ西北のヴェトチーでフランス軍と戦い、中国やラオスへ逃れようとする仏軍を追って、のちにDRVのヴェトバック根拠地となる北部山岳地帯を転々とした。

日本敗戦はハノイ西北のソントイから西南のホアビンへ移動中、トンという小さな町で知った。45年11月、ホアビンからクアンイエンへさらに移動中に単身離隊した。敗戦が納得できなかったからである。ベトナム人たちが独立戦争をやると聞いて、それなら自分ひとりでも手伝ってやろうと思った。ヴェトミンのことは全く聞いていなかった。

とりあえず民家に身を寄せた。三日目にヴェトミンの小グループがやってきて同行を求めた。ついていったらソントイ駐留の中華民国軍(雲南軍)に引き渡され、日本軍から押収した武器、車、燃料などの点検・記帳をやらされた。横流しのため実際の数よりも少なく記録する仕事であった。それが終わると雲南軍は彼を中国へ連行しようとしたので、46年に国境のランソンで脱走、ヴェトチーに近いフクイエンでヴェトミンの遊撃隊に迎えられ、ある「愛国地主」の家に滞在して民兵訓練に当たった。そこの民兵部隊には小銃が二、三挺しかなかったが、初歩的な戦闘訓練だけは施したつもりである。ある日、ヴェトチー付近でベトナム国民党武装グループを偵察中、そのグループに撃たれて腹部貫通銃創を負い、左脚が動かなくなった。中国国民党につながるベトナム国民党は、DRV樹立当時から違って一中国内戦の影響もあって一ヴェトミンと完全に敵対するに至っていた。

彼はそのためDRVの首都となっていたハノイに出て、町医を開業していた高澤民也軍医(テュエンクアンで21師団第62連隊を離脱)の治療を受け、高澤から日本人が集まっていると聞いて紅河対岸のザラムへ行き、数人の日本軍離隊者とともに昭和産業の製紙工場跡で稲藁を原料とする紙の製造を始めた。自活のためであった。やがてタイヤ再生の仕事にも手を着けた。これに必要な化学製剤は、ハノイにいた安藝昇一(すでにヴェトミンに参加)に教えてもらって入手した。安藝にはその方面の知識もあった。

同年秋、ザラムの工場は仏軍の爆撃で破壊された。宮崎は付近の住民とともに紅河沿い

に逃げ、ヴェトチー付近で軍刀を持つ高橋ヒロミという旧日本軍将校（長野県下伊那出身）と出会った。高橋はすでにヴェトミン正規軍にいて、軍事訓練などを行っていた。

宮崎は高橋に連れられてハイフォンへ行き、そこでヴェトミン正規軍に加わった。折から北部を制圧しようとする仏軍大部隊の上陸が始まっていた。ヴェトミン軍はこれに抵抗し、高橋は砲撃を指揮した。大砲は45年9月に日本軍の武装解除に來た中国国民党軍が横流した旧日本軍のものであった。宮崎も仏軍に対する遊撃戦に参加したが、歩兵銃だけでは全然歯が立たず、ヴェトミン軍の一部隊とともにヴェトチーに戻り、あるフォー（ヴェトナムうどん）の店で高橋と別盃を交わした。高橋はその後DRVのヴェトバック根拠地周辺で仏軍と戦い続け、48年か49年にヴィンイエンの山中でマラリアで死んだらしい。

宮崎はヴェトバック根拠地のタイグエンで高澤ら日本人のグループと合流して「安全区」のチョーチューに移り、高澤を中心とするDRV中枢部での医療活動に従事することになった。そのグループには中村辰夫（旧陸軍将校、鳥取県出身）や佐藤某がいた。佐藤は昭和通商（第2次大戦中、仏印駐屯の日本軍に物資を補給していた民間会社）にいた民間人ということになっていたが、ヴェトナム語がうまかったので旧軍の諜報要員だったかもしれない。彼は抗仏戦の最中に病死した。

この医療グループは、さらに真脇佳廣、桜田種雄（大阪府出身）、小笠原豊作（岩手県出身）らを加えて、薬品製造を含むDRVの医療・衛生活動の中核という役割を担うことになった。活動拠点（病院と製薬工場）はチョーチューを中心に「安全区」各地に分散していた。病院も工場も、すべて竹と粘土を主材とする堀立小屋であった。設備はおおむね手製で、原材料（例えばマラリア薬のキニーネ、麻酔薬用のアヘン、カルシウム用の石灰）も大半は地元産の植物や鉱物を用いた。地元産で間に合わないものは、財務省や軍の物資調達組織を通じて全国のヴェトミン支配地域や仏軍支配地域から取り寄せた。すべては不足していたが、圧倒的な仏軍に抵抗しながら、ともかく必要最小限の医薬品が準備できたことについて、宮崎は「我々日本人の工夫と努力もさることながら、ヴェトミンの組織力も凄かった」と回想している。

注射液用の蒸留水をつくる装置は、主に元ブリキ職人の真脇が製造した。石灰と硫酸によるカルシウム製造は中村の担当であった。薬品のレットルに捺すゴム印を考案したのも中村である。彼らの活動は、注射液のアンプルや紙幣用の紙の製造にも及んでいた。紙の主原料は竹であった。

それら医療活動のすべてを統括していたのは高澤である。彼はときどき病院や薬品工房を見回り、急病人が出たという通報を受けると、手術用具などを提げて馬で駆けつけるのが常であった。高澤夫人はハノイ育ちの知的な美人で料理上手、バ・ロック（マダム・ロック）と敬称つきのニックネームで呼ばれていた。宮崎自身も「安全区」でベトナム人の妻と暮らしていた。子供はいなかった。

「安全区」の日本人はときどき12人単位の学習会に出ていたが、学習の内容は極めて実地的なもので、思想教育は行われなかった。

医療・衛生部門にいた日本人は、おおむね1954年の第1次帰国団に加わって中国経由で単身帰国した。中村は残留し、独立戦争終結後にサイゴンに移り、対米戦争終結のち妻子とともに帰国した。宮崎は54年に帰国したのち横浜に住み、某銀行の社員募集に応じたが、「共産圏にいた」との理由ではねられ、行商をして食いつないだ。しばしば刑事に尾行された。某大学のセミナーハウス管理人が最後の職業であった。1990年代に初めてハノイを再訪し、93年に金沢市で病死した高澤の現地未亡人バ・ロックと再会した。彼女に頼まれて高澤の遺影を届けたこともある。

## [元山久三]

福岡県出身。1921年（大正10年）生まれ。ヴェトナム名ホアン・ヴァン・ハック。日本敗戦のとき、第3航空軍（司兵团）仏印分遣隊の第5飛行場中隊高射機関砲分隊の一等兵として、ハノイ近郊のザラム飛行場にいた。日本の降伏がどうしても納得できなかった。敗戦当日の夜、ひとりで脱走しようとしたら、田辺という軍曹と一緒にしようといってきた。脱走後の計画はなかった。離隊すれば何とかなと思っていた。二人は同じ分隊の兵士十余人とともに、小銃と軽機関銃を携えてハイフォンに向かったが、川に阻まれ、ハノイに行き先を変更した。ハノイから汽車で南下。しかし鉄橋が米軍の爆撃で壊されていたため、汽車はニンビンまでしか行かなかった。翌々日の夜、ニンビン付近の山中で野宿した。初年兵たちが「これから何をしますか」とたずねた。元山は「行けるところまで行く。お前らは自分で決めろ」と答えた。5名が小銃を残して姿を消した。原隊へ戻ったらしい。

田辺は初年兵たちをニンビン市内へ捜しに行ったが戻らなかった。元山らは、その日、ニンビンの陸軍駐屯部隊を訪れ、「偵察中」と偽って病馬治療所に泊めてもらった。一緒に離隊した福本伍長は下士官室からピストルを盗んできた。翌朝、近郊の村の寺にいと、田辺がヴェトミン兵の一团とともにトラックでやってきた。田辺がニンビン市内で買い物をしていたら、ヴェトミンの幹部が来て、ヴェトミン参加を求めたという。

元山らはニンビン市内の旧仏印軍兵舎に案内され、ヴェトミン幹部と初めて対話した。「フランス軍と戦うのか」、「君らは白人と戦った。我々も白人と戦う」、「それなら目的は同じじゃないか」というような言葉のやりとりのすえ、元山、田辺、福本、中川（伍長）、永家義夫（上等兵）、平家（初年兵）の6名はヴェトミン参加を決め、郊外のザンカウという村に移った。ほかの離隊者は去った。やがて福本も去り、この日本人グループは5名になった。その村で海軍軍属をしていたという日本人が一人加わった。一同はときどきニンビン市に遊びに行っていた。

彼らの気持はまだ曖昧であった。帰国するつもりはなかったが、普通の暮らしに戻りたいという気持もあった。自称海軍軍属の男が「海賊をやろう」と言い出したので、一同は大きな舟を借りて川伝いに逃げ出した。海へ出る手前でヴェトミンの歩哨につかまった。地元のヴェトミン機関は何も要求せず、三日間飲み食いさせてくれたのち、西北のナムディン市に近いバンリイという村へ行けと命じた。

バンリイには佐野襄という陸軍軍曹がいた。彼はニンビン駐屯部隊の武器庫番をしていたが、市内で田辺と偶然出会い、田辺の誘いで離隊した。そのとき明号作戦で仏印軍から接収したトラック数台分の武器弾薬をヴェトミンに提供した。倉庫には日本の騎兵銃もあったが、菊の御紋が目に入ったので持ち出せなかったという。

佐野、海軍軍属某を加えた元山らのグループは、ヴェトミン兵の案内で1週間後にタインホア市に向かった。田辺はニンビン近郊の娘とすでに結婚していたので同市で離脱した。

元山、中川、永家、平家、佐野と海軍軍属某は、同市のヴェトミン指導者リン・チュン・ルオンの歓迎を受け、その指示で西方山地のブイトアンへ。そこに約1ヶ月滞在したのち、二人一組になって三つの村に分散した。元山と佐野は、タインホア省のヴェトミンの軍事指導者の父（大地主）の家に配置された。そこには阿部某（ヴェトナム名チュン、海南施設部隊の軍属で愛知県出身の阿部正二か）と、チン、チュックというヴェトナム名を持つ2人の日本人がいて、ありあわせの材料で小銃をつくっていた。カトリック信徒の多い村であったが、その大地主は仏教徒で、ヴェトミンを支援していた。すこぶる親日的でもあった。しかし彼はアヘン中毒で、のちに息子に逮捕され、3ヶ月ほど拘禁されたという。

このころヴェトミンは元山らに仕事を与えなかった。まだ日本軍が復員を開始していなかったし、日本軍の武装解除に來た中華民国軍もいたので、彼らをしばらく山中に隠しておくつもりであったらしい。

約半年後、彼らはヴェトミンの指示でタインホア市に移動した。元山と佐野は、ニンビン省バンリイで会ったことのある井村阿津麿と、もう一人の日本人とともに、同市近郊の下士官養成学校の教官に任命された。井村はサイゴンに駐屯していた第3航空軍第18飛行場中隊の離隊者であった。

第1期（3ヶ月）の教育が終わったのち、元山と佐野は退職してニンビン省に移った。その少し前、元山に続いて第3航空軍第5飛行場中隊を離脱した軍人たちがゲアン省都ヴィンにいと聞いて、元山は同市へ行き、数人に会った。彼らも下級軍事幹部養成に携わっていたが、その後の消息はわからない。その一人は後年、ラオスへ逃亡しようとして銃殺されたとの噂がある。ゲアン省には、この種の得体の知れぬ離隊者が少なくなかった。

元山と佐野はニンビン省の農家に別々に滞在した。どちらも地主の家であった。元山は滞在先の娘との結婚を迫られたので、その家を勝手に離れ、バスでハノイへ行った。すでにハノイは仏軍占領下にあった。金もなく、知人もいなかったので、シクロに乗って「日本人のいるところへ」といったら、シクロは仏軍の兵舎に走り込んだ。元山は彼を捕えよ



うとする歩哨を振り切って逃げた。後日わかったことであるが、仏軍は賞金つきで日本軍の脱走者を捜索していた。

空腹を抱えてハノイ市内を彷徨していると、山本某というフランス留学帰りの日本人がベトナム人の妻と暮らしているという話が耳に入った。元山はその人の家に転がり込んだ。そこへ翌日、井出大佐と名乗る日本人が来て、自宅へ元山を引き取った。その家には日本人数人がいた。数日後、第21師団山砲部隊の高橋という中尉が突然現れ、「フランス側につきたくないなら、即刻ここを出ろ。井出は本名大島で、俺の部隊の兵長だ。あれは仏軍の手先で、お前らを仏軍に引き渡す仕事をしている」といった。元山らはすぐ出た。高橋中尉は大島を捕えて原隊へ連行しようとしたが、たまたま仏軍の一隊にみつかった。大島は仏軍のジープで逃げた。

大島の家には日本人の一人が高澤軍医の診療所を知っていた。一同はそこへ行った。彼らは同軍医の世話でハドンのヴェトミンの事務所に移った。そこにも数人の元日本軍人がいた。両日本人グループのうち元山、藤本猛省（第3航空軍通信兵）、西沢某、坂本某の4名は山道を縫って、まだヴェトミン支配下にあったタイグエン市へ。1ヶ月後、DRV中央の人に「好きな分野で協力するように」といわれた。軍事を選んだ元山は、やがてヴェトバック根拠地の重要地点となるバクカンで地方軍の短期訓練を行うことになった。藤本は電信を選んだ（のちに「ヴェトバック連区」の軍事通信部門で極めて重要な役割を果たした）。

西沢と坂本はタイグエン市西北のフクイエンの軍事訓練施設に勤務することになったが、その後の消息は不明である。坂本はフクイエンへ赴任する直前、あるいは赴任の途中、ハノイの妻（ベトナム人）のところへ無断で帰ろうとして射殺されたという噂がある。彼の妻はそのころフクイエンへ夫を捜しに来ていた。元山は後日タイグエン市に帰ったとき、ヴェトミン軍の自動車部門に勤める日本人（ベトナム名ダイ・ドン）から坂本の妻の日記を見せられた。ダイ・ドンは彼女を坂本の墓に案内したという。日記には「サカモトさん、どこにいますか。いくら捜してもみつからない」という哀しい文章があった。

タイグエンに戻った元山は防空部隊に配属された。その部隊の武器は旧日本軍の重機関銃であった。元山がそこで知り合った佐藤という日本人戦士はアヘン中毒で、元山をししばアヘン窟に誘った。それがバレて、元山はまたバクカンに派遣された。恋人が同行した。彼女はハノイ育ちで、家族とともにタイグエン市に疎開していた。彼女とバクカンで結婚したのち、元山は同じタイグエン省内のダイツーやザンティエンの兵器工場（火縄銃

など初歩的な銃器や手榴弾を製造していた)で働いた。工場といっても掘立小屋で、爆撃を避けて転々と移動した。

ヴェトバック根拠地に対する仏軍の攻撃が本格化し始めた47年初頭、元山は地方軍幹部学校の教官になり、次いで駒屋俊夫、藤本猛省とともにヴェトバック連区司令部作戦班に技術スタッフとして配属された。そこはヴェトミン正規軍の活動を下支えする中枢機関の一つで、タイグエン省ナラインにあった。元山の主な任務は、第一に駒屋の作成した作戦用の地図を関係諸部隊に配布すること、第二に旧日本軍第3航空軍第5飛行場中隊で磨いた防空戦闘の腕を生かして戦区各地の末端諸部隊に防空訓練を施すことであった。ヴェトミン軍には高射砲その他の対空火器がなかったので、元山はそういう場合の旧日本陸軍の対空戦闘方法(全力射撃)を教えた。多数の小銃で一斉に撃つ。機関銃1挺よりも小銃20挺の方が撃墜あるいは撃退の効率が高い。この方法で実際に仏軍機を撃墜したこともある。これは後年の対米戦争で米軍の地上攻撃機を相手にヴェトナム軍民の常用した戦法の一つでもある。

1950年から中国の援助が始まり、同時に軍隊の空気にも微妙な変化が現れた。兵士全員が集まっているときに、労働党員たちが突然いなくなる。あとで彼らは政治委員を囲む会議を開いていたとわかる。元山らはこういった変化に何となく馴染めなかったが、だからといってヴェトミンが嫌いになるとか戦意にかげりが出るとかいうことは全くなかった。ひとたび独立戦争に挺身するとおのれに誓ったからには、何はともあれ勝利のために戦うことが第一で、ほかのことはどうでもよいという気分であった。日本人戦士に対する思想教育は、元山のセクションに関する限り全く行われなかった(\*)。元山は地主・富農に対する人民裁判は何度か目撃した。タイグエン省では、ある高齢の女性が小作人を虐待したとのことで銃殺されたが、その息子は正規軍の上級幹部であったのには驚いた。しかし、この種の人民裁判を見たのは停戦協定が結ばれたあとのことで、それも短期間に終わった。

\*この点では、井川の聞き取り調査に応じた元日本人戦士大多数が同じ記憶を語っている。

独立戦争は元山が連区司令部作戦班にいたときに終わった。その前に日本人戦士を帰国させるという通知が届いていて、同僚の駒屋と藤本は54年の第1次帰国団に参加して帰国したが、妻子同伴が許されなかったので、元山は参加しなかった。参加不参加は本人の自由であった。59年の第2次帰国団からは妻子同伴となったが、退役してタイグエン市

近郊の村に住んでいた元山は、第2次帰国団の出発後にそれを知り、妻のファン・ティ・グェット（日本名房子）と子供3人（男2人、女1人）を連れて60年の第3次帰国団に加わった。

子供は独立戦争中に6人生まれたが、長男は肺壞疽で死亡、帰国直前に生まれた末っ子は出産直後に死んだ。残った男女各2人の子供のうち、末娘は妻の姉の養女にした。義姉は独身で、老母を養っていたからである。

長男の墓はナラインにあったが、対米戦争期に戦略爆撃機B52の1トン爆弾に直撃されて痕跡もなくなった。

元山は荒木という日本人戦士の最期を看取ったことがある。ヴェトミン正規軍で活躍していたが、腸結核に罹り、第2戦区のランゴア村（ハノイ北方バクニン省）で死んだ。妻（ヴェトナム人）と子供がいた。死ぬ少し前、寿司が食いたいというので、いなり寿司をつくり、松の木の下にゴザを敷いて食べさせた。嬉しそうに食う様子が哀れであった（\*）。

\* 荒木はサイゴンで離隊した南方総軍憲兵隊の荒木三郎准尉（兵庫県出身）と思われる。

## [杉原剛]

1921年、滋賀県の農家に生まれた。42年に応召し、四等水兵として舞鶴の海兵団に入ったが、やがて海軍陸戦隊に配属され、中国海南島の海軍海南警備府へ。そこで日本敗戦の日を迎えた。三等兵曹であった。

海南島には日本の軍人と民間人が多かった。45年春から食糧が足りなくなった。もとは中国本土の雷州半島から調達していたが、それがむずかしくなったので、ヴェトナムへジャンク船で買い出しに行くようになった。買い出しに行った連中は、しばしば帰ってこなかった。ヴェトナムの方が安全で、米も酒も女も容易に手に入るからと聞いた。

海南警備府の人々は敗戦を余り信じていなかった。いざ戦闘再開ということになれば、島内の洞窟にこもって戦うつもりであった。そのためには食糧備蓄が必要ということで、杉原もヴェトナムへ米を買い出しに行けと命令された。最初はヴィンへ行ったが、そこには米が余りなかったので、ハイフォンへ、さらにダナンへ。ダナンへは何度も行った。

45年11月、同僚4名と買い出しに行く途中、船が台風で難破し、ナムディン省南部（現ニンビン省）の海岸に漂着した。杉原ら5人が海岸の村にいるところへ、ヴェトナム軍の中団（連隊）政治委員と称する男が来て、すでにヴェトナムに加わっていた元日本陸軍兵士の通訳で、仏軍の再侵略に直面しているヴェトナムの苦境と徹底抗戦の決意を語ったうえで、「当面、諸君の安全は保証する。我々の決死の戦いに協力してほしい」といった。海南島へ帰る手段がない以上、この要求を拒むわけにはいかなかった。杉原らはとりあえず「協力する」と答えた。このとき通訳した元日本軍人は、抗仏戦争の最中、タインホア省のティンザーで民兵訓練中に手榴弾事故で死んだ。氏名や出身地はわからない。

杉原らに協力を求めたヴェトナム幹部の男は、対仏戦争終結のちにDRV（北ヴェトナム）の貿易次官となり、62年に貿易交渉代表団長として来日した。杉原が日越友好運動に努めていた大阪にも来て、歓迎レセプションで「むかしナムディンの海岸で日本兵数人に協力を求めたことがあります。この会場に、そのときの人はいませんか」といった。杉原が手を挙げると、彼は大いに喜んだ（\*）。

\*この人物は、のちに駐ラオス大使にもなったギエム・バー・ドックと思われる。

杉原ら5名はタインホア省へ連れて行かれた。そのヴェトナム組織は「海軍をつくりたい」というていたが、海軍のような高度の技術と設備を要する軍事部門がすぐにできる

はずもなく、ヴェトミン兵に対する6名の海軍訓練は、せいぜい手旗信号を教える程度で終わった。旧日本海軍の手旗信号の「イロハ」は、アルファベットのABCに変えて教えた。

そのうちに仏軍がサイゴンから着々と北上し始めた。杉原らはタインホア省西部の山岳地帯で、一人ずつ村々に分散して民兵訓練をすることになった。同省のヴェトミン軍は形成の出発点に立ったばかりで、にわかづくりの民兵たちは鉄砲の撃ち方、いや握り方すら知らなかった。彼らの武器は主に竹槍であった（竹だけは昔も今もヴェトナムの至るところにある）。

杉原は民兵訓練をしながら、村から村へと、しょっちゅうタインホア省内を移動した。伊藤博文を暗殺したといわれる安重根の弟の亡命していた村に滞在したこともある。その人物は日本敗戦後に朝鮮半島へ帰ったが、北と南のどちらへ帰ったのかは現地の人々も知らなかった。杉原の所属していた中団（連隊）の司令官はその村の出身で、古い独立運動の家系に属していた。杉原は彼に信頼され、その斡旋で村の仏教寺院の住職の娘と結婚した。

対仏抗戦が本格化したのち、杉原は第4戦区の人民軍工兵部隊に一時所属し、不発弾を集めて弾薬製造の仕事をしたことがある。ヴェトナム人は手先の器用さで有名であるが、こういう危険な作業は軍隊経験がなければどうしようもない。だから当時、この種の作業はもっぱら元日本兵に委ねられていた。

タインホア省には、杉原の知りうる範囲だけで少なくとも十数人の日本人戦士がいた。その一人の小野豊吉（宮城県出身、54年帰国）は野戦部隊の大隊長（旧日本軍の編成では中隊長）で、いつも省内を移動していた。

タインホアはヴェトナムでも夏の暑さで知られる地方である。ジョー・ラオ（ラオス風）と呼ばれる熱風の吹くときには、気温が摂氏42度にもなる。しかも山地が多くて、食糧は乏しい。米はモミまじりで、ネズミの糞だらけであった。副食は竹の子と水草のザオムンだけというのが普通で、たまに豚の脂身がついた。衛生設備も極めて乏しかった。たいていの日本人がマラリアやアメーバ赤痢に罹った。杉原もマラリアに苦しんだ（帰国後も再発）。これらで病死した日本人戦士は少なくない。

最も苦しかったのは49～50年である。食糧を含む物資の不足は限界に近く、現地民衆の心は沈滞していた。杉原も勝てるかどうか不安であった。生きて帰国できるとは思わなかった。このままヴェトナムの土になってもよいという気分であった。それが52年か

ら一変した。中国援助も効果もあったと思われるが、物資は多少ふえた。民衆の気分がにわかには高揚してきた。54年春、ヴェトミンのあらゆる組織に、ディエンビエンフー決戦に向けて、できるだけ多くの民兵を兵站活動に参加させよというDRV政府と人民軍中枢の動員指令が届いた。志願者が激増した。

ディエンビエンフー決戦のための兵站作業には、タインホア省内の日本人の中では杉原だけが参加した。西の国境を越えて、決戦場に接するラオスのサムヌア付近まで米を運んだ。はじめは60kgほどの米を肩に担いで運んだが、のちに自転車で200kgほども運ぶようになった。自転車は日本のミヤタ製が一番だといわれていた。めったに故障しなかったからである。何よりも頑丈さの求められる時代であった。杉原も持ち前の頑丈さゆえに戦い続けることができたといえるかもしれない。

そういう兵站作業の最中に、DRV中央から集団帰国のための呼び出しがあり、杉原はタインホア省内の日本人たちとともに――ただし別々に――ヴェトバック根拠地のダイツォーに集合した。その集合場所での帰国に関するホクタップ（学習）のとき、彼はヴェトミン参加以来はじめてまともな食事を摂り、まともなベッドに眠ることができた。妻子同伴の許されなかったことだけが残念であった。

中越国境を越える直前、DRV政府は帰国者それぞれに100万ドンの慰労金を与えた。杉原はこれを中国で10万円に換え、日本に着いてから1万円に換えた。これで3ヶ月暮らせたが、そのあと苦勞した。大阪でさまざまな雑役をした。まともに給料が貰えるようになったのは55年4月である。そのころ北部の大作戦で活躍した岩井古四郎が郷里の愛媛県から大阪に出てきて、杉原と61年まで仕事を共にした。日越友好運動も、である。中国の天津から舞鶴へ帰国団を運んだ興安丸の船上で、彼らはこの運動をやろうと約束していたのである。その後、杉原は日越友好協会大阪支部長になり、ヴェトナム語教室などを経営することになった。岩井は日越貿易会の創設にかかわり、90年代に中原光信に続いて会長になった。

杉原は大阪で再婚した。ヴェトナムに妻子のいることを結婚相手に告白したうえのことである。彼は1990年代中頃にヴェトナムを再訪し、タインホア市中心部の人民委員会（行政機関）の議長を勤める長男など3人の子供と三十数年ぶりに再会した。長男の妻は、同じ興安丸で帰国した元ヴェトミン戦士桜田太吉（福井県出身）が現地妻との間にもうけた娘であった。杉原は90年代末に訪日した息子とともに、病死直前の桜田を見舞った。桜田は娘一家の写真を見て涙を流した。

杉原はタインホア省チネの山中で消息を断った日本人Y（ヴェトミンに協力していた）に会ったことがある。Yは北部で鉱山技師をしていて、同僚の田中某という日本人とともに同省に来た（\*）。田中は帰国したらしい。

\* ヴェトナム北部・中部の山岳地帯には、クローム、タングステンなどの稀少非鉄金属のある場所が多いので、日本軍の仏印進駐（1940～41年）ののち多数の鉱山技師が派遣されていた。その一部は遠隔地にいたので日本軍諸部隊の復員船に乗る機会を逸し、またはみずから望んで現地に残留し、ヴェトミンに協力することになった。DRV初代財務相レ・ヴァン・ヒエンの部下になった鉱山技師某もその一人である。同じく杉原によると、日本敗戦後、同盟通信の社員某（記者？）が妻子とともにタインホア省に残留していたが、独立戦争開幕後に仏軍の大根拠地となったヴェトナム・カトリックの聖地ファジエム（ニンビン省）へ行き、それまでヴェトミンに加わっていた元日本軍人某とともに54年のインドシナ停戦協定締結前にサイゴンから帰国した。彼は仏軍に何らかの形で協力したと思われる。こういう特殊なケースは、タインホア省以外のところにいたヴェトミンの日本人戦士には記憶されていない。

#### [井川付記]

海南島からヴェトナムへ船で食糧買い出しに来てヴェトミンに加わった日本人グループには、杉原のグループのほかに中川武保（ヴェトナム名ラム・ソン）、田中吉太郎、堀伊三男ら数名の海軍軍属（主として海軍基地建設に従事）のグループがあった。このグループは45年11月3日にナムディン東南の海岸に漂着した。中川は47年ごろ、DRV政府のヴェトバック根拠地で、中原光信とともに人民軍参謀本部の軍事参議官になり、54年に第1次帰国団に加わって帰国、日越貿易会の初期役員の一員としてDRVとの経済交流に尽力した。彼は敗戦直後の流行作家田村泰次郎の従兄弟で、著書『ホー・チ・ミンと死線を越えて』は田村の世話で75年に出版されたが、その内容がこのグループ以外の帰国者の間で物議を醸した。中川ふじゑ未亡人によると、このグループの人々は、中川が91年に死去するまで毎年「漂着記念日」の11月3日に必ず会合していた。

## [天川健と水江源治]

ハティン省は独立戦争にかかわった日本人の足跡の最も辿りやすい地域である。それなりの理由がある。

南部は仏印時代のコーチシナ直轄植民地で、フランスの統治機構が最も完備していたうえ、抗仏勢力がさまざまに分岐していて、ヴェトミンの機構も整わないうちに仏軍が英軍とともに逸早く展開したため、政治・軍事情勢は錯綜を極めた。中部のフエ～ダナン～クァンガイ地方（日本でいえば名古屋とその周辺部）は大越帝国（グエン朝）と旧安南保護王国の心臓部で、南部と北部を錘とする振子の支点ともいうべき役割を持ち、それゆえこれまた早くから仏軍とヴェトミンの政治的・軍事的抗争の場となった。またハノイを中心とする北部は、中国に接する古代以来のヴェトナムの中枢地域で、DRV政府はここに樹立された。対仏独立戦争の主戦場となったのはこの北部である。

しかし中部北半の狭隘部に位置するハティン省とその周辺地域は、この3大地域とは違って、ヴェトナムで最も貧しい地域の一つで、面積、人口ともに小さく、大都市や工業地帯もなく、従って地政学的にも軍事戦略的にも重要性を持たなかった。この地域の勢力分布図は極めて単純であった。ヴェトミンがほぼ全域を押さえ、仏軍は点（都市）と線（国道）すら支配していなかったのである。ヴェトミンの正規軍もこの地域を通過するだけであった。それゆえ本格的な地上戦は全く行われなかった。

日本軍もこの地域には大部隊を駐屯させていなかったため、日本敗戦後の離隊者はごく少数で、それも概して中国戦線から南下する通過部隊の離隊者であった。ヴェトミンに参加した彼らの任務は、実戦指導よりも兵員訓練であった。従って死傷者も少数にとどまった。

この地域にいた日本人戦士の活動を比較的詳細に知ることができるのは、以上のような特殊事情によってである。2名の体験を例示する。

原兵団（第22師団）第86歩兵連隊通信中隊の上等兵天川健（栃木県出身、ヴェトナム名レ・トゥン）は、中国広東省から南下中、連隊が省都ハティンに宿営しているとき日本敗戦を知った。敗戦を受け入れる気になれなかった。アメリカの奴隷になるのは絶対に嫌であった。死ぬまでヴェトナムの山にこもって戦おうと思った。同じ中隊の戦友たちもそう思っていた。ある夜、みんなで酒を飲んでいると、同連隊教育隊の黒澤光男が来て、



一緒に逃げようといった。10名が同意した。敗戦1ヶ月後の夜、彼らと黒澤は、2ヶ月分の米と小銃弾2,000発を用意し、歩哨を「朝まで黙っている」と脅かして脱走した。満潮時刻を待って舟を出そうとしているところへ、DRV政府の任命した省知事レ・ズン（のちの国会議員）が通訳を連れて現れ、「我々は仏軍と戦うだろうが、軍事教育を受けた者がほとんどいない。訓練を手伝ってほしい。皆さんの安全は保証する。待遇については皆さんの出す条件を受け入れる」といった。

天川らは承諾し、川伝いにハティン省北部のドクトー県へ行き、牛と水牛計200頭、水田50haを持つ地主の屋敷に迎え入れられた。その女主人は夫とともに独立運動に関係して仏印当局に投獄され、夫が先に釈放されて別の女性と一緒にになったので実家に戻ったとのことであった。

そこでの生活は快適であった。毎朝、女中が日本兵たちの足を洗い、女主人の娘がお茶を出した。のちに天川は、女主人に娘との結婚を求められて困惑した。

彼らは2名ずつ組んで村々を回り、1村平均100～200人の民軍（民兵部隊）を訓練した。民兵の軍事知識・技術はゼロ同然であった。武器はおおむね竹槍や青龍刀風の鈍刀で、小銃はほとんどなかった。天川らは日本で受けた初年兵教育の初歩から教えなければならなかった。時には仏軍の上陸に備えて、海岸警備の訓練も行った。彼らはどの村でも歓迎された。食費はいらなかった。

ドクトー県には30名ほどの元日本兵がいた（天川のいた村には25名）。天川によると、30名のうち7名はのちに南へ移動し、その中の3名（1名は天川と同郷の栃木県真岡出身、2名は新潟県出身）はクアンビン省で戦死した。その一人は、仏軍の戦車を爆雷で破壊しようとして撃たれたらしい。

天川らはハティン市近郊の村へ訓練に行くこともあり、しばしば市内の日本人会事務所を訪れて飲食のもてなしを受けた。事務所はヴェトミンの提供したもので、日本人会長は中山（ヴォー・タイン・クワン）という大学繰り上げ卒業の元見習士官（新潟県出身、少尉？）であった。彼は背が高く責任感の強い、信頼に値する男であった。ハティン省内のヴェトミン軍の計画は、知事と省隊部（省全体の民軍を統括）の指揮官に中山を加えた3名のが決めていたようである。民兵訓練の計画は、もっぱら中山が作成していた。

45年9月、天川らはヴェトミン軍の第4戦区司令部（中部北半を管轄）から仏軍のナベ基地を攻撃してほしいとの要請を受けた。ヴェトミン軍中央の指示にもとづく要請であった。

ナベはラオス山中の町で、そこには飛行場を備えた1 km 四方の基地があり、国道をわず  
か100 km 東へ下ればゲアン省都ヴィンがある。ヴィン市はその北のタインホア市と並ん  
で国道1号と南北縦貫鉄道を扼する中部北半の最大都市で、ここを仏軍に押さえられれば  
北部は半ば孤立する。ヴェトミン軍中央はそういう事態を恐れてナベ攻撃を起案したらし  
い。

第1回のナベ攻撃(9月)は事実上日本人12名だけによる夜襲であった。彼らは仏軍  
基地を一時占拠し、大量の武器弾薬と食糧を奪った。天川、綱川貢、川又正二の3名が負  
傷した(\*)。天川の傷は右腕の盲貫銃創であった。彼はハティン市内の病院に運び込まれ  
た。弾丸を発見するためのX線検査の資材がなかったので、医師は腕を切断し、あとでヴ  
ェトミン幹部に叱られた。

ちょうど中国国民党軍が日本軍の武装解除のため南下中であった。彼らにみつかる  
と連行される恐れがあったから、地元ヴェトミンは天川の病室の前にいつも2名の歩哨を立  
てた。日本語のできる看護婦が実に親切に天川の面倒を見た。彼女はのちに南部で戦死した。

\* 綱川はのちにフエ以南で戦い、独立戦争終結後にサイゴンに移って  
「寿会」に参加し、1970年代後半に帰国した。川又は後日、中部南  
半のフーイエン省に移り、さらにその後、南部で消息を断った(小森由  
男の項参照)。

天川の傷は3週間ほどで癒えた。46年初頭、第2回のナベ攻撃が行われた。今度は日  
本人グループが突破口を開き、ヴェトナム人民兵部隊が後続するという形であった。天川  
も左腕に小銃を抱えて参加した。日本人会長の中山は天川から借りた拳銃を構えて仏軍兵  
舎に突入した。彼の投げたらしい手榴弾の爆発音とともに兵舎の燃え上がるのが見えた。  
中山ら日本人3名が戦死した。中山は死を覚悟していたらしく、出撃の前に私物をヴェト  
ナム人の妻を持つハティン在住の日本人某に預けていた。

この第2回の夜襲も、激戦にはなったが成功した。仏軍の守備隊は逃走した。しかし天  
川らは翌朝には引き揚げなければならなかった。仏軍が火器を十分に用意して来襲すれば、  
単発銃と手榴弾しか持たない20名程度の日本人と、未訓練でしかも竹槍が主要武器とい  
う民兵約300人ではとても対抗できそうになかったからである。ほどなく行われた第3  
回の夜襲は、仏軍が防備を強化していたので失敗に終わり、このときも日本人3名が戦死  
した。

日本人会は計6名の戦死者(中山、藤田某、武田某、ヴェトナム名ヴォー・キイ、同口

ン・ズン)の墓をタインホア市近郊につくった。遺体は運び帰れなかったので遺品だけ埋めた。

第3回ナベ攻撃ののち、天川は腕の傷が化膿したので、ヴェトミンの管理するヴィン市の病院に入った。独立交渉がまとまるまで軍事行動を差し控えるという仏越暫定協定のころで、政治的にはヴェトミンが同市を押さえていたが、仏軍が駐留し、45年に中国国民党軍とともに南下したヴェトナム国民党も公然と活動するといった具合で、この都市の状況は複雑であった。そのためか、ヴィン市には雑多な日本人が多かった。「竹下一家」と称するヤクザじみた元日本兵グループもあった。仏軍と国民党がそれぞれ元日本兵を誘って、10名以上の者がこれに応じていた(\*)。

\* 井川の調査によれば、このころヴェトナム各地で仏軍の誘いに乗った者は戦闘には参加せず、おおむね帰国した。元日本軍人のヴェトミン参加を最も恐れていた仏軍は、これを阻止できればよいという立場であったから、彼らに仏軍への参加までは求めていなかった。国民党に加わった者の多くは短期間で離脱した。同党が民衆に支持されていないことが直ちにわかったからであり、またヴェトミン参加の同胞と戦いたくなかったからである。離脱者の一部はヴェトミンに転じた。また一部は消息を断った。

天川の入院治療は数ヶ月に及んだ。ある日、中国国民党系と思われる華僑の企業家が彼を夕食に招いた。企業家の家は6階建ての豪邸で、コックが何人もいた。企業家は「日本軍のおかげで香港で大儲けをした。これはお礼のつもりだ」と、200ピアストルの病氣見舞金を差し出し、それとなくヴェトミン離脱を勧めたり、旧日本軍の武器に関する情報を聞き出そうとしたりした。天川は何も答えなかった。

腕の傷が完治すると、天川はハティン省に戻った。やがて全国抗戦が始まり、ハティン市は仏軍の占領を恐れるヴェトミン現地組織の手で完全に破壊された。日本人会事務所は市外の村に移った。だが仏軍との戦闘はなかった。北部が主戦場となったからである。天川は再び民兵訓練に努めた。村落レベルで日本人の訓練を受けた民兵のうち、成績優秀な者は省レベルの民軍(省隊)と県レベルの民軍(県隊)に入り、その中でも優秀な者は正規軍(衛國軍、のちの人民軍)に入るという仕組みであった(\*)。天川の「生徒」も次々に正規軍に入って北部戦線に向かった。

\* 省隊はやがて「地方軍」(正規軍を補助する省単位の軍隊)となり、

正規軍、地方軍、民軍（別称「自衛隊」）という3種武装勢力の連携システムが完成する。これは後年の対米戦争でも基本的に変わらず、さらに洗練された形で「全民武装」戦略を支えた。

天川はそのころから民兵訓練の合間に狩猟を始めた。森の中で100m先の猪が見分けられるほどに目がよかったし、片腕でも自己訓練で健常者以上に銃が操作できるようになっていた。獲物は鹿、野牛、猪、兎、熊などであった。猟銃はフランス製で、旧日本軍の三八銃と交換で入手した。信管、弾丸、火薬は自分でつくった。

彼はハティン省随一の名ハンターになった。射撃の腕前は、時に戦争にも役立った。50年ごろ、国道1号を北上していた正規軍の一部隊が仏軍機の機銃掃射を受け、多数の死傷者が出た。たまたま付近の村で民兵訓練をしていた天川は現場に呼ばれ、低空で機銃掃射を繰り返す仏軍機1機をたちまち海へ撃ち落とす。

51年ごろ、彼は狩猟の腕を買われて南隣のクアンビン省ドンホイ県へ移住した。熊がトウモロコシ畑を荒らすので、ということであった。そこでも民兵訓練を続けるうちに、同県婦人会代表の世話で18歳の娘チュオン・ティ・ヴァンと結婚した。

54年、天川はDRV政府中央の指示で北へ赴き、北緯16度以北からの第1次帰国団の学習会に出たが、帰国準備のためにドンホイに帰ったら県の当局者に「妻子と一緒になければ帰るな」といわれ、62年に妻と男女各二人の子を連れてハイフォンから日本の貨物船で帰国し、農業と愛玩用カブトムシ養殖で暮らすことになった。

55年の人民裁判騒ぎは、もちろん見聞した。彼の知る限りで地主4人が処刑された。45年に滞在したハティン省ドクトー県の地主屋敷の女主人は、土地改革以前に病死していた。その娘は無事であったという。

水江源治（福井県出身、上等兵）。師範学校を出て、郷里の小学校で1年間教えたところで陸軍に召集され、騎兵第120連隊の騎馬小隊へ。その小隊は中国で第22師団に編入された。45年、師団は中国からタイ方面へ派遣されることになり、ヴェトナムを南下中、ヴィン市で日本敗戦の日を迎えた。

水江ら5名の騎馬小隊は、市内の日本語学校に宿営していた。馬の世話以外に仕事がなく、ただ漫然と復員の日を待つ日々であった。ある日、若いヴェトナム人たちが来て、彼らをヴェトミンの集会所（都心の大きなヴィラ）に誘った。何度かそこへ遊びに行くうちに、若者たちは5名にヴェトナム残留を熱心に勧め始めた。「敗戦日本に帰っても苦しいは

ずです。ヴェトナムにはまだ希望がある。わが国の独立のために残ってほしい」と。敗戦のショックで茫然としていた水江たちは、彼らの愛国心にほだされ、5名全員で離隊を申し合わせた。

水江は一人息子で、郷里には母がいた。しかし帰国する気にはなれなかった。米英に負けたまま帰れるものかという怒りと屈辱感があった。また彼らは中国でときたま日本軍将兵の残虐行為を見聞していて、あんなことをしたからには軍人すべてが米軍支配下の祖国で処罰されるのではないかと、そういう恥辱をそのままにして帰国してよいのかという気分もあった。

やがて部隊は英軍による武装解除を受けるためサイゴンに向かった。水江ら騎馬小隊の5名は夜間行軍中に脱走し、山伝いにヴィン市に戻った。乗馬なので脱走は容易であった。ヴィン市のヴェトミン集会所では若者たちが待っていて、彼らをハティン省の山村へ送った。彼らは地元の民兵たちに護衛されて村民の家々を転々としながらヴェトナム語を学んだ。粗食ではあったが、食べ物に不自由はしなかった。

ヴェトナム語を多少覚えたころ、地元ヴェトミン機関の要請で、村々の若者たちへの軍事訓練を始めた。整列、号令、点呼、匍匐、突撃などの基本動作や銃剣術（竹槍を使用）を教えた。村民たちが日本人は何でもできているらしいのが不思議であった。そのうちに、第4軍区司令部から県レベルと省レベルの民兵組織に、わずかながら旧日本軍と旧仏印軍の小銃が配布され、水江らは銃撃方法を手始めに基礎的な戦闘訓練を施すことができるようになった。

省内にはヴェトミンに加わった元日本兵数十名がいた。騎馬小隊の5名と前記の中山（日本人会長）や天川や綱川のほかに、成田某、田村某、森某、中井某（ヴェトナム名ダイ）、サム、ロン・ズン、ヴォー・キイなどである。中井は中国の海南島から食糧買い出しに来た海軍軍属であつたらしい（\*）。水江ら3名は省隊部直属の訓練要員として、省レベルの民軍（のちの地方軍）に村落レベルの民兵訓練よりもやや高度な訓練を施すことになった。水江ら旧騎馬小隊の5名は、前記のナベ攻撃にも参加した。日本人6名戦死という彼の証言は、天川のそれと一致している。ただし、水江によると、日本人戦士を主役とするナベ攻撃は47年にも一度行われ、水江はこの第4回攻撃にも参加した。仏軍ナベ基地の完全破壊はできなかったが、4回にわたったこの攻撃は、仏軍に元日本軍将兵多数がヴェトミン軍を補強しているという一種の脅威感を与え、ラオス方面からの仏軍の行動を多少とも抑止する効果があったのではないかと水江や天川は語っている。

\*のちに人民軍総司令部の軍事参議官となった中川武保とともに海南島から来た海軍軍属グループの一員と思われる。中井のフルネームや、その後の運命は不詳。

46年末に全国抗戦が始まると、ハティン省とゲアン省のヴェトミンは仏軍の北上を阻むため、ハティン、ヴィン両市の建物と周辺の国道1号をめちゃめちゃに破壊したが、仏軍はこの地方を迂回して海路ハイフォンを目指したため、この地方では戦闘はなかった。水江と一緒に離隊した騎馬小隊の5名のうち、中野某、中森某ら3名は南部に移って消息を断った。水江と大西忠男（京都府宇治市出身、一等兵、グエン・チュン・ナム）だけが最後まで生き残った。二人はハティン省で軍事訓練を続けたのち、50年ごろに同省クアンロックの第4戦区兵器工場に移り、手榴弾や地雷の製造に励んだ。

ハティン省の日本人はおおむね現地女性と結婚していた。水江も49年ごろ、同省ドクトー（リンカム）県でグエン・ティ・ホン・ガーという18歳の娘と結婚した。彼女は北部ハイズオン省の生まれで、ハノイに住んでいたドクトーの地主の娘と一緒に疎開し、その地主の家で女中奉公をしていた。水江夫妻はその地主の建ててくれた家に前記成田某の夫妻と同居し、のちにクアンロック町の市場に移った。新居は町長の建ててくれたもので、妻はそこで飲食店を開いた。やがて娘が生まれた。その娘が3歳になった54年春、彼はDRV中央から日本人を帰国させるとの通知を受け、北部へ行って第1次帰国団の学習会に出たが、そのあと妻の実家へ別れの挨拶に行き、ハノイへ出てみたら、第1次帰国団はもう出国していた。彼はタイグエン省で土地を分けてもらって、妻子とともに次の帰国のチャンスを待った。やがて独立戦争は終わった。水江一家はハノイで仕事を捜すうちに、インドシナ停戦協定実施国際監視委員会（ICC）から日本大使館のあるサイゴンへ行けといわれ、ICC準職員の身分でハイフォンから海路サイゴンへ。日本大使館での帰国手続きに手間取り、1年ほど経ってからようやく帰国することができた。

彼は故郷で十数年ぶりに教員生活に戻った。妻は地元の製材所などで働き、日本国籍を取得した。井川は水江の自宅を訪れたとき、ヴェトナム生まれの夫人が言葉、立居振舞、和服の着付その他あらゆる点で教養ある日本女性としか思えないことに驚いた。それは多くの日本人戦士がヴェトナム社会にたちまち馴染んだことと同じく、両国の文化的類似性と両国民の相似性を物語るものであった。

大西は兵器工場で働いていたころ、仏軍機の襲撃を工員たちに知らせるため廃品の鉄道レールを乱打したとき鉄片が右目に刺さったため眼球摘出手術を受け、休養を続けたのち、

第1次帰国団に加わって単身帰国し、故郷京都で青果物仲買業を営んだ。ベトナムの妻との再会の機会はなかった。

[井川付記]

ヴェトミン幹部が日本人に独立戦争参加を求めたとき「皆さんの安全は保証する」と語ったというのは、天川ら「ハティン組」の場合だけではない。海南島からニンビン海岸に来た杉原剛らも同じ言葉を聞いている（杉原の項参照）。これは独立宣言前後のDRVの党・政府指導部の日本人勧誘政策の背景にあった情勢判断を示唆している。井川の推測は次の通りである。

仏軍は英軍の支援を得てサイゴンを制圧したが、植民地諸民族の独立が時代の流れとなり、米国すらヴェトミンに一定の「了解」姿勢を示しているからには、フランスがベトナム全土の再征服に乗り出すかどうかは不確定であって、外交交渉による独立達成は不可能ではなく、仮に不可能であるとしても交渉自体は長期化する、とDRV指導部は予測していた。その交渉期間にフランスのベトナム再征服を阻止しうる軍力を蓄積すればよい、と。

この予測を立てば、旧日本軍の将兵には、武器弾薬の提供と、仏軍に対抗しうる軍隊をつくるための教育・訓練だけを求めればよい——危険な実戦参加までは求める必要がない——ということになる。「安全を保証する」という言葉は、そういうDRV中央の判断を反映するものであった。しかし現実の情勢は、その判断を裏切って急速に推移した。フランスは独立交渉の最終的結論が出る前に武力による再征服に乗り出し、DRV中央は全国抗戦を宣言せざるをえなくなった。その結果、日本人も一定期間、形成過程のヴェトミン軍の先頭に立って戦わざるをえないことになった。つまり彼らの安全は保証されないことになった。

この推測はまず間違っていないと思われるが、我々はまだこれを裏づける公式史料を入手していない。

## [小森由男]

ヴェトナム名グエン・ギ。栃木県出身。天川健と同じ旧日本陸軍第22師団第86歩兵連隊通信隊の兵長（上等兵？）であった。1945年8月に中国から南下中、連隊司令部の一次駐屯したゲアン省都ヴィンで日本敗戦の知らせを聞いた。天川（連隊司令部付ではなかった）はずっと前方を南下していた。

通信隊にいたので、情報には通じていた。ヴェトミンとかホー・チ・ミンとかインドシナ共産党とかについても一応の知識を得ていた。敗戦後の自分の身の振り方については多少の迷いがあった。しかし帰国できるという保証はなかった。日本という国が白人国家との戦争に負けたのなら、自分一人でもアジアの一角に白人に屈しないという日本人の精神を残そう、ヴェトミンに協力して存分に暴れてやろうと思った。ヴェトミンが民族独立を至上の目標としている限り、その指導集団の政治理念などはどうでもよかった。

ヴィンには台湾拓殖会社（日本の国策会社の一つ）の事務所があり、その駐在員某がヴェトミンに協力していた。小森と数人の戦友は、ある日、その人に米や弾薬を用意してもらって武器を携えて離隊し、市外の森で地元ヴェトミン組織の指導者と会った。彼らはハティン省北部リンカム県（現ドクトー県）のある村へ案内された。

ハティン省にはファン・ディン・フン（ヴェトナムの民族英雄の一人）という名の連隊級の部隊（中団）が生まれていて、小森らはそこへの入隊を村長に勧められた。ヴェトミンの正規軍と聞かされていたが、実際に参加してみると、それはごく初歩的な軍事訓練すら受けていない集団で、武器も古風なマスケット銃が10～20人に1挺ある程度であった。

小森らは村長の家に滞在して、ヴェトナム人隊員を訓練しながら、ヴェトナム語の学習を始めた。先生は元日本軍兵補らしい男であった。

45年9月から、小森は天川らとともに、ラオス領内ナベの仏軍基地を3回攻撃した。仏軍基地を一時は占拠したこの戦いで、現地ヴェトミン指導部は日本軍人の戦闘能力に驚き、その能力を生み出した日本式軍事教育への信頼感を一気に強めたようである。そのためか小森は一緒にナベを攻撃した黒澤光男（旧第86連隊教育隊員）とともに、同年11月ごろ第6軍区のフーイエン省に開設された士官養成施設の教官に任命され、南北縦貫鉄道を列車で南下した。フエ、ダナンなどの主要駅には復員のため待機中の日本軍将兵が必ず集まっていたが、小森は彼らとともに帰国したいとは少しも思わなかった。ヴェトナム



であくまで戦うという決意に変わりはなく、彼は日本軍将兵に脱走兵と見破られないよう丸刈りの頭をベレエ帽で隠し続けた。

士官養成施設は省都トイホアに近いナンソン村にあり、同省に司令部を置くヴェトミン軍大団（\*）のダン・コン・カイン司令官が中央に要請して開設したものであった。中隊（旧日本軍の小隊）と小隊（同分隊）のレヴェルの指揮官を養成する学校で、トイホア陸軍中学（陸軍士官学校）という名称は、この学校が第5戦区のクエンガイ陸軍中学を縮小して模倣したものであったことを物語っている。

\*旧日本軍の旅団ないし師団であるが、当時のヴェトミン軍にはまだ正式の大団はなかったので、これはフーイエン地方のヴェトミン組織が数千人規模の抗戦集団を勝手にそう称していたものと思われる。

生徒は大団の若い兵士約100名で、教官10名はすべて旧日本軍を離脱した士官、下士官、上等兵であった。教官を統率していたのは、ハナヤ（花谷？）という、旧日本陸軍のどこかの師団の参謀部にいた元少佐である。ハナヤはまだ若く、極めて温厚かつ誠実な小柄な男で、旧日本陸軍士官学校の出身といわれていた（本人は個人的なことをほとんど口にできなかった）。彼に対する大団の人々や教官たちの信頼は絶大であった。

教官団は旧日本軍の『歩兵操典』を簡略化したものを通訳のヴェトナム人に越訳してもらって教科書代わりに使い、整列、点呼、駆け足、銃の持ち方、撃ち方、突撃、匍匐前進といった初歩中の初歩から塹壕の掘り方、手榴弾の投げ方、偽装、奇襲、白兵戦まで、旧日本軍でいえば初年兵訓練のようなことを毎日行なった。校舎は役所跡のような煉瓦建ての広い洋館で、教官も生徒もそこに寝泊まりした。待遇はよかった。米飯は腹いっぱい食え、鶏、豚、魚、野菜などの副食は教官に限って一品多かった（専属のコックがいた）。

教育期間は6ヶ月で、それが終わるころには生徒全員が見違えるように軍人らしくなっていた。教官たちは大団の兵舎でしばらく休養したのち各地へ分散した。小森は後日、ハナヤが南部で不慮の死を遂げたという話を耳にした。彼にいわせると、ハナヤは品性と能力の両面で死なせるには惜しい立派な人物であった。

小森はかつて日本軍の同じ部隊（第86歩兵連隊）にいた上等兵の宮下義一（新潟県出身）とともに、すでに中隊長や小隊長になっているヴェトミン幹部に対する補充教育を各地で施す役割を与えられ、まずフーイエン省北部のソンカウへ、次いでトイホア市南方の山村へ。補充教育が必要とされたのは、中隊・小隊級の指揮官といっても正規の軍事訓練をほとんど受けたことがなく、従って初年兵に毛の生えた程度の軍事知識・技術しか持た

ない者が多かったからである。小森ら二人は、トイホア陸軍中学のそれとほぼ同じ内容の小隊教練や中隊教練を行った。

小銃は1個小隊に1挺しかなかった。武器の不足を補うには夜襲が効果的なので、生徒たちは夜間演習を特に好んだ。小森は匍匐前進の訓練中、上半身を起こした生徒の頭を指揮棒で軽く叩いて、あとで批判された。日本式の厳格さは必ずしも通用しなかった。

教練が一通り終わると、大隊単位で実戦（夜戦）を行った。カインホア省ニンホアの海岸に上陸した仏軍の小部隊に待ち伏せ攻撃を仕掛けようとし、逆に迫撃砲弾の雨を浴びて小森自身が九死に一生を得たこともある。

その後、小森は中部高原のコンツム付近に駐屯する中団（旧日本軍の連隊）に招かれ、ただ一人で幹部補充教育と陣地構築指導に赴いた。1ヶ月ほどの滞在中、ラオス国会議員と称する男にラオスの抗仏部隊を訓練してくれと頼まれたが、これはラオス事情がよくわからないので謝絶した。

教練に出かけた土地の住民は、徹底してヴェトミンを支持していた。だが、フーイエン省やカインホア省で活動していた元日本兵の間では、「正規軍はいいが、民兵には気をつける」というのが常識になっていて、正規軍のヴェトナム人幹部までがそう語っていた。民兵はヴェトミンへの信頼感が厚いだけに余所者（とりわけ外国人）への警戒心も強く、また視野が自分たちの生まれ育った村落に局限されているために、ちょっとしたことで仏軍に通じているのではないかというような疑惑に駆られがちで、そうなるかかわからないというのであった。

しかし小森は行く先々で歓迎され、しばしば住民から酒食のもてなしを受けた。固定給はなく、ヴェトミン部隊（たいていは中団）の指揮官が毎月少額の金を渡してくれるだけであったが、それで困ることはなかった。そもそも金の遣い道がなかったし、また住民がしょっちゅう物品を提供してくれたからである。

小森は北緯16度以南の地域で活動していたため、16度以北にいた日本人の第1次集団帰国（54年）に加わることはできず、独立戦争終結ののちインドシナ停戦協定（ジュネーブ協定）の仏越両軍分離規定に従って北上するヴェトミン軍とともにハノイに移り、ハイフォンの造船工場に勤めた。のちに共産党に深刻な自己批判を強いた55年の性急な国家改造（地主・ブルジョワ打倒）は、嫌でも目にせざるをえなかった。人民裁判による処刑を目撃したこともあるし、ヴェトミン軍で活躍した息子が戦場から戻ったら「愛国地主」の父親が処刑されていたというような悲劇を耳にしたこともある。だが、それでヴェ

トナムの土と人への親愛感が薄れたわけではない。

彼は59年、石炭輸入に来た日本の貨物船で、現地で得た妻子とともに帰国した。郷里には彼の墓があった。父母が彼を戦死したものと思ってつくった墓である。兄二人は第2次大戦で戦死していた。彼とともにナペで戦った元第86連隊兵士のうち、天川健は62年に北部から、黒澤と宮下は75年以降に南部から、それぞれ妻子とともに帰国した。最初の戦闘で負傷した川又正二（上等兵、栃木県出身）は帰国しなかった。ヴェトナムで病死したとの噂がある。

## [富永朋蔵]

旧日本陸軍第22師団(原兵団)は、1945年に中国戦線からタイに向かう途中、ヴェトナムで敗戦の日を迎えた部隊である。同兵団通信隊の上等兵であった富永(新潟県出身)は、その日をフエの旧王城で迎えた。通信隊は旧王城に駐屯していたからである。彼は炊事班に所属していたので、食糧購入のため外出は自由で、ヴェトナム人と接する機会は極めて多く、ヴェトナム社会には何となく親しみを感じていた。

部隊にいた日本語のうまい兵補(現地人から徴募した補助兵)の一人が、「わが国の独立のために、一人でも多く残って下さい。武器もほしい。銃弾一つでもほしい」と、しきりにヴェトミン参加を求めた。そういわれるまでもなく、富永はヴェトナム残留を決意していた。日本の降伏を黙って受け入れる気にはなれなかったし、ヴェトナム人の独立志向に共感してもいた。

2週間後、彼は4名の通信隊員とともに脱走した。食糧の仕入れに出て、そのまま帰隊しなかったのである。フエの中央市場のあたりにヴェトナム人兵補の用意した自動車が待っていた。その車は同年3月の明号作戦で日本軍が仏軍から没収したものであった。富永らはその車で現地ヴェトミン機関の事務所に向かった。同僚4名は、塚本三郎兵長(茨城県出身)、松井二郎伍長(群馬県出身)、山田利之(新潟県出身)と、もう一人の某(氏名・階級・出身地不詳)であった。某はのちにヴェトミン軍の一員として戦ううちにクアンナム・ダナン省のタムキイで病死した。

彼らはヴェトミン機関によってフエ南方5kmほどの川の中洲に案内され、そこに3ヶ月ほど滞在してヴェトナム語教育を受けた。宿舎は誰かの大きなヴィラ(邸宅)で、食物も十分に提供された。この先ヴェトミンにどう扱われるのか、場合によっては殺されるのではないか、という不安はないでもなかった。日本兵殺害の噂が敗戦直後から耳に入っていたからである。しかし逃げる気はなかった。川の中洲にいては逃げる方法もなかったし、民兵にそれとなく監視されてもいたが、それよりもヴェトナム独立に手を貸すつもりで離隊したからには殺されてもいいという気分であった。

ヴェトナム語教育が終わると、5名はヴェトミン軍の小単位に配属され、民兵部隊(民軍)の初歩的軍事訓練を行うことになった。富永はホー・ヒック(Ho Hich)というニックネームを持つ小団(旧日本軍でいえば大隊)に配属された。この小団には日本人が多く、のちに中部有数の精強部隊として知られることになる。小団長グエン・ヴァン・タンは日

本軍兵補出身で日本語がうまかった。この小団の民兵訓練は、元日本軍人2名にヴェトナム兵士数人を加えた小隊（旧日本軍の分隊）を村々へ派遣するという方式で行われていた。ただし武器は極度に不足し、小銃（旧仏印軍の単発銃または旧日本軍の三八銃）は1個小隊に1挺あるかないかという程度であった。

富永らの活動範囲はトアティエン・フエ、クアンナム・ダナン、クアンガイの海岸3省と中部高原のザライ省であった。日本でいえば、三重、愛知、静岡、岐阜の4県に相当する広さである。ザライ省では象に乗って禪姿のマラヨ・ポリネシア系少数民族（ザライ族、コール族など）の高床式の家を転々とし、しばしば壺入りの雑穀酒をふるまわれながら、その少数民族の若者たちに整列、行進、散開、匍匐前進、射撃、奇襲などの訓練を施した。

日本人はどの村でも最上の賓客として厚遇された。日本人の方も年配の現地人男女を「お父さん」とか「お母さん」とか呼んで、村人たちに礼儀正しく接していた。1日2回の食事（午前10時ごろ朝食、午後5時ごろ夕食）に不足はなかった。ただし芋が半分を占めていた。魚や肉の煮付けがほんの少しついた。当時、ヴェトナム軍はどこへ行っても自活するという建前であったが、富永の見たところでは村々の住民が経費の半ばを支えているようであった。

ヴェトナムの支給した軍服はカーキ色か灰色のワイシャツ式のものであった。富永はいつも離隊直後に支給されたホーチミン・サンダルを履いて移動していた。

戦争の激化し始めた47年初頭になると、こういう小規模な民兵訓練は一段落し、小団はクアンガイ市を本拠として各地で仏軍と戦いながら、大隊（旧日本軍の中隊）単位で正規軍ないし地方軍の兵員徴集を兼ねた本格的な軍事訓練を行うようになった。しかし富永は、九死に一生を得るような戦闘を経験したことは一度もない。

DRV第5戦区司令部のあったクアンガイ市には、ヴェトナムに参加した日本人が多かった。50人はいたであろう。しかし富永はクアンガイ陸軍中学には関係しなかった。斎藤憲兵少佐や石井少佐とは市内で出会ったことがある。

共産党がヴェトナムの中核であることは薄々知っていたが、その活動を目にしたことはほとんどない。この地方では50年代に入っても「地主打倒」などという騒ぎは起きなかった。政治委員（共産党員）による政治・思想教育は大隊単位で週に2時間程度行われていて、これには日本人も出席していたが、その中身は「共産主義教育」と呼べるようなものではなかった。

53年ごろ、富永ら「ホー・ヒック小団」の日本人戦士は、小団長から退役勧告を受け

た。小団長は「長らく奉仕してくれて感謝する。我々は皆さんのおかげで自力で戦うことができるようになった。今後は民間で努力してほしい」といった。身の振り方についての日本人たちの論議が始まった。ディエンビエンフー決戦の近づいた54年春、帰国したい日本人戦士は北に集結せよという通達があったが、生涯ベトナムに住むという富永の旧日本軍脱走以来の決心は変わらなかった。

彼はインドシナ停戦協定締結（独立戦争終結）の直前に結婚した。妻はクアンガイ市内の砂糖問屋の娘であった。クアンガイはベトナム有数の砂糖産地で、卵白を使った板状の巨大な白砂糖が名物である。妻の実家はそれを製造していた。

独立戦争終結後ほどなくベトナムは北緯17度の暫定軍事境界線で南北に分断され、サイゴンには反共親米のゴー・ディン・ジェム政権が生まれたが、クアンガイ省は50年代を通じて平穏であった。元ベトミン戦士が迫害されるなどということはなかった。サイゴン政権の支配はうわべだけで、実際はベトミン組織が支配していたからである。

独立戦争終結から4年を経た58年、富永は妻子とともに南のサイゴンに移った。サイゴンには日本大使館や日本企業の駐在員事務所が開設されていると聞かされていたからでもあるし、北緯16度以北からは妻子同伴では帰国できないと聞かされていたからでもある（実際に妻子同伴が許されなかったのは54年の第1次帰国団のみ）。一緒に離隊した同僚のうち、塚本と松井は富永と前後してサイゴンへ移住した。すでに北部へ行って活動していた山田とは、ベトナムでは再会する機会がなかった。

サイゴンへ行ってみると、そこには北部から移ってきたベトミンの日本人戦士が数人いた。妻子を残して帰国するのが嫌だったから、というのが彼らのサイゴン移住の理由であった。

富永は兼松江商サイゴン事務所の雇員になった。サイゴン在住の元ベトミン参加日本人数十名は、60年ごろ富永を幹事役とする親睦・相互扶助団体「寿会」を結成した。やがて激烈きわまる第2次インドシナ戦争（ベトナム戦争）が始まったが、富永ら元ベトミン戦士の多くはこの戦争には一切かかわらなかった。サイゴン政権下に住みながら、ひそかにヴェトコン（ベトミン残存組織を基盤とする南ベトナム解放民族戦線）の関係者ともつきあうという日常であった。

富永の妻の親戚はDRV政府の支配地域（北ベトナム）にも少なからず住んでいて、一族は北緯17度の南北境界線など存在しないかのような深い心の絆で結ばれていた。そのことや長年の「ベトミン体験」から、富永には、ベトナム人大多数が地域や思想傾

向の違いを超えた民族的一体感を持ち、従って心の底では諸大国の介入による国家分断・南北抗争や同胞相撃の戦争など少しも望んでいないことがよくわかっていた。それは68年の「テット攻勢」(解放戦線の一斉蜂起)と米韓両軍およびサイゴン軍の反撃による惨烈な市街戦のときにも感じ取れた。「あの最中に、ヴェトコンの若い連中がビンタイ(サイゴン市内)の酒造所で酒を飲んで歌っていても、サイゴン政府の上の方は全然知らなかったんですからね(市民が通報せず、公安機関の末端要員も見て見ぬふりをしていたから)」と、彼は井川に語った。

「寿会」の会員は75年4月のヴェトナム戦争終結ののちも、富永のそれと似たような職業に就いて南部に住んでいたが、ほぼ全員が78年までに公安機関経由のヴェトナム政府の勧告(実質的要求)を受けて妻子とともに帰国した。勧告の理由は具体的には明示されなかった。しかし、これは当時のヴェトナムの危機的状況と無関係ではなかったと考えられる。

中国の衛星国となった隣国カンボジア(ポル・ポット政権)との75年以来の国境武力紛争は、77年末には遂に全面戦争の様相を呈し、同時に中国の軍事的圧力は日増しに強まった。78年、中国はカンボジア派遣の軍事顧問団を数千人規模に増強、戦闘機群をカンボジア西部に展開し、さらにカンボジア中部で中国空軍用の大規模な空港の建設に着手した。中越国境では武力衝突が頻発し始めた。米国とその同盟諸国(日本を含む)は中国に好意的であった。西側諸国の援助はゼロに近く、ソ連の援助も激減していた。ヴェトナムの国内経済状況は急速に悪化しつつあった。この状態で南(カンボジア国境)と北(中国国境)から軍事挟撃を受ければ?

当時のヴェトナムは、そういう深刻きわまる国防上の危機に直面していたのである。その危機はやがて現実の苦難となった。南北挟撃を恐れたヴェトナムは、78年末にポル・ポット政権を武力で打倒したが、中国は79年2月、大軍をヴェトナム北部に送って武力報復を行う一方、米英両国や一部ASEAN諸国とともにカンボジアの反越ゲリラ集団を育成・支援した。国連で「侵略者」の烙印を押されたヴェトナムは世界の孤児となり、いかなる国の政府開発援助や投資も受けられぬまま、10年にもわたってカンボジア武力紛争の泥沼に苦しむことになった。

それはともかく、六十の坂を越えた富永らが、慣れぬ祖国でヴェトナム育ちの妻子を養うのは容易なことではなかった。日本は世界第二の経済大国に成り上がってはいたものの、もはや他国の独立のために挺身した同胞に敬意を払うような国ではなくなっていた。公的

機関による支援はほとんどなかった。彼らは郷里の親戚、サイゴン時代に勤めた日本商社の知人、旧日本軍の戦友といった人脈を辿って民間会社の下級社員、福祉施設の管理人、ビルの警備員、インドシナ難民定住促進センターの通訳その他、高収入には程遠い職場をみつけて働き続けた。労苦の余りにも多すぎる生涯であった。これはベトナム独立戦争に参加して帰国した日本人すべてについていえることであろう。

[井川追記]

松崎兼夫ら「寿会」の会員数名は1962年、ヴェトナム時代の人脈を生かして、日本政府援助のダニム・ダム建設現場で解放戦線に拘束された日本人技師の解放に尽力した。また某会員は64年、サイゴン東北部における某新聞社特派員と解放戦線地方指導者のインタビューを斡旋した。サイゴンの日本大使館職員であった「寿会」のメンバー坪井達（80年に帰国）は、75年のサイゴン陥落のとき、73年にカンボジアで赤色クメールに殺害されたカメラマンノ瀬泰造の、多数のフィルムを含む遺品一切を井川から預かり、のちにハノイの大使館を通じて日本の遺族に送り届けるため努力を惜しまなかった。



## [藤本猛省 (たけみ)]

1944年、旧日本陸軍第5航空軍分遣隊の一員（無線通信担当の下士官）としてサイゴンからハノイへ派遣され、45年春、ヴィンの飛行場に移り、そこで日本敗戦の日を迎えた。23歳であった。中国国民党軍による武装解除を受けるため再びハノイへ。DRV樹立直後のハノイでぶらぶらするうちに、独立をめざすベトナム人社会の熱気が伝わってきて、それなら俺も戦おうという気分になって離隊したが、独立運動諸派の錯綜した関係がよくわからず、とりあえずバオダイ派（\*）の民兵グループに参加した。そのグループはほどなくヴェトミンの一隊に襲撃され、藤本はハノイ市内の監獄に拘禁された。

\* 仏印時代の安南保護国王で、45年に日本軍によってベトナム全土の国王に擁立され、日本敗戦後にDRV政府最高顧問となった。独立そのものは求めていたが、フランス連合内の独立でよしとする親仏的人物。49年、フランスがサイゴンに樹立した傀儡国家ベトナム国の元首となった。バオダイ派と藤本のいうのは、日本軍のバオダイ擁立ときに結成されたダイヴェト（大越）党系の集団と思われる。

藤本は1～2ヶ月後、ハノイで開業していた高澤民也軍医やヴェトミン参加の日本人高崎某（\*）の尽力で釈放され、ヴェトミンに加わってタイグエン市へ。ここでヴァー・ホック・ナム（武学南）というベトナム名をもらった。

\* 北海道出身の民間人高崎正男と思われる。彼は現地妻子を残して帰国した。息子は後年タイグエン市で某国営工場の経営責任者になった。

やがて仏軍がハイフォンに上陸、全国抗戦が始まり、DRV中央政府機関とヴェトミン軍主力部隊が北部都市部の一般市民とともに、同市を中心とするヴェトバック地方へ続々と疎開してきた。北部のヴェトミン軍には電気通信の技術者が皆無に近かったので、航空通信兵であった藤本は極めて貴重な存在となり、ヴェトバック連区（第1軍区と第2軍区）参謀部直属の電信班主任技手に任命されて、連区司令部のあるダイツーに移った。部下約20人に手真似足真似で電信技術を教えながら、DRV中央諸機関のあるヴェトバック根拠地中心部に電線を張りめぐらすのが彼の最初の任務となった。のちには作戦ごとに電信機器や携帯用発電機を抱えて実行部隊指揮所とともに移動しながら電線を張るのも重要な任務となったが、この作業はしばしば生命の危険を伴っていた。作戦では電線架設が急務中の急務の一つで、しばしば地形確認などのためジャングルを出て「空の見える場所」を

走らなければならず、そのつど仏軍機に発見されて機銃掃射や爆撃の標的となったからである。藤本も何度か機銃掃射を間一髪で逃れたことがある。

D R V 政府・軍の電信機器には日本製もあればフランス製もあった。日本製の機器は、日本軍の武装解除にきた中国国民党軍が横流したものらしかった。発電機はすべてフランス製であった。電池（1.5V）は亜鉛板と塩水でつくった。

有線の通信機のメカニズムや操作・修理方法を部下に教えるのはさして困難ではなかったが、無線機となると容易ではなく、結局は藤本自身が通訳つきで操作することになった。そのうちにヴェトナム語に慣れて、通訳の必要もなくなった。ヴェトバック連区司令部の作戦班にいた駒屋俊夫とは、有線・無線で頻繁に情報を交わした。

独立戦争も終わりに近いころ、のちに南ヴェトナム解放民族戦線の中央委員と南ヴェトナム臨時革命政府外相を勤め、1990年代にはヴェトナム副大統領となったグエン・ティ・ビン女史が、南部からヴェトバック根拠地を慰問に訪れたことがある。藤本は若くて美人の彼女に握手を求められて感激した。歓迎会場に電灯をつけたのは藤本である。仏軍に逮捕・投獄された体験を語った彼女は、藤本がその仏軍の発電機を使っているのを見て驚いた様子であった。

ヴェトバック根拠地では、日本人は一般にザオスー（先生）と呼ばれていた。軍事教育に携わる者が多かったからである。しかし藤本は実技部門で働いていたためか、単に同志（ドンチー）、ナムさん（オン・ナム）、あるいはチューニエム（主任）と呼ばれていた。

抗戦初期には、常に裸足で行動した。当時、日本でも田舎の少年は裸足で通学することが珍しくなかったから、田舎育ちの藤本は大して苦痛とは思わなかったが、しかし岩山と茨だらけの茂みや竹林が多く、爆弾の破片なども散在するヴェトバック地方では、裸足で歩くのはしばしば怪我のもとであった。怪我は破傷風など命取りの病気につながっていた。

電信班の役割が最も重要な役割を担うのは広域作戦においてであった。それを立証したのは49年の国道4号戦役である。この戦役では電信が大部隊の運用を効果的に助けた。藤本はこの作戦のあと、初めてタイヤ製のホーチミン・サンダルと仏軍からの戦利品らしいマントを支給された。マントをもらったのは藤本だけである。

藤本は人民軍の歩兵部隊とともに、この作戦で解放されたランソン市内を行進した。彼は井川とのインタビューで、そのときの感動を「兵の歩みの頼もしさ……」と日本の古い軍歌に託して表現したが、これは彼の意識において――あるいは彼を一典型とする旧日本軍人の意識において――対仏抗戦への参加が対米英戦争の延長線上にあるアジア諸民族解

放の戦いであったことを示唆するものかもしれない。

藤本は53年の西北戦役で中国領内作戦にも従軍した。このころになると、中国の援助で有線・無線の電信機器や関連部品もかなり潤沢になり、電信関係のベトナム人要員も増加していて、藤本はもはや不可欠の人材というような存在ではなくなっていた。それでも彼が連区参謀部の電信班主任のポストにとどまることができたのは、もしかしたらDRV政府が政治・軍事機密に触れることの多い電信分野に外国人（この場合は中国人）を直接には参入させたくなかったからかもしれない。藤本は外国人ではなくて新ベトナム人であった。

彼はヴェトバックで結婚した。妻は抗戦初期によく休みに行っていたタイグエン市のカフェの女店主の縁者で、連区司令部の人々は新婚夫婦に牛1頭を贈って盛大に祝ってくれた。

彼は54年の第1次帰国団に加わって単身帰国し、日本でも電機関係の仕事が続けた。タイグエンを訪れて、かつての妻子と再会したのは90年代中頃である。かつての、というのは、妻であったベトナム女性が藤本との再会を諦めて再婚していたからである。彼女は新たな夫（ベトナム人）とともに藤本を暖かく迎えた。彼女と藤本の間生まれた息子は、対米戦争のとき「敵性国家日本」につながる人物としての社会的差別を避けるため人民軍兵士を志願し、南部の戦場でしばしば危険を冒したという。その息子もすでに結婚していた。藤本は孫たちへの教育支援を惜しまなかった。

## 〔石井卓雄〕（第1次報告書追加）

第1次報告書には旧日本陸軍第55師団の石井卓雄少佐のヴェトナム名をチャン・チ・ズンと書いたが、クアンガイ陸軍中学で学んだチャン・ツー・キン退役大佐が井川に語ったところによると、石井少佐はクアンガイではトン（Tong）と呼ばれていた。48年末または49年、石井は複数の日本人を含む1個大隊（旧日本軍でいえば中隊）を率いて、南部の「委員会」（南部のDRV最上級行政・軍事機関と考えられる）の代表団が北部から帰るのにクアンガイから同行した。第7軍区（サイゴン・ザディン地域）で小隊長を勤めていたキンは、彼らの前方の安全を確保するための部隊に加わって、ニャチャン西方の山地へ派遣され、一行を護衛してホンノイ山（標高1,100m）を通過した。同山の南斜面で小休止したとき、石井は彼に前方偵察を求めた。偵察の結果「状況良好」と伝え、石井とその部下たちは「委員会」代表団とともに南に向かった。その後の石井らの運命はわからない。

キンは独立戦争終結ののち北部へ移り、対米戦争では64年から連隊長級の野戦指揮官として南部を転戦、サイゴン攻略戦にも参加した。80年代末に退役したのち、ホーチミン市郵政局長を勤めた。彼はクアンガイ陸軍中学ではファン・フエ（加茂徳治）のクラス（第4大隊）の生徒であった。彼はファン・フエ、その助教官チャン・クオック・ロン（峰岸貞意）ら日本人教官のことは終生忘れないと語った。

同じくクアンガイ陸軍中学でファン・ライ（猪狩和正）の生徒であったルオン・ヴァン・ヌオイ退役少将とドー・ツー・クオン退役大佐によると、クアンガイ市内にトンという旧日本陸軍将校がいて、民兵出身の小・中隊長級指揮官に再訓練を施す軍事教育施設（通称「クアンガイ軍政学校」）で教官を勤めていた。ヌオイとクオンは陸軍中学第1期の終了で日本人教官3名（加茂、猪狩、中原）と助教官の青山浩が生徒の大半を連れて北へ移動したあとクアンガイに残り、ときどきトンの指導を受けた。仏軍の北上でクアンガイ地方が半ば戦場になった48年後半、トンは第307小団（大隊）の顧問となった。この小団は「どこでも勝てる第308小団」という歌で中部全域に知られたほどに精強であったが、これはトンの指導によるところが大きい。ヌオイとクオンはトンの本名を知らなかった。しかし「トン氏は堅太りで小柄、そして極めて温和で真面目な性格の人だった」という彼らの記憶が、他者すべての石井評と一致するところから見て、このトンが石井であったことはほぼ確実である。

ヌオイとクオンは、陸軍中学教官やトンのほかに、グエン・ヴァン・タム（旧第34独立混成旅団の斎藤定憲兵少佐と思われる）、ミン・ロン、ニャン、ズンなどのヴェトナム名で呼ばれていた日本人戦士数名を記憶している。クオンはクアンガイで新兵教育などに携わったのち、クアンビン省で小隊長になったが、上官（大隊長）はフックという日本人であった。彼はフックとともに中部高原に通ずる国道9号で始めて仏軍と戦った。フックの上官の中団長（連隊長）は、クオンがクアンガイ陸軍中学で日本人教官に学んだと知って、彼を教練担当官に任命した。彼もヌオイも中部で対仏戦争を戦い抜き、60年代からは対米戦争で活躍した。この両人も、クアンガイで過ごした青春の日々を、多くの日本人の面影とともに終生忘れないと語った。

石井と思われる人物については、実はもう一つ関連情報がある。

旧日本陸軍第22師団第86歩兵連隊通信隊にいた小森由男によると、1946年にクアンガイとニャチャンの間にあるヴェトミン軍第6戦区のトイホアに正規軍士官養成のための通称「陸軍中学」が開かれ、小森はその教官になった。この学校の中心人物はハナヤ（花谷？）という南部から来た元少佐参謀であった。ハナヤはまだ若くて、小柄で、誠実無類の男で、旧日本陸軍士官学校出身といわれていた。同校の6ヶ月の教育期間が終了すると、ハナヤは日本人教官数人とともに南部に向かった。その後、小森は、ハナヤがヴェトミン軍指導者またはヴェトミン参加日本人の何らかの名簿を持っていたために、仏軍に寝返るつもりではないかと南部のヴェトミン部隊に疑われて処刑されたという噂を耳にした（小森由男の項参照）。

石井が第55師団の参謀部にいたこと、また陸士出身の佐官としては当時最年少であったことは確かである。小柄で極めて誠実であったという証言は少なくない。また「花谷」については、それが石井の偽名であったとの複数の証言がある。防衛庁防衛研究所戦史部の立川京一によると、フランスの史料には石井が46年8月にトイホアに設けられた軍政学校の校長になったとの記述があるという。それゆえ小森のいうハナヤが石井であったことは、まず間違いのない事実であろう。

しかし、南部ヴェトミン組織の指揮命令系統が当時いかに不完全であったとはいえ、名簿を持っていた程度のことで「寝返り」の容疑で処刑したなどということは、少なくとも正規軍レヴェルの事件としては到底考えられない。石井とともに南部に赴いた日本人戦士たち（クアンガイに残った陸軍中学副教官峰岸貞意らの記憶では数名ないし十数名）のその後の運命がすべて不明であることも、「ヴェトミンによる処刑」という説に疑問を抱かせ

るには十分である。南部のヴェトミン上層部が石井に疑念を抱いて彼を処刑したとすれば、彼の指揮に従っていた日本人戦士たちも同時に処刑されたと考えてよく、それは独立戦争の全期間を通じて稀有ともいえるべき大事件であって、多数のヴェトナム人に鮮明に記憶されて後世に伝えられたに違いないからである。

石井の率いる日本人戦士グループと南部ヴェトミン指導機関の双方が、両者の離間を図る何者かの策謀の罠に落ちて決定的対立に至ったということも考えられないではないが、その場合も稀有の大事件となって、かなり正確に記憶されてきたに違いない。しかし井川は、そのような記憶を直接にせよ間接にせよ口にするヴェトナム人に出会ったことが一度もない。

ヴェトナムは昔も今も噂の国である。ヴェトナム人の初めて経験した近代戦である独立戦争の時代——それはマス・メディア未発達の情報混乱時代でもあった——には、無数の真偽不明の噂がヴェトナム全土、特に南部と中部に渦巻いていた。ヴェトミンに批判的な者やヴェトミンに敵対する集団が意図的に流す噂も多かった。石井についても、地雷を踏んで死んだとか、南部の何らかのヴェトミン機関と対立して処刑されたとか、仏軍に捕殺されたとか、ピンスエン教団に殺されたとかの話が伝わっているが、すべて想像に発した噂の域を出ない。

「どんなことがあろうとヴェトミンを裏切るようなことは絶対にしない人だった」と小森はいう。目下これだけが信頼するに足る証言である。そういうわけで、我々は当面、石井の運命についての判断を「限りなく『戦死』に近い不確定」としておこう。この判断を補強しているのは、ベトナム協会専務理事西川捨三郎の紹介している石井の元部下グエン・ヴァン・タインの証言（第1次報告書参照）である。石井とともに南部で戦ったタインは独立戦争終結後にサイゴンに住み、旧ヴェトミンおよびヴェトナム共産党とは一線を画する立場に移行した人物である。そのような人物が、石井は50年5月20日にメコン・デルタで戦死したと明確に語り、つまりヴェトミンの恥辱となるような石井処刑の噂を間接的にせよ明確に否定し、サイゴンに石井を顕彰する石碑（のちに香川県善通寺市の自衛隊施設に移設）まで建立したからには、石井の戦死を伝えるこの証言は極めて確度が高いと考えてよかろう。タインの証言が正しいとすれば、彼は石井の部隊にいた日本人戦士たちの運命についても相当な情報を持っていたと考えられるが、彼は75年のヴェトナム戦争終結ののち消息を断った（出国した？）ので、もはや確かめるすべはない。

## [レ・チュン]

独立戦争参加日本人の調査は、しばしば探偵活動じみた謎解きとなる。そもそも本人たちが本名や履歴をほとんど語っていないし、特にヴェトナムで戦病死あるいは失踪した場合、真偽不明かつ断片的な、それも相互に矛盾することの多い伝聞情報しか入手できないからである。クァンガイ陸軍中学の医務官であったレ・チュンなる日本人の本名と履歴も、そういう謎の一つである。

46年6月にクァンガイ陸軍中学の教官になった中原光信（第34独立混成旅団司令部情報将校）は、ヴェトミンに参加してまもない46年3月、ピンディン（ヴェトナム中部）のDRV第5戦区司令部からトイホアへ防戦指導に赴く途中、国道1号に出る手前で、オープンカーに乗った若い元日本兵2名と出会った。彼らは山崎および酒井と名乗り、ラオスの王都ルアンプラバンの駐屯部隊から脱走してきたといった。

彼らは「ヴェトナムの独立に奉仕したいが、どこへ行けばいいんですか」とたずねた。中原は「この道をそのまま行けば第5戦区司令部があるから、そこで俺の帰りを待て」と答えた。約10日後に中原がピンディンに帰ると二人は待っていた。その後、山崎はクァンガイ陸軍中学で中原の副教官になり、酒井は同中学の医務官になった。同年12月、同中学第1期の教育課程終了に伴って中原ら日本人教官が北部に移ったとき、両人はクァンガイに残った。酒井は引き続き同中学で医務官を勤め、やがて仏軍の侵攻でクァンガイ市が「昼は仏軍の支配、夜はヴェトミンの支配」という状態に陥った47年はじめに同市を去った。

山崎のヴェトナム名はクァン、酒井のそれはレ・チュンであった。山崎は機関銃部隊（小隊？）にいたと語っていたが、酒井は戦闘部隊にいたことはないといっていた。山崎はクァンガイ陸軍中学在勤中に酒井のヴェトナム人看護婦と結婚した。

独立戦争終結から数年を経て（1956年末？）、中原が藤田勇（本報告書「個別事例研究」参照）とともに日越貿易会代表団を率いてヴェトナム民主共和国（北ヴェトナム）を訪問すると、佐官級の軍籍（軍医）を持つヴェトナム女性が女の子を連れて彼をハノイのホテルにたずねてきた。彼女はレ・チュンの妻で、女の子はレ・チュンとの間に生まれた一人娘であった。彼女によると、レ・チュンはラオス国境に近いラオパオという峠町に診療所を開き、周辺住民やヴェトミン戦士に信頼されていたが、47年末か48年に「尿の出ない重病」（胆石？）で死んだ。彼は瀕死の床で「北へ行ったミン・ゴック（中原）が生

きていたら、困ったときは相談しなさい。娘はミン・ゴックに頼んで日本へ連れていってもらうように」と言い残した。

その後、激烈な第2次インドシナ戦争（ヴェトナム戦争）が始まり、中原はレ・チュン未亡人と連絡を取ることもできなくなった。その戦争が終わってヴェトナム南北が統一されてから十数年を経た80年代末のある日、ハノイ滞在中の中原は40代の美しい女性の訪問を受けた。レ・チュンの娘であった。彼女は独立戦争終結ののちハイフオンの党幹部子女学校を出て、やがてハノイ大学卒の建築士（工学博士）と結婚、二人の子をもうけたが、夫はイラク派遣ヴェトナム人労働者の総監督を経て東独在住ヴェトナム人学生の監督責任者になり、なかなか帰国しそうにないので、子どもとともに日本へ行きたいと語った。母（レ・チュン未亡人）はゲアン省の行政責任者の一人と再婚したとのことであった。

その後、中原が彼女から何度か受け取った手紙によると、彼女は冷戦終結ののちフランスに移住し、90年代後半にヴェトナムに帰った。それらの手紙にも父の祖国に住みたいとの希望が必ず記されていたという。

ところが、レ・チュンというヴェトナム名を持つ日本人については、中原の話とはかなり異なる情報がある。

ヴェトナムの雑誌『アンニン・テーゾイ』93年5月15日号が伝えたクアンビン省の郷土史家グエン・トゥー（当時83歳）の談話、同誌記者の取材結果、およびピンチティエン省（現クアンビン、クアンチ、トアティエン・フエ各省）で56年に出版された『バオニン地誌』（同省情報局編集）によると、日本敗戦直前の45年5月、7名の日本軍人がボートで同省チョンサー村（現バオニン村）の海岸に着いた。彼らは仏印駐屯歩兵部隊の士官と兵卒で、「連合軍には降伏したくないので脱走した」と語り、地元ヴェトミン組織の責任者の姉ファム・ティ・フオンの家にかくまわれ、中国国民党軍が日本軍の武装解除に来て日本軍の脱走者を捜索したとき同省ラムトゥオン地区に逃れた。ヴェトナム語のわかる2名のうち、日本軍で衛生を担当していたという男（ヴェトナム名ムイ）は医師になり、もう一人の男（ゴー）はヴェトミンの青年たちに武術を教えた（銃がなかったのだ）。

45年8月23日、ドンホイ（クアンビン省都）でヴェトミンが蜂起すると、7名はヴェトミンに参加し、うち5名はヴェトミン部隊とともに南下した。数ヶ月後、ゴーも南のクアンガイ省に移り、そこで軍事訓練を行うことになった。ムイはクアンビン省抗戦行政委員長ホアン・バー・ジェムによってレ・チュンという新しいヴェトナム名を与えられ、省内のクアンチャック病院に勤めた。



その後、レ・チュンはラオス戦線の負傷者を治療する山岳地帯のバナファオ野戦病院に転じ、看護婦ホアン・ティ・ネム・フエ（ニャチャン出身）と恋し合って48年初頭に結婚した。同年9月末、彼は尿道をバクテリアに冒され、排尿ができなくなって高熱に苦しんだが、手術用具がなかったため10月1日に死亡した。妻のフエは妊娠3ヶ月で、娘を出産したのち平野部の病院に移った。娘の名はレ・ティ・ホアン・トゥエンである。

フエは60年にクアンビン省ヴィンリン地区党書記チャン・ドンと再婚し、75年のヴェトナム戦争終結ののち故郷のニャチャンへ帰った。89年9月、フエはヴェトナム外務省にレ・チュンの親族捜しを求める書簡を送る一方、政府当局にレ・チュンを烈士（愛国殉難者）と認定するよう要請した。クアンビン省内の古参ヴェトミン闘士らが協力した結果、レ・チュンは97年8月22日付首相決定第689号により烈士と認定され、遺骨は同年12月にドンホイ県パーゾックの烈士墓地に移された。

フエは99年、ニャチャンで病死した。娘のトゥエンは建設省企画局の上級幹部になっていたが、母の死後に癌で死亡した。

ラオス戦線で活躍したグエン・カック・ロイ退役大佐によると、レ・チュンは大柄の美男子で、かつて怒ったことがなく、医薬品の不足を嘆くこともなく、多くの負傷兵を救った。あるとき彼は、担架がなかったため、ラオスのプトゥルーで重傷を負った兵士をみずから背負い、10日間も山道を歩いて病院へ運んだという。

この記事の筆者は、以上のようなことを延々と綴り、日越両国の関係者に彼の本名や親族に関する資料の提供を呼びかけ、「これは歴史と国際戦士の魂に対する後続世代の責務である」と結んでいる。

さて、クアンガイ陸軍中学医務官であったレ・チュンと、『アンニン・テーゾイ』の記事に登場するレ・チュンは、同一人物なのか同名異人なのか。後者の筆者はクアンガイ陸軍中学のことに全く触れていないが、それ以外の部分は中原の話にかなり似ている。温和で心優しい好男子であったというのは、中原のみならずクアンガイにいた複数の日本人の一致した証言でもある。

日越の証言者のほぼ全部が超高齢者であったからには、記憶違いに発した複数人物の混同ということも十分考えられる。いずれにせよ我々は日越双方の関係者すべてに証言を求めるという途方もない作業を諦めざるをえなかった。それゆえ、当面は、この謎を謎のままとしておきたい。クアンガイ陸軍中学医務官であったレ・チュンに限っていえば、旧第2師団野砲第2連隊の上等兵酒井秀雄（福島県常磐市出身）であった可能性が極めて大き

いが、井川は今のところその確証を得ていない。旧厚生省の『在仏印日本人名簿』（1955年現在）には、酒井について「仏印に健在」とのみ記されている。

#### [井川付記]

ヴェトミンに参加した日本人の間には、自分の過去を語らず、他人の過去を問うこともしないという暗黙の了解事項があった。本名、出身地、旧日本軍の所属部隊や階級なども口にしないのが常であった。偽名を使う者も多かった。従って「山崎」と「酒井」も本名なのか偽名なのか判然としないが、本名であったとすれば、山崎は第2師団工兵部隊にいた山崎真治（大阪府出身）であろう。中原は山崎の日本語には大阪なまりがあったと語っているからである。彼については、現地で戦死または病死したとの説と、独立戦争終結後に南部から帰国したとの説がある。

もう一つ、第1次報告書の記述を訂正しておく。猪狩和正（ファン・ライ）の副教官は「沼田某」ではなくて、第2師団歩兵第29連隊の上等兵であった柳沼利伝治（福島県出身、通称ヴァン）である。

## 映画シナリオ『最後の一振り』

作者：チャン・バック・ダン（1995年3月）

### 解説（井川）

日本敗戦ののちベトナムで日本軍の離隊者が最も多かったと推測される地域は南部である。冬に寒い亜熱帯の北部や、平野部の極めて狭い中部に比べて、広大なメコン・デルタとドンナイ・デルタを擁する熱帯の南部は物産豊富、しかもベトナム人定住の歴史が浅い（18世紀以降）だけに開放的で自由な土地柄で、どこで離隊しても差し当たり食うには困らないという利点があったし、昨日まで米軍と並ぶ主敵であった英軍によって武装を解除されたばかりか、その監督下で再び武器を持たされてヴェトミン討伐に駆り出されるという屈辱まで強いられたからであろう。中国戦線からタイ方面へ転進中に仏印南部で敗戦の日を迎えた部隊と、逆にビルマ戦線で惨敗を喫して仏印南部に流れ込んだ部隊が、いずれも統制の緩みから将兵の脱走しやすい状況にあったという事情や、仏印派遣軍が45年3月の明号作戦でフランスの統治機構を解体した結果としての「権力空白」の状態が、それまでフランスの直轄植民地であった南部（コーチナ）で最も目立ったという事情もある（北部はドンキン保護領、中部はアンナム保護王国）。

だが、ベトナム独立戦争に参加した日本人の事跡調査が最もむずかしいのもまた南部である。その主因として、次の4点が挙げられよう。

(1) 仏軍が45年9月から逸早く制圧作戦を展開し、まだ分散状態にあったヴェトミンの抗戦組織を風潰しに潰していったために、軍事知識・技術と武器を持つ唯一の戦闘経験者であった旧日本軍人が狙い撃ち的に殺され、しかも反仏側にはそのことを記録する余裕がなかった。

(2) ヴェトミン地方組織相互の連絡網が寸断されていたうえ、ヴェトミンのほかに国民党、大越党、カオダイ教団、ホアハオ教団、ピンスエン教団などの党派が乱立し、さらにベトナム国政府のような傀儡政権が樹立され、それらの抗争の中で日本人戦士の活動に関する情報は曖昧模糊たるものとなり、あるいは雲散霧消した。

(3) 独立戦争後、米国によってサイゴンに樹立されたカトリック反共独裁政権（ベトナム共和国政府）がヴェトミンの南部残存組織を弾圧したため、ヴェトミン参加日本人に関する公私の記録はほとんど保存されなかった。

(4) 60年代以降、南部が世界史上最大の局地国際戦争（第2次インドシナ戦争＝ベトナム戦

争)の主舞台となったため、対仏独立戦争(第1次インドシナ戦争)にかかわった日本人の記録はおおむね消滅し、彼らの事跡を知る人々も少なからず死亡または離散した。

こういった事情で、我々の調査は南部では困難を極め、着手段階で半ば諦めざるをえなかった。正直に言って、個々の独立戦争参加日本人に関する明文の記録はほとんど入手できていない。そこで、南部でヴェトミンに参加した日本人の姿をかなり正確に伝える映画シナリオを紹介しておきたい。

作者のチャン・バック・ダンは、南部における1930年代からの独立運動家(インドシナ共産党員)で、対仏抗戦では南部のヴェトミン指導者として活動し、第2次インドシナ戦争では南ヴェトナム解放民族戦線(NFL)のサイゴン・ザディン地区指導者として68年のテット攻勢で重要な役割を果たした人物(現在は歴史研究家、ホーチミン市在住)である。彼はこのシナリオの前文(省略)で「歴史的事実にもとづいた話」と述べている。限りなく実話に近いフィクションということであろう。

このシナリオに登場する日本人2名は、実際にチャン・バック・ダンの部下であった日本軍離隊者がモデルで、バック・ロン(白龍)、ハック・ホー(黒虎)というヴェトナム名も事実そのままである。当時、チャン・バック・ダンはヴェトミン軍の中団長(旧日本軍でいえば連隊長)、バック・ロンは中隊長(同小隊長)、ハック・ホーは偵察小隊長(同分隊長)であった。前者は白哲長身、後者は色黒で太っていた。

バック・ロンは父が医師、母が教師というインテリ家庭に育った大学生で、大戦末期の44年に繰り上げ卒業で陸軍に応召、予備士官学校を出て特校(少尉?)になり、敗戦後サイゴンで離隊してチャン・バック・ダンの部隊に加わった。46年にサイゴン南方(シナリオでは東北)で戦死したとき、彼はダンのシャツを着ていた(自分のシャツが破れたので)。18歳の美しい恋人がいた。シナリオとは違って、自他ともに認める恋愛関係であった。ハック・ホーには恋人はいなかった。彼は農家出身で、満洲にいたことがあると語っていた。ハック・ホーはダンの部隊の司令部が仏軍に包囲されたとき射殺された。仏軍は彼の死体を川に流した。バック・ロンの死体は金星紅旗に包まれ、小銃の一斉射撃という軍隊礼で土葬に付されたが、もう墓の場所はわからない。二人の本名もわからない。

シナリオにはバック・ロンが兵役年齢未満の19歳であるとか、仙台が関東平野に近いとかいうような誤りが少なくないが、大筋は当時の日本人のヴェトミン参加の平均的な経緯や動機を実に正確に捉えている。ヴェトナム側の主人公兄妹がフランス名とフランス国籍を持つあたり、いかにも旧直轄植民地コーチナにふさわしい。また、このシナリオには、日本人と日本文化、とりわけ理想化された武士道への、やや過剰とも思える敬愛の念が滲み出ているようである。

作者は井川に日本での映画化の斡旋を求めた。しかし、今のところ、その可能性は極めて薄い。

なお、このシナリオは、本報告書には少々長すぎるので、史料として不要な部分は井川の責任において削除し、意味の曖昧な箇所は井川の推測にもとづいて修正した。固有名詞の誤りについては注を加えた。文学作品としてではなく、あくまで独立戦争参加日本人の実態を知るための材料として用いるので、このような変更は許されるであろう。訳者富田健次氏の了解を得たい。

## 主な登場人物

ナム（クローデル）：仏国籍ベトナム人。大学生。22歳。ある抗仏部隊の指揮官。

フオン（マドレーヌ）：ナムの妹。女子学生。18歳。

伊藤隼人：大学出の日本軍士官。19歳。

丸井登：日本軍下士官。30代。

クアン：ナムの抗仏部隊の連絡員。14歳。

トゥン：ナムの部下の小隊長。

タック：ナムの副指揮官。

## 事件の時と場所

1945年末～46年初頭、ピエンホア省（井川注：現ドンナイ省）の某区域

1945年8月15日午後、カウガインの日本軍駐屯地。空気は喪中のように沈んでいる。日の丸も揺れようとはしない。駐屯地の前はドンナイ川の急流。

ラジオの拡声器からは、敗戦を認め、連合国の無条件降伏要求を受け入れるとの昭和天皇の詔勅。

放送が終わっても、兵士達は沈黙していた。木村少尉（中隊長）がうつろな目を上げ、「解散」と叫んだ。その口調は懊悩に満ちていた。彼はまだ30歳にも達していなかったが、この数週間ですっかり老け込んだ。兵士達はうなだれて兵舎へ戻った。

丸井は軍靴をぬぎ、ゲートルを解いてうずくまった。そのそばで伊藤が軍刀も短銃も腰からははずさず、ベッドに横たわり、天井を見上げた。

伊藤隼人と丸井登は中隊の親しい友人同士であった。二人は共に神戸で短期訓練を受け、寺内総統軍（井川注：南方総軍）に補充された。伊藤は一人っ子で成人に達したばかり。予備兵（井川注：予備士官学校卒業生）であった。丸井は盧溝橋事件で負傷、本来出征は無理であったが、1944年末日本政府の総動員令に従った。年齢の差（丸井は伊藤より14歳上）、容貌の差（丸井はずんぐりして浅黒いが、伊藤は長身で色白）、職業・学識の差（丸井は中学も終えていないし、農業に従事し、妻と二人の子持ちであるが、伊藤は医学部の1年生、名家の一人息子で、父は医師、母は教師）は二人の友情を妨げなかった。なぜなら、第一に、彼らは同時に入隊し、同じ船でインドシナへ派遣された。第二に、丸井は九州熊本の山地出身であったが、本州の関東地方で就職していた。一方伊藤は関東平野に近い山台の海沿いの生まれであったが、父母が熊本で働いていたので、彼も熊本で育った。熊本は共

通の故郷であった。

「これからどうする？」と伊藤が尋ねた。丸井は答えなかった。

二人とも心はうつろであった。太平洋戦争初期の輝きは永遠に消え去った。彼らが入隊した時、アメリカが既にフィリピンに上陸し、首都マニラを占領し、彼らを乗せた船はアメリカ艦隊を避けてハイフォンに向かった。戦争が勃発した時、伊藤の母は悲しみ、父は何も言わなかったが、日本に何が起ころうとしていたのかが父にはわかっていた。丸井は真珠湾の戦勝が嬉しかったが、伊藤の方は皇軍を讃える学生の集いに参加することを父に禁じられていた。

「英米の捕虜になるのかなあ」

少し経ってから、丸井がやっと口を開いた。

「あなたの御両親が働いておられる所は長崎から遠くありません。先週、広島と長崎がアメリカ軍によって原子爆弾を落とされたことは、兵士全員に知られています。もうおしまいです……」

その時、叫び声が上がった。丸井と伊藤が飛び出した。兵士たちが木村中隊長の部屋の前に集まっていた。木村少尉が割腹自殺を図ったのである。

伊藤と丸井は兵舎へ引き返した。丸井は小石を重い足取りで踏みしめ、時々瞑目した。伊藤は軍刀を腰から外した。彼は士官ゆえに軍刀所持を許されていた。伊藤は軍刀を棚に載せ、ベッドに横たわった。

丸井と伊藤は真夜中にハイフォン駅に向かった（井川注：回想場面）。町は闇に沈み、覆いをかけたランプの光が二、三の家から漏れていた。彼らは汽車に乗り、多くの新兵と共に眠りこけた。朝方、ハノイに着いたが、ハノイから南に向かう汽車は夜になってから走り、ナムディン駅やニンビン駅の近くでは一日中停まっていた。死体が鉄道のすぐ脇の道端にずらりと並べられていた。伊藤は考え込んだ。餓死か。ベトナム北部は至るところ死体だらけだ（井川注：44年冬に北部で起きた大量餓死事件を指す）。伊藤は教科書で習ったことを思い出した。ベトナムはビルマに次ぐ米の大輸出国である、と。

サイゴン到着。上部機関による部隊確認を待つ間に彼らは町のあちこちを歩き回った。町の各所に掩蔽壕が掘られ、変事を知らせる笛（井川注：サイレン？）が鳴り渡っていた。英米軍の爆撃。日本軍の高射砲射撃。町の人々は警告の声を無視し、配給票を片手に、少しの砂糖、脂、米、石鹸を手に入れようと食料品店の前に長い列を作っていた。時に殴り合いもあり、服が引き裂かれた。

二人はチョコアン発電所の前を流れる水路の船寄せ場の前に立った。米を満載した大きな船が数隻触先を並べて停泊していた。彼らは、この米が（北部の）ホンガイから南部へ運ばれてくる石炭と無

償で交換されることを知っていた。

伊藤は丸井を見て肩をすくめた。丸井はニヤリと笑って首を振った。彼は農民出身ゆえ、米が不正に扱われることを好まなかった。彼は考えた。ベトナムでは十分に食糧が供給できるのに、どうして（北部で）あんなに多くの餓死者が出たのか。

伊藤の仕事はまだ多くはなかった。一日中、兵隊たちは兵舎にいて、淋しげな歌を歌って待機していた。保大皇帝（井川注：グエン朝最後の皇帝でアンナム国王であったバオダイ）の率いるベトナム王国政府は再び独立を宣言した。日本軍がフランスのインドシナ統治機構を潰した1945年3月9日であった。しかし何の変化もなかった。

伊藤はビエンホアまでバイクを飛ばした。短いシャツを着て、麦藁帽をかぶった青年たちが荷物を肩に大声で歌っていた。フランスの総督府に属していたドンナイ省庁の職員たちは庁舎に身をひそめていた。伊藤が何度面会を求めても拒否された。（中隊長の木村が自殺を図ったので、中隊長代行の）伊藤はサイゴンに電報で指示を仰いだ。蓑田総督の事務所（井川注：正しくは南部管轄の第2師団司令部）からは寺内総統（井川注：正しくは南方総軍司令官寺内元帥）の指示を待て、という返事が来た。

連合軍は爆撃を中止した。米軍のマッカーサー司令官が戦艦上で日本の降伏式を行うという知らせが中隊に届いた。

ある朝、ベトナム青年たちがカウガインの駐屯地を包囲した。彼らの掲げる旗は、前は金色の地に赤い星であったのが赤地に金の星に変わっていた。

伊藤は門へ走った。短銃を腰につけた若い男が、伊藤に英語でいった。

「失礼ですが、あなたはこの駐屯地の指揮官ですか。英語は話せますか」

「そうです。英語は話せます」

「私はこの地方のベトミン代表です。私たちの政府の命令に従って、あなた方の兵器を受け取りに参りました」

「ベトミン？ よくわかりません。あなた方の政府は一体どんな政府ですか」

整った顔付きをしたベトミンの代表は、唇に微笑を浮かべて答えた。

「ベトミンはベトナム独立同盟です。国民を指導して民族の独立を勝ち取ったところです。総蜂起はハノイ、フエ、サイゴンの各地で終わりました。私たちの政府は南部行政臨時委員会です」

「それではバオダイ帝は？」

「バオダイ帝は退位しました」



「私は連合軍に武器を渡すよう命令を受けているだけです」

「私たちこそ、その連合軍の一方なのです」

「少し考えさせて下さい」

ベトミンの代表は理解を示す顔つきでいった。

「わかりました。皆さんに24時間差し上げましょう。つまり明日のこの時間まで」

代表は去ったが、群衆は徐々に数を増し、ほとんど人の海となった。サイゴンへの電話線は切られていた。伊藤は緊急電報を打ったが、返事は来なかった。

夜が来た。外は相変わらず人垣。伊藤は眠っていた丸井を起こした。

「どうしよう」

丸井は眠そうな声で「誰に武器を渡したって同じことです」と答えた。

朝になって、昨日の代表が再びやって来た。

「もう決心がつかれましたか」

伊藤は眉をひそめた。

「もしも私達が投降しなかったら？」

「日本が投降しているのに、あなた方はどうして投降しないのですか」

「私たちはあなた方に投降するのではなく、連合軍に投降するのです」

「つまり白人にしか投降しないということですね」

伊藤は顔が赤くなった。

「私たちの条件は次の通りです。皆さんが武器を引き渡して下されば、捕虜にはいたしません。皆さんはここにとどまり、私たちが引き続き米と水と食糧を補給いたしましょう。私たちの政府とあなた方の間に何らかの契約が成立したら、必ず皆さんは安全に帰国できるでしょう。私が保証いたします。でも、あなた方が拒否されたとして、たとえ銃があっても、これだけの人々を皆殺しにはできません。無駄に血を流すだけです」

伊藤は考え込んだ。ものすごい群衆である。こんな状況で部下たちに銃撃させることなど一度も考えたことがなかった。

遂に銃がベトミンの手に渡ることになった。伊藤だけが軍刀と短銃を持つことが許され、中隊も自衛のため小連発銃（井川注：軽機関銃のことか）1挺、単発銃2挺と、若干の銃剣の所持が許された。

ベトミンの代表と伊藤は契約書に署名した。カウガインの包囲は解かれた。

伊藤は寺内総司令官からの電報を受け取った。「ベトミンに武器を引き渡すことなく、連合軍の到着

を待て」

連合軍は一向に姿を見せず、人々は金星紅旗を掲げ、民兵のグループが日夜訓練を繰り返し、青年たちの歌が町から中洲の島まで届いた。

1945年10月初旬のある日、日本兵たちは民兵とイギリス軍の戦闘を目撃した。戦闘は九一日近く続いた。戦略上の重要さから日本軍1個中隊が防衛していた橋をめぐる戦いであった。イギリス軍の火力は強大であったが、民兵たちも頑強であった。伊藤と丸井は、民兵たちの中に武器接収に来たベトミン代表がいるのに気づいた。両者が暫く撃ち合いを止めたので、伊藤が兵營の窓から身をのり出すと、ベトミンの代表が手を振った。伊藤の心がなごんだ。彼にはその理由がよく理解できなかったが、代表の顔には、彼らの銃が彼の国を踏みしめる者たちに向けて発射されているのだという自負があった。丸井が伊藤にいった。

「山砲があったら渡してやったのに……あいつら、戦闘経験がないのになかなかやりますね」

ベトミン代表の青年が倒れた。撃たれたらしい。民兵たちは橋の向こう側へ引き返した。イギリス軍の団がフランス軍の将校3人と日本軍の大尉を連れて駐屯地に現れた。イギリス軍の指揮官(中佐)は伊藤と日本軍中隊を睨みつけた。

「この中にフィリピン(井川注:マレー半島とシンガポールの間違い)で参戦した者はいないか」  
誰も答えなかった。丸井が伊藤にささやいた。

「奴はパーシバル将軍が投降した時のことを思い出してるんですよ」

フランス人の大尉が前に進み出た。

「銃はどこだ。君らはベトミンに引き渡したのか」

伊藤は頷いた。

「どうしてだ。軍法違反だぞ」と大尉が叫んだ。

「ほかに方法がなかったからです。彼らは数が多く、この地区全体を握っています」

「君らは彼らをどうして撃たなかったのだ」

「私たちには無闇に人を殺したり味方に自殺行為をさせたりすることはできません。もしも撃てたなら、大尉、あなたもこの駐屯地に入れなかったでしょう」

丸井が日本語で呟いた。「いいですな」

仏軍大尉は顔を赤くして、日本人大尉の方を振り向いた。

「あなたはどう思いますか」

「私は何とも思いません。私たちの軍隊はもう解体され、私には兵士に何を命ずる権利もありません」(井川注:正しくは、攻撃的軍事行動を命ずる権利がなかった)

フランス人大尉はイギリス兵たちに要求した。

「この大尉を逮捕してくれ。サイゴンへ送る」

真夜中、伊藤は規律違反の兵士を監禁する部屋に坐っていた。父や母がまだ生きていたら、どのような評価をしてくれるのだろう。多分、日本の誰も自分のことを褒めないだろう。

小さな物音がして、丸井の姿が見えた。丸井は鍵を鍵穴に入れて調べていた。

「連合軍の兵士が3人いるだけです。そのほかはみんな眠ってます」

「つまり？」と伊藤が尋ねた。

「つまり逃げるってことです」

「逃げる？ どこへ逃げるんだ」

「私にもわかりません。しかし、あいつらからは逃げなければ……」

「逃げるのなら俺だけでいい」

「恥を知ってるのはあなただけというんですか」

「それなら一緒に行こう。島へ泳ぎつけければ……」

「私もそう思います。あなたの軍刀と短銃はちゃんと取ってあります。私には連発銃と銃剣がありますし……」

二人の影が監視室を離れた。川岸へ。突然、英語のどなり声。「止まれ！」

二人は川に飛び込んだ。懐中電燈の光が水面を掃いた。弾丸の嵐がそれに続いた。二人はは少しづつ遠ざかり、夜の闇に吸い込まれた。

「日本兵が二人、指揮官に面会を申し出ています」

ナム指揮官は、半身を包帯に巻かれ、村の集会場のベッドに横たわっていたが、無理矢理体を起こした。

「二人の日本兵？」

「そうです。二人ともずぶ濡れです。二人は小連発銃と短銃を1挺ずつ、それからサーベルと銃剣を持っています」

「さっきの銃声は彼らが原因だったんだな。中へ入れなさい」

ランプは薄暗かったが、ナムにはすぐ伊藤だとわかった。

「ああ、ようこそ。私の傷は大したことはありません。医者が手術して弾を取り出してくれました。弾は肺の脇の柔らかい所に当たっていました。どなたと御一緒ですか」

「私の友人で、丸井登といいます」

「ようこそ、丸井さん。あなたの方は名前でご存じ上げております。伊藤隼人さんですね。どうぞ御二人ともお掛け下さい。服がずぶ濡れですね。乾いた服を探させましょう。それからこうしましょう。服を着替えて食事を済まされたら暫くお休み下さい。話は明日にしましょう。いいですか」

「勿論いいですとも。……でも、私たちの武器を納めて下さい」

ナムは少し躊躇したあとで、

「それでは、ここに置いて下さい。明日一緒に解決しましょう。御二人とも、私達の部隊に参加を御希望ですね」

「まだ、はっきりとは……ただ白人の監視下から逃げ出したかっただけです」

「これもまた明日話し合しましょう」

戦いは拡大した。ピエンホアはフランス軍の手に落ちた。連合軍ではなく、フランスが旧属領を回復したのであった。

ドンナイ川の中洲フォー島は町と向かい合っていて、ナムの指揮する抗戦軍はほぼ四方を囲まれていた。

丸井が抗戦に加わることはいとも簡単だった。彼は陽気な性格で、ベトナム語は全然駄目であったが、うろ覚えの単語を喋りながら身振り手振りをすると、誰でも理解できた。彼は抗戦軍の射撃や匍匐前進の訓練の手助けをした。そういう時は、自分は二度も日本の正規軍の中で過ごしたのだといわんばかりに厳格であった。

伊藤の方は沈黙がちだった。彼が抗戦軍の隊伍に加わったのは、ただ白人の捕虜になりたくなかったからである。彼はまだ戦うことに躊躇があった。ナムは伊藤にまだ軍刀を渡したままだった。彼もその軍刀を大事にしていた。それは日本軍が彼に与えたものではなく、彼自身のものであった。それには、名のある伊藤家の紋が刻まれていた。彼は、その家伝の剣を渡してくれた時の父の言葉を覚えていた。

「私は家紋の入ったこの剣が無益な血に染まるのを望まない。お前の血を含めてだ。何らかの（不正な）目的でこの剣を汚してはならない。この剣はお前に自重を促し、絶えず理非をわきまえさせるだろう」

丸井は伊藤が何度もその剣について話すのを聞き、戯れにその剣を「良心の剣」と呼んだ。

丸井は抗戦軍の同志を、ナムも含めて「兄弟」もしくは「同志」と呼んでいた。伊藤の方はナムに対しては「閣下」、抗戦軍の兵士に対しては「殿」を捨てきれないでいた。しかし伊藤は、自分と何歳

も違わない指揮官をよく観察し、彼の来歴については理解していた。彼はフランス国籍で大地主の一人息子。農学大学の卒業を控えた大学生であった。非常に聡明で、質素。見識も広く、勇敢である。部隊には外国人は丸井と伊藤の二人だけであったが、彼はこの二人に実に親切にふるまった。伊藤が短銃を持つことを辞退した時も、彼はそれは伊藤のものだと言って、所持を勧めてくれた。このような信頼の態度が伊藤を迷わせた。「抗戦軍に入って本当に戦おうか」

部隊は遂に島を離れることを決めた。ドンナイ川の水は、季節はずれの雨で流れが急である。流れに沿って行けば速いが、ナムは川を溯上する道を選んだ。つまり、船はゆっくりと進まねばならず、おまけに町の前を通り抜けなければならない。この道を選んだのは、敵が必ず下流を搜索しているはずだし、探照灯を備えた多くの動力船と強力な火器から逃れるのは容易ではないからであった。

島民約百人は部隊の兵士たちとの別れを惜しみ、米や餅米、豆、肉、卵などを贈った。夕暮れであった。五隻の船が島の端に集まった。ナムは伊藤、丸井と共に先頭の船に乗り込んだ。10人が漕ぎ、10人が警戒に当たったが、実は部隊には各種の銃が50挺ほどしかなかった。上質の銃は伊藤の中隊から接収したものであり、そのほかは細長いインドシナ型単発銃が数挺、単・複銃身の猟銃、それに手榴弾と剣が数挺あるのみであった。

船が岸を離れる時、一人の老婆が伊藤の手の中に紙幣を押しつけた。

「これを使いなさいね。可哀そうに、日本人なのに抗戦軍に加わらなければならないなんて……」

伊藤は辞退しようとしたが、間に合わなかった。彼は果物畑と共に薄れていく老婆の影を振り返った。丸井の腹の中から鶏の鳴き声が聞こえた。

「何ですか」とナムが尋ねた。

「ある女が雌鶏をくれたんです。受け取らないわけにはいかなかった」

船はそろそろと町の対岸に沿って進んだ。町が見えなくなったあたりで、ナムは一人の兵士に代わって櫂を握った。丸井がそれをさえぎった。

「あなたはまだ傷が治っていない。私にやらせて下さい」

「でもあなたは櫂の使い方を知らないはずですよ」

「知ってますよ」

「しかし、これは舵取り櫂ですよ。漕ぎながらかじを取るのですよ」

「できますよ」

実際、船は横向きになり、傾いて水が入って来た。ナムが慌てて言った。

「櫂を返して下さい」

今度は伊藤の番である。

「私に手伝わして下さい」

伊藤はかなり上手であった。丸井が小声で笑って「うまいですね」と言った。

「船に乗った時からずっと観察してただけで、そんなにうまいわけじゃないよ」

船団は川の真ん中へ出た。島に近づいた時、探照灯の光が輝いた。モーターボートがエンジンを切って水に漂っていた。ベトナム語の叫び声が出た。

「何の船だ」

「釣り船です」とナム。

「そこで待ってろ」

その瞬間、丸井と小隊長のトゥンが水の中に飛び込んだ。丸井が水面から言った。

「連中が来る前に、岸まで必死で漕いで私達を待って下さい」

探照灯が消え、モーターボートが近づいて、突然銃撃し始めた。しかしモーターボートは突然揺れ出し、乗っていたフランス人、ベトナム人たちが大声を上げるうちに、爆発音がしてモーターボートは大きく傾いた。底に穴があいていた。

船が岸に着くと、丸井とトゥンがずぶ濡れで這い上がってきた。「丸井さん、トゥンさん、なかなかやりますね」とナムが言った。

部隊は鉄橋の下を通り、古い森に入った。ナムは茂みを選んで軍を駐屯させた。部隊の仕事は小屋を建て、土地を切り開いて訓練場を作り、獣を捕えたりきのこを採ったりすることであった。人跡未踏に近い土地であった。夜になると、虎の声が宿営地のすぐそばで聞こえた。1週間と経たないうちにマラリアの侵攻が始まった。薬はなく、ナムと副官のタックやトゥンも体にただ風を当て、木の葉を煮立てて蒸気を吸い込むことしか知らなかった。丸井もマラリアに倒れた。

ナムとトゥンが水路に沿って道へ出ることにした。フランス軍が道を制している。二人は日暮れを待って、ある部落に入った。彼らはゴム林のはずれの一軒の壊れかけた家を選んだ。その家の主の老婆は、200～300メートルの所に傀儡（井川注：仏軍の任命した行政責任者）の家があるといった。その傀儡は着任するやいなや、村人に戸口を申告させ、若い男をすべて仏軍側のパルチザンに参加させていた。

ナムは老婆のおかげでキニーネと米と塩を買うことができた。彼は部隊のなけなしの金を差し出したが、老婆は受け取らなかった。

「私が村の人たちに皆さんのことを黙っているようにと言いますから御心配なく。皆さんはあの傀

儡を追い出して下さい」

部隊の指揮班の話し合いで、ナムとタックは傀儡の駆除法について論じ合った。丸井と伊藤はまだベトナム語がよくわからず、議論の中身が完全には理解できなかった。トゥンは漢字を知っていて、指揮班の意志を地面に書いた。丸井は苦虫を噛み潰した顔で立ち上がると「私を行かせて下さい」と言った。

伊藤は冷静であった。自分で小屋を建て、落とし穴を掘って猪を捕えたりしていたが、部隊の訓練には参加しなかった。そういう伊藤の態度が丸井を心配させた。タックは我慢ならず、ある時ナムに言った。

「あの男は非協力的だからフランスに投降させましょう」

ナムは静かに言った。

「忍耐か肝腎だよ」

トゥンが伊藤に（仏軍の）カイダオ駐屯地へ行って投降したらどうかと指揮班の意向を伝えると、伊藤は顔を曇らせて言った。

「私がどうして投降などしましょう」

ナム、トゥン、丸井と1個小隊は再びゴム園の近くの老婆の家へ行った。家の後ろには既に2袋の米（青い袋で100～200 kg）、塩、砂糖、卵、干物の袋、葉の包み、タバコ数ケースが置いてあった。丸井は元々タバコのみであったが、部隊では吸おうとしなかった。ナムは丸井に1箱渡し、部屋を締め切って吸うようにといった。ナムは伊藤も時々吸っているのを知っていて、彼にも数箱取っておくようにと部下にいつけた。

ナムとトゥン、丸井は傀儡の家に向かった。

犬がやかましく吠え立てた。ナムはトゥンに合図して大きな物音を立てさせ、犬を門の方へ引きつけ、ナムと丸井が垣根を乗り越えて家の中に入った。家の主人は犬の烈しい鳴き声を聞きつけ、ランプと双発銃を手にして戸を開けた。丸井がすぐに銃を奪い、ナムが懐中電灯の光を傀儡の顔に当てた。

「我々は抗戦軍だ」とナムが大声で言った。「売国奴としての罪は死に価する。しかし政府の寛大な政策により、警告を与えるだけにする。今後この地方の人を脅してはならない。フランス兵がこの地方で自由に人を捕えたり、行軍したりするよう手引きしてはいけない。人々から税を取ってはいけない。パルチザンを組織してはいけない。警告する。私の言うことに逆らえば命はないものと思え」

傀儡はどもりながら、「はい、はい、謹んで……」

「フランス軍に辛い目に遭わされるといけないから、銃は返しておこう。だが人々の弾圧にこれを

用いてはいけない」

ナムは銃から2発の弾を抜き取った。家の主は何か犬が吠えるのを止めさせようとした。3人の影が門から道へ出た。

丸井は伊藤に、ナムと共に傀儡の家へ行った話をした。伊藤は熱心に耳を傾けた。

「その男を殺さなかったのか」

「指揮官は警告を与えただけです。私もどうして殺さないのかと尋ねてみたのですが、指揮官は逆に私を問い詰めるのです。こちらに防衛手段のあるときに、どうして人を殺さなければならぬのか、もし奴がそれでも悪事を働き続けるなら、その時に考えたらいい……と」

伊藤は考え込んだ。ナムが彼らの小屋に立ち寄った。

「丸井さんはもうすっかり熱が取れましたか。キニーネは飲みましたか」

「御一緒した晩からすっかり……もう手も震えていないでしょう」

ナムは笑って、竹のベッドに腰を下ろした。伊藤の目の輝きを見て、ナムは伊藤が何か尋ねたがっているのに気づいた。

「何か私に言いたいことがあるんですか」

「あなた方は人も少ないし、銃も少ない。どうしてフランス軍に勝てましょう」

ナムが伊藤の肩を叩いて言った。

「銃は確かに少ない。でも、これから手に入ります。敵の銃は我々のものです。この林の中の人々は私達の味方です。味方でなければ、米や塩や薬をくれるでしょうか」

そして、ナムは伊藤のベッドの枕元にある煙草の包みを見た。

「煙草までもね。伊藤さんも私たちと島にいた時、川で釣り人に会ったでしょう。私達は決して少数ではありません」

「それは認めます。しかし、これは戦争ですよ。あなたも御存知でしょう。日本軍は勇猛果敢だったが、結局は降伏しました」

「しかし、伊藤さん、そんな比較は穏当ではありません。私は二つの戦争の目的についてはまだ言っていない。ここは私たちの国です。私達はこの国を守らなければならないのです。フランス人がベトナムへやって来ました。遠く離れたこの国にです。日本人も同じようにここへやって来ました」

伊藤が言葉を継ごうとする間もなく、一人の巡回兵が一人の娘を連れに入れて来た。

黒い簡単服をまとった娘は、袋を地面に投げ出すと、ナムの方に駆け寄った。

「クローデル兄さん」

ナムが大声で叫んだ。



「フォン。マドレーヌ。どうしてここへ来たんだ」

娘は声を詰まらせながら言った。

「弾にやられたって聞いたけど、もういいの？」

「大丈夫だよ。お父さん、お母さんは元気かい」

「元気よ。私、お父さん、お母さんをお願いして兄さんのお伴をしに来たの」

娘は涙を拭い、兄以外の初対面の男たちを見て恥ずかしそうな様子をした。

「私の妹で、フォンと言います。こちらは丸井さんと伊藤さん」

「お二人は日本人？」

「そうだよ」

フォンは二人と握手を交わした。

「妹は英語ができる。リセ（井川注：フランス式の高等中学）の学生です」

「ここは楽しそうだね。とっても気に入ったわ」

ナムは心配そうな表情をした。フォンは驚いて顔を曇らせた。

「兄さん、私を追い返さないで。お父さんとお母さん、堂々と私を行かせてくれたんだから。兄さんへの手紙もあるわ」

フォンは袋の中をかき回した。

「私、フォー島へ行ったわ。そしたら兄さんたち、もっと上流へ行ってしまった。思い切ってカイダオ市場へ行って聞いてみたの。兄さんたちの補給米を買い出しに来てた人のお陰で、森の外れまで来たら、この方（巡回兵）にお会いして」

「そりゃ運がよかった。それにしても無謀だ」

ナムは両親からの手紙を読んだ。1行読むごとに微笑んだ。

伊藤は娘を観察した。小柄で、あどけない美しさに学識の深さの見え隠れする、名望ある家系の出の女子学生。

「ほら、私、兄さんにこれ買って来たわ。兄さんの好物だから……」

フォンはチョコレートを差し出した。ナムは笑いながら妹の頭を撫で、丸井と伊藤にも配った。丸井と伊藤は日本語で何やら話し、ナムに挨拶して出て行った。

ナムは指揮班を招集し、妹が部隊にやって来たことを報告した。

「皆さん御心配なく。私、何でもできます。台所仕事と衣服の繕いをやらせて下さい」

ナムが「飯は生煮えかおこげだな」といった。フォンがナムをにらんだ。

「お母さんはもうそんなこと言わないわ」

丸井と伊藤はナムの小屋の傍にフオンの小屋を建て、小川のほとりに女性用の風呂場までつくってやった。部隊はその夜から賑やかになった。食事もより満足なものになった。伊藤が御飯を嚙んで「うまい！」と褒めた。

ナムの部隊は、1946年つまり丙戌の年の正月に、ピエンホアの近くで武装闘争と宣伝工作をせよという命令を受けた。ナムは12月25日に正月を済ませ、その後、小グループに分かれてピエンホアに迫ることを主張した。

12月25日、部隊はキャンプファイアーを炊いた。仲間たちからの正月の贈り物は盛大だった。肉あり、漬物あり、干菓子あり、正月餅もあった。食事の後は、隠し芸大会である。皆がフオンのマンドリンに合わせて歌を歌うのである。ナムはレウ・フー・フオックの『出で立つ』を演ずるだけであった。フオンは『昇龍行曲』を、皆の求めに応じて3度も弾き語りで歌った。丸井は『来るか来るかと』という日本の沿海地方の民謡を歌った。

今度は伊藤の番である。彼は頭を横に振ったが、皆が歌え歌えと聞かない。切羽詰まって彼はフオンに通訳を頼んだ。

「私は歌えません。もっと正確に言えば日本軍の進軍歌しか知らず、こんな歌はこの場にそぐわないと思います。残念ながら、丸井氏が今歌った曲は、私の生まれた土地のよく知られた曲ですが、私は丸井氏のように覚えていません。でも、私のやり方でこの楽しい会に貢献したいと思います。もしもフオンさんの御協力があれば……」

フオンは訳し終えて呆然とした。嵐のような拍手が起こった。

「私が伴奏しますからフオンさん、さっきの歌をもう一度歌って下さい。本当に素晴らしかった。メロディーだけです。歌詞は全然知りませんし……」

再び拍手が起こった。丸井が一番烈しく手を叩いた。フオンはマンドリンを伊藤に渡した。伊藤は調弦して、伴奏を始めた。

ナムとトゥンに指揮された一個小隊が基地を離れ、フオン、丸井、伊藤も後に従った。最初、ナムは丸井と伊藤を基地防衛小隊と共に残しておきたかったが、伊藤がどうしても行くと行って聞かなかった。

ナムの軍は森を抜け、北の方からピエンホアに回り、タンフォン、ピンイ、タンマイの各村に達した。小隊は空港のはずれで村人やゴム園労働者と大晦日を迎えた。昼間は切り株だらけの森にひそみ、夜になると活動した。

丸井は小隊の「釘」のようなものであった。村人は部隊に二人の日本人がいるのを知り、二人を取り囲んで尋ねた。丸井は二つのことしかしなかった。手を握り、大声で叫ぶことである。「ベトナムと日本、兄弟。ベトナム独立萬歳！」

正月5日、小隊は基地へ戻った。敵はナムの基地を察知し、スパイを放っていた。

多数の青年が志願して来たので、前より拡張されたが、銃が不足していた。伊藤はピエンホアに旧日本軍武器庫のあることをフォンに話した。彼は武器庫襲撃に加わることをためらっていたが、進んで地図を書いた。武器庫の警備が余り厳しくなかった。フランス軍は主に英仏製の武器を用いていたからであるが、町中であって高い塀に囲まれ、監視哨もあった。

伊藤がフォンに「武器庫を襲うのは難しい」といった。フォンは「大丈夫です。ナム兄さんが必ずやります」と答えた。計画が徐々に煮詰まった。土曜日の午後にはフランス兵はダンス・パーティーをやり、仏軍のベトナム人補助兵は酒を飲んで寝るのが常であった。ベトナム兵の中に二人愛国者がいた。

ある月のない土曜の夜、ナムと丸井とトゥンが塀のそばの榕樹に登った。中から二人の愛国者がロープを投げた。3人はそのロープを使って塀の中へ。愛国者の一人が3人を武器庫まで導いた。彼らは多くの単発銃、若干の小連発銃、2挺の中連発銃（井川注：軽機関銃の一種か）、何箱もの銃弾と手榴弾など、1個小団（井川注：旧日本軍の大隊）分ほどの武器弾薬を手に入れ、付近の住民たちの協力で基地へ運んだ。

フォンは伊藤に言った。「私の言った通りでしょう、ナム兄さんならできるって」

昼下がり、涼しい木陰で、丸井は兵士たちからベトナム語を習っていた。彼の妙な発音に兵士達が笑い転げた。

フォンは小川のほとりで兵士たちの服を繕っていた。伊藤はその前に坐り、ためらいがちに言った。

「フォンさん、私にベトナム語を教えてください」

針がフォンの指に刺さった。「痛かった？」という伊藤にフォンは微笑み、白く揃った歯を見せた。

「私がベトナム語を教えますから、あなたは日本語を教えてください。いいかしら」

伊藤の目が輝いた。フォンはその視線を避け、「すぐ始めましょう」

「モット、ハイ、バー……」とフォン。

「いち、に、さん……」と伊藤。

「トット」

「上等」

「コン・トット」

「上等じゃない」

「バン・クア・トイ・アン・コム」

「私の友だちが御飯を食べます」

「まあ、日本語って何て長いんでしょう」

「ベトナム語の方は鳥の鳴き声みたいで、発音が難しいですね」

「いやになりました？」

「いえ」

伊藤が熱に襲われた。丸井が薬をもらってくると、フォンが伊藤の額に濡れたタオルをのせていた。ナムが来て伊藤の額に触れた。彼はフォンが何度繕っても肌が隠せないほどボロボロになった上着を着ていることに気がつき、自分の新しいカーキ色の上着を脱いで伊藤に着せた。伊藤は意識が薄れていて、何もわからなかった。

「砂糖を少しビタミンCにまぜて、水で溶いて持っておいで」

フォンは兄の命令に従った。伊藤はその甘い水を飲み干し、また眠った。吹き出す汗をフォンが拭いた。

伊藤が一眠りして目覚めると、丸井が傍らに坐っていた。伊藤は自分が着ている上着を見て驚いた。

「指揮官の上着ですよ」

伊藤はタオルを見た。

「フォンさんのです。あなたの額を冷やしたり汗を拭ったり」

フォンがミルクのコップを持って部屋に入ってきた。

「さあ、伊藤さん、飲んで」

伊藤はミルクのコップを受け取った。

「この上着はお返しします」

「いいえ」とフォンが言った。「この服は兄があなたに差し上げたものです」

「それなら指揮官は何を着ているのですか」

ナムがツギだらけの上着を着て入ってきた。

1946年3月6日、暫定協定がベトナム民主共和国政府とフランス政府の間に結ばれた。サイゴ

ンの新聞・雑誌が毎日、部隊に運ばれて来ていたため、部隊もそのニュースは知っていた。ナムは全部隊員を招集して上部機関からの知らせを伝えた。隊員たちは静かに耳を傾けていたが、喜びの表情はなかった。南部の帰属は未解決とされていた。ナムが言った。

「フランスは手先を使って南部自治国なるものを樹立しようとしている。情勢はますます複雑になっている。我々は安穩とはしてられない」

ナムは伊藤と丸井に言った。

「フランス政府と何らかの条約が成立したら、あなた方の帰国を討議しましょう」

丸井と伊藤は半ば勇気づけられ、半ば悲しそうな様子であった。

ある日、軍区司令部が、カイダオのフランス軍指揮官が3月6日条約施行を話し合うため、その地方の自衛団の指揮官と会いたがっている旨を伝え、タックと1個小隊を部隊の代表に指名した。会談の場所はカイダオとナム部隊の基地の間にあるタンフエ村の集会所。軍区司令部はフランス側のあらゆる裏切りに警戒せよと助言していた。

ナムがためらいがちに言った。

「奴らの裏切りに備えて、部隊員を君らの周囲に張り込ませよう。会談がうまく行きそうだったら、黒虎（ハック・ホー）と白竜（バック・ロン）の帰国についても話し合ってくれないか」

黒虎は丸井の別名、白竜は伊藤の別名で、連絡員のクエンがそう名づけて部隊中に広まったものであった。

ナムは偵察隊に前もって会談場所を調べさせることにした。丸井が偵察隊に加えてくれるように志願した。トゥンが偵察隊を指導し、タックの小隊が後続した。部隊は幾班にも分かれてタンフエの集会所のまわりに転開した。集会所は小高い丘の上にあり、道に面し、うしろには森があった。

トゥンの偵察隊は情勢を見て、フランス側代表団が「フランス連合軍連絡団」（井川注：当時の仏越交渉ではベトナムをフランス連合の内部にとどめるかどうかが一つの争点であった）という提示板を持っていたら、偵察隊も自分達の「ベトナム軍連絡団」と言う提示板を掲げることにしていた。

偵察隊が森から出る前にフランス軍の銃が火を吹いた。トゥンは丘の茂みに身を隠して、厚紙の提示板を高く掲げた。銃火はそこへ集中した。同時に背後からも銃火が殺到した。偵察隊とタックの小隊はフランス軍の罠に落ちた。

ナムの包囲作戦が実行に移された。この戦闘で偵察隊の3人が死亡し、トゥンと丸井は捕まった。フランス部隊はトゥンと丸井を縛って集会所に入った。

タックは突撃を叫んだ。ナムが慌てて制止した。集会所の背後に、重機関銃を備えた装甲車が現れたからである。ナムの部隊は後退して銃砲撃を避けた。

「私の過ちだった」とナムが言った。「冷静に情勢を読まなくては」

タンフエの集会所では、トゥンも丸井も銃身で殴られ気絶していた。フランス部隊の指揮官はベトナム人との混血児で、彼とベトナム傀儡兵が二人を取り囲んでいた。トゥンと丸井は水を浴びせられて正気づいた。戦友3人の首が杭にくくりつけられているのを見て丸井が叫び声をあげた。首の一つは、丸井がよく遊んだ連絡員クアンの首であった。クアンはこの正月に抗戦軍に加入し、すぐに丸井と親しくなった。クアンは14歳になったばかりの学生であった。

「今度はお前ら二人の番だ」と混血男が言った。「どちらがナムだ」

トゥンが相手の約束違反と待ち伏せ攻撃をなじった。口論の合間に、丸井が「上等じゃないな」と言った。

「おや、こいつは日本人だな。日本人なのにベトミンに味方するのか」

「ベトミン上等！」

銃声が基地にまで響いてきた。フオンと伊藤と一群の兵隊が慌てて飛び出し、ナム、タックと出会った。

「黒虎がトゥンと一緒に捕まった。3人が犠牲になった。ちびのクアンも。奴らは3人の首を集会所の外に晒している」

伊藤は黙り込み、フオンは顔を手で覆ってすすり泣いた。

「私に考えがある。冒険かもしれないが、成功すると思う」とナムが言った。

「夜を待つのですか」と伊藤が尋ねた。

「いや。白竜にはわかるでしょう。フランス部隊は午後になったら引き揚げます。すぐ行動を起こさなければなりません。タックは仲間を連れて丘のうしろに隠れ、この高い木を見ているのだ。この木の枝が揺れたら、集会所に向けて銃を撃て。命中する必要はなく、音を立てるだけでいい。私たちが集会所に入るのが見えたら全軍突撃だ」

ナムは伊藤を見た。

「あなたにお願いがあります。木に登って、望遠鏡を使って集会所の下の通りを見てほしいのです。私は1個中隊を連れて道の脇を進みますから、私が集会所への坂道にさしかかったら、この木の枝を強くゆすって下さい。わかりますか」

伊藤はうなづいたが、続けて言った。

「無謀ではありませんか」

「いや……そうだとすると、やるしかありません」

フォンがナムの手を取った。

「兄さん、私も連れてって」

「いかん、マドレーヌ。お前は白竜たちとここにいて、あとで集会所に来ればいい」

「私も白竜さんと一緒に木の上から見ていてもいい？」

「白竜に決めてもらえ」

ナムに率いられた中隊は集会所に向かって進んだ。

伊藤とフォンは木に登り、枝分かれのところに体をくっつけて座った。

「ナム兄さんが集会所の門に近づいたわ」

フォンは伊藤に望遠鏡を渡した。彼女の息が望遠鏡を覗く伊藤の顔にかかった。伊藤は木をゆすった。フォンも伊藤の背中に手を回してゆすった。その髪が伊藤の首を撫でた。

タックの銃が猛然と火を吹いた。集会所の中は混乱した。ナムは中隊の先頭を切って突撃した。軽機関銃がフランス部隊の背後で唸った。

ナムはトゥンと丸井の縄を切った。二人はフランス兵の銃をつかんで引き金を引いた。混血の指揮官は背中に弾丸を浴びて倒れた。ナムが集会所の外に現れ、兵士たちが集会所へ突進した。

伊藤とフォンも駆けつけた。フォンはクァンの頭を抱いて号泣した。伊藤がフォンの体を支えた。

ナムは部下たちに捕虜を集めさせた。

「お前たちの指揮官は私達を欺いた。国際法に反して死者の首を切った。しかし我々は報復しない。お前たちがカイダオへ戻ることを許す。行け」

捕虜たちは一目散に逃げ出した。抗戦軍は戦利品を集めた。丸井は手榴弾で燃えた戦車に乗り込んで大砲の解体にかかった。伊藤、フォン、トゥンは3人の犠牲者の首と胴体を合わせた。やがて仏軍カイダオ基地の75ミリ砲が集会所を撃ち始めた。

「フランスは仕返しに来るはずだ」とナムは部下たちに言った。「だから集会所には誰もいないように偽装しなければならない。飛行機の音が聞こえたら煙を立てず、夜は火を消すこと。見張り台は空にはいけぬ……」

伊藤は何度もフォンと個人的な話をしようとしては躊躇した。ここは戦場で、自分は日本人だ。

半月後の朝、丸井は数人の隊員と森を巡回していた。どこにも変わったところはない。しかし、最もそれらしくない所で、木の折れているのに気づいた。奇妙な匂いが立ち込めていた。

「敵のコマンドだ」と丸井。「すぐ警報を出せ」とトゥンが言って、合図の銃を撃った。同時に敵の銃撃が始まった。トゥンと丸井は基地へ。銃声が基地の眠りを覚ました。

コマンド部隊が基地を取り囲み、銃撃しながら指揮所の小屋に押し入ってきた。ナムは床に転がって弾を避け、同時に撃ち返した。丸井が駆けつけて軽機関銃を発射したが、木の根元に隠れていたコマンドの銃弾が丸井の肩に命中した。弾丸はトゥンをも襲った。丸井が片手で引き金を引いた。コマンドは倒れ、丸井自身も倒れた。

伊藤はトゥンと丸井が犠牲になったのを目撃した。台所の方で叫び声がした。3人のコマンドがフォンを抱えていた。伊藤は初めて剣を抜いた。3人のコマンドはその剣の下にたちまち倒れた。

フォンが叫んだ。

「白竜、注意して！」

銃弾が伊藤に命中した。伊藤を襲った男はフォンに撃ち倒された。

銃声は徐々にまばらになった。ナムとタックは伊藤、丸井、トゥンの死体を前にしてうなだれた。フォンは魂を失った人間のように、銃をぶらさげて伊藤の屍の前に立っていた。伊藤の剣の柄には伊藤家の家紋がくっきりと現れ、刃は血にまみれていた。ナムの贈った伊藤の上着も血に染まっていた。伊藤の唇は微笑しているようであった。涙がフォンの頬を伝って流れた。



## 受勲者

ヴェトナム独立戦争に参加し、戦局がDRVに有利に展開し始めた1950年代まで主として戦争の主舞台となった北部で、実戦部隊または後方支援諸部門に所属して活動を続けた日本人のうち、上級・中級幹部（旧日本軍でいえば士官もしくは上級下士官）のポストにいた者の多くは、DRV政府または軍の勲章、徽章、表彰状を授与されている。政府によるものは1～3級の抗戦勲章と抗戦記念徽章、軍によるものは1～3級の戦勝勲章、戦功（戦士）勲章と徽章、兵站（生産・補給）部門における貢献によるものは中央、地方と各部門の労働勲章である。

独立戦争終結ののち、北緯16度以北にいた人々は、それらの勲章・徽章類をDRV当局に預けて帰国した。その後、現地では全土が焦土をなるような第2次インドシナ戦争（ヴェトナム戦争）が始まり、その終結後も第3次インドシナ戦争（ヴェトナム・カンボジア戦争、中越戦争、カンボジア武力紛争）が継続して、日越関係が極度に悪化したため、受勲の事実日本人多数がヴェトナム独立戦争に参加したという事実もとも日越両国で歴史の闇に埋もれていたが、ヴェトナム政府は1986年、北緯16度以北からの帰国者の親睦団体「ベトナム友の会」の湯川克夫幹事らの要請に応じて、東京の大使館を通じて7名に勲章を改めて授与し、それ以後も一部帰国者の要請に応じて再授与するようになっている。

我々の得た各種情報によれば、受勲者の総数は40名を下回らない。2005年までに受勲の確認できた元日本人戦士は次の通りである（相当数については、勲章・徽章の種別が確認できなかった）。

1. 天川健：第3級戦功勲章、抗戦記念徽章
2. 猪狩和正：第2級戦勝勲章、第1級戦功勲章
3. 岩井古四郎：戦勝勲章など
4. 内海静男：第2級戦勝勲章、抗戦徽章
5. 太田竹一：戦功勲章
6. 加茂徳治：抗戦勲章と戦勝勲章
7. 駒屋俊夫
8. 小森由男：抗戦徽章と戦功（戦勝？）勲章
9. 椎名四郎：勲章・徽章計7種の授与証明書を預けて帰国
10. 下田土郎：第3級抗戦勲章、抗戦徽章

- 1 1. 高橋真：ヴィン市電機工場表彰状、ラオカイ電機工場表彰状
- 1 2. 武田与四郎：第3級戦勝勲章、第3級戦功勲章、抗戦徽章
- 1 3. 橘信義：戦勝勲章など2種
- 1 5. 谷本喜久男：戦勝勲章など
- 1 6. 槌谷勇：第3級戦勝勲章、第2級労働勲章、抗戦徽章、愛国労働徽章、労働総同盟賞状、第5連区抗戦行政委員会賞状、ヴェトナム気象庁賞状
- 1 7. 中川武保：戦勝勲章など
- 1 8. 中川正人：戦功勲章
- 1 9. 中野功：第1級抗戦徽章（4種）、抗戦徽章、傷痍軍人徽章
- 2 0. 中原光信：戦勝勲章と戦功勲章
- 2 1. 丹尾久二：第3級戦功勲章
- 2 2. 藤本猛省
- 2 3. 堀伊三雄
- 2 4. 真脇佳廣：第1級戦勝勲章、栄光家族賞状、傷痍軍人徽章
- 2 5. 元山久三
- 2 6. 水江源治：戦功勲章
- 2 7. 弓野利夫（正しくは利茂）：第3級抗戦勲章、抗戦徽章、傷痍軍人徽章
- 2 8. 矢澤鶴次：戦勝勲章など
- 3 0. 吉田勝太郎：戦功勲章など
- 3 1. 吉田民夫：第3級労働功勲章

以上のうち、矢澤、太田、橘、中川、天川、小森の6名は1986年に同時に再発給を受けた。吉田は同年に再授与されたことになっている。加茂は1996年、谷本は97年の再授与である。

水江はラオス領内の仏軍基地攻撃作戦における功績などで勲章を与えられたが、第1次帰国団が54年に集合したとき、帰国途中での紛失を恐れて一時的に返納した（ただし彼自身は第1次帰国団には加わらなかった）。彼は80年代に「ベトナム友の会」の湯川克夫幹事を通じて東京のヴェトナム大使館に再授与を求めたが、資料が不足しているので待てといわれ、そのままになっている。

このような事情で、いったん授与された勲章を現地に残した日本人戦士は少なくないと思われる。そのようなことも含めて、受勲者全員の氏名と勲章・徽章の種類を明らかにすることは今後の課題であらう。

1980年代までのことはともかく、90年代以降に関していえば、ベトナム政府当局の功績確認および叙勲の手続きはかなり厳密である。それは独立戦争参加日本人への再叙勲にも適用されている。参考までに猪狩和正（旧日本陸軍中尉、元クアンガイ陸軍中学教官）に対する勲章再授与の関連文書を紹介する（翻訳：鷲生小弓）。

ベトナム社会主義共和国 独立・自由・幸福

ハノイ 1993年1月11日

人民軍政治総局政策局通達 So 13 ICS-KT

ベトナム日本友好協会殿

ベトナム人民軍政治総局政策局は謹んで貴会に報告する。ベトナム民主共和国政府は1946年より1954年までのフランス植民地主義者の侵略に対する抗戦期においてベトナム人民軍に参加し役務に就いた業績をたたえ、ファン・ライ氏すなわち猪狩和正氏に第2級戦勝勲章および第1級戦功勲章を授与した。貴会におかれては、ファン・ライ氏の家族にこのむね伝達されたい（当時の賞状の本文は送付しない）。

検査：政策局長

政策局次長 ファン・ラム大佐（印）

内認：同志ファン・タイン・ライにより上記の通り。

検査通報：要保管

**検査通報要約：1945～58年段階におけるベトナム革命への功績**

氏名：ファン・ライ

日本氏名：猪狩和正

生年月日：1920年6月22日

出生地：日本・仙台市

## 活動過程

### A：ヴェトナム革命参加以前

- \* 医科歯科学校で学び、歯科医学科を卒業。1943年、日本皇軍に召集され、後方支援を専門とした。
- \* 1944年、東南アジアへ派遣された。
- \* 1945年初頭よりヴェトナム・フエ（井川注：正しくはファンティエット）の日本軍基地に勤務。

### B：ヴェトナム革命参加

- \* 1945年3月9日に日本軍がフランス（のインドシナ統治機関）に対してクーデターを起こしたのち、（対英米戦争における）日本軍の戦況は悪化を重ねた。軍団参謀部（井川注：正しくは育兵団＝第34独立混成旅団の参謀部）を指揮する井川將軍（井川注：正しくは井川省少佐）は、数人の軍人を集めてヴェトミンと関係したが、その中に猪狩氏もいた（井川注：いなかった）。
  - \* 1945年6月より、総決起を準備中のトアティエン・フエのヴェトミンに軍事訓練を施した（井川注：この事実はない）。46年はじめ、中部南方地域に派遣され、ファンラン～ビンデインの前線で戦闘した。
  - \* 46年4月、ヴェトナム南部抗戦委員会により、グエン・ソン將軍の指導するクアンガイ陸軍学校の軍事教官に任命された。第1期の同校指導委員会には、現在の人民軍内務副総監グエン・チン・カン同志や、当時の校内の党活動責任者で現国防相・大将ドアン・クエ同志、また生徒には、いま政府・軍の高級幹部となっている人々がいた。
  - \* 1946年12月から48年まで、北部のチャン・クオック・トアン陸軍学校で第2・3・4期生の教官を勤めた。
  - \* 1949～50年、参謀本部に勤務。
  - \* 1951～58年、軍医局に勤め、ヴェトバック軍医学校で教え、歯科医としても働いた。
- 以上、ヴェトナム革命のために活動した期間は13年と5ヶ月である。

## 確認者証言（自筆）

\*私、元国防省軍医局副局長ヴー・コン・トゥエットは、日本人軍医ファン・ライ氏がヴェトバック軍医学校に勤めたことを認める。 1992年4月4日（署名）

\*私、元参謀総長秘書団長グエン・テー・グエンは、ファン・ライすなわち猪狩和正氏が1949年と50年の両年、参謀本部に勤務し、研究活動に積極的に貢献したことを証明する。 1992年4月14日（署名）

\*私は1946年6月末、南部抗戦委員会がクエンガイに設置した陸軍中学の政治委員として配属されたグエン・チン・ザオ、別称グエン・チン・カウで、開校準備を始めたころ、日本人訓練要員の中にいた日本人ファン・ライ氏、日本名猪狩和正氏と接触した。 1992年4月16日、ハノイ（署名）

\*私は現在、ハノイ市ドンダー区ナムドン集合住宅D10で退官後の生活を送っている元参謀本部第1局長・大佐のチャン・ディン・マイで、1946年にはクエンガイ陸軍中学の第1期生であった。日本人ファン・ライ氏は、私の所属した第3大隊の軍事教官であった。 1992年4月18日（署名）

## 独立戦争期のDRV軍区

- 第1軍区：ヴェトバック地方（ハノイ北方のバクタイ、ヴィンフー、テュエンクアン各省とヴェトナム最北端山地のランソン、ハザン、カオバン各省）
- 第2軍区：ヴェトナム西北端イエンバイ、ラオカイ、ソンラ、ライチャウ各省
- 第3軍区：首都ハノイとトンキン湾に面する海岸各省を含む北部平野各省
- 第4軍区：中部最北端のタインホア、ゲアン、ハティン各省
- 第5軍区：中部中央のクアンビン省からトアティエン・フエ、クアンナム・ダナン、クアンガイ各省を経てフーイエン省に至る地域
- 第6軍区：中部高原各省（コンツム、ザライ、ラムドン、ダクラック、ソンベ）
- 第7軍区：サイゴン・ザディン地区（現ホーチミン市）とその周辺地域
- 第8軍区：サイゴン東方のバリア・ヴンタウ、ドンナイ、ピントアンなど各省
- 第9軍区：カントー市を中心とするヴェトナム最南端のメコン・デルタ各省

注：軍区は「連区」と呼ばれてもいた。対仏抗戦で戦略的に最も重要であったのは、いうまでもなく第1～3軍区である。

## 独立戦争期の主要戦役・作戦と日本人

第1次インドシナ戦争（対仏独立戦争）では、ベトナム全土とラオスの一部で大小無数の戦闘が行われた（カンボジアではゲリラ戦のみ）。同一地域での同一原因または同一目的による一連の戦闘を、ベトナムでは「戦役」（Chiendich）と呼ぶ。目的または目標が限定されている場合は「作戦」（Dot tach chien）と呼ぶこともある。旧日本軍のシンガポール攻略作戦とかインパール作戦とかいうのと同じである。

いま対仏独立戦争史を研究しているベトナム人民軍のファン・タイン退役少将（クアンガイ陸軍中学卒業者）ら井川の知人が、現ベトナム国防省の公式史料にもとづいて作成した主要戦役・作戦年表を、井川の解説を付して以下に紹介する。日本でこのような年表が発表されるのは初めてである。

我々の推測によれば、独立戦争の帰趨を決した54年のディエンビエンフー攻防戦を除けば、この年表にある戦役・作戦の半数以上に日本人戦士が多かれ少なかれ直接参加し、その一部は戦死したと見られる。ディエンビエンフー攻防戦でも、少数の日本人戦士がDRV人民軍実戦部隊の後方で兵站支援など一定の役割を果たした。

### 〔戦争第1段階〕（1945年9月～47年12月）

持久戦段階。その初期は民兵・ゲリラがヴェトミン軍の主戦力で、戦闘を重ねるうちに正規軍（小隊、中隊、大隊、小団、中団＝旧日本軍の分隊、小隊、中隊、大隊、連隊）と各省所属の地方軍が編成されていった。

#### 1. 南部ける最初の攻防戦

##### (a) サイゴン攻防戦（1945年9月23日～10月25日）

日本敗戦直後のベトナム独立諸勢力（主勢力はヴェトミン）による八月革命に続いて、ホー・チ・ミンはハノイでベトナムの独立とDRV政府の樹立を宣言し、フランスとの交渉による独立達成をめざした。ヴェトミンはサイゴンに全南部11省を管轄するDRV南部暫定抗戦行政委員会を設立した。しかし日本軍の武装解除を任務としてサイゴンに到着した英印軍（イギリスが植民地インドでインド人を加えて編成した軍隊）は、日本軍の明号作戦（45年3月）で拘束されていた仏印軍（フラ

ンスがインドシナで編成した軍隊)のフランス人将兵を解放して武器を供与し、この仏軍による同市とその周辺部でのフランスの支配権回復を助けようとした。そのフランス人部隊は英印軍の兵站支援を得て9月23日にベトナム人独立諸派の武力掃作戦に乗り出し、たちまちサイゴンの主要部分を制圧した。DRV南部暫定抗戦行政委員会のチャン・ヴァン・ザウ議長(2006年3月現在ホーチミン市に在住)らは市外に逃れた。仏軍は10月初旬にフランス本国からの増援部隊を得て作戦を続行、サイゴン・ザディン地区(旧コーチシナ直轄植民地首都圏)の全域を制圧し、さらに周辺諸地域の制圧をめざした。南部駐留の日本軍諸部隊から離隊者が続出、しばしば武器弾薬を携行してヴェトナムに参加したのは、主にこの時期である。

井川を得た情報によれば、この時期、荒木という旧陸軍士官(\*)は、サイゴン東北のピエンホア航空基地から牛舎2台分の武器弾薬とともに姿を消した。サイゴン北方のホクモン県アンフードン村(今はホーチミン市内)では、日本人2名が仏軍と白兵戦を演じて戦死している(第1次報告書参照)。サイゴンの内外で少なからぬ日本人が戦い、一部が命を失ったことは確実と見てよい。のちに中原光信や加茂徳治ら数名の旧日本軍将校とともにDRV中央で軍事教育を統轄する人民軍参謀本部軍訓局のスタッフとなった山崎善作も、この時期には南部のメコン・デルタで戦った。また45年の9月か10月、旧日本軍離隊者たちが現地民兵グループとともに石井卓雄少佐の指揮で行った仏軍カントー基地奇襲では、2名の元日本兵が戦死したという(石井の元部下の証言)。

\*南方総軍の憲兵准尉荒木三郎(兵庫県出身)か。2006年3月現在消息不明。

元山久三の回想に出る「荒木」と同一人物かもしれない。

#### (b) ニャチャンと南部東西地域における抗戦

仏軍はサイゴンとその周辺部を制圧したのち、同市東方のドンナイ省やバリア・ヴァンタウ省と西方のロンアン省やティエンザン省(いずれもメコン・デルタ)に展開、さらに国道1号に沿って中部海岸のニャチャン市をめざした。ティエンザン省でヴェトナムの抗戦に参加したことが確認できるのは、旧陸軍第22師団の松嶋春義一等兵(第1次報告書参照)ら8名である。100日に及んだニャチャン攻防戦には、のちにクアンガイ陸軍中学教官となった猪狩和正中尉ら2名が参加している。

## 2. 中部高原防衛戦(46年3~6月)

サイゴンとその周辺部を制圧した仏軍は、バンメトート、ダラットを経て中部高原最大の要衝ブレイクに向かった。中部高原のヴェトナム武装勢力はまだ極めて弱体であった。中部海岸ビンディンにいた旧第34独立混成旅団参謀井川省少佐がブレイク防衛戦の指導に赴く途中、仏軍の待ち伏せ攻撃で戦死したのはこのときである。青木茂らもこのと



き中部高原で戦っている（第1次報告書参照）。

### 3. ダオカー戦役（47年7～8月）

詳細は今のところ不明。

### 4. ハイフォンとランソンにおける防衛戦（46年11月）

仏軍の一部は46年春にはすでに北部最大の港湾都市ハイフォンとハノイに進出していたが、交渉による独立問題解決をめざすDRVとフランスの暫定協定（46年6月）により、戦闘はほとんど行われなかった。しかし、11月に入って仏軍の大部隊がハイフォンに上陸、DRVの行政諸機関を武力で排除した。仏軍の一部はさらに中越国境のランソン方面へ進撃した。このとき、ハイフォンとその周辺に多かった旧日本軍の離隊者のうち、少なくとも5名はヴェトミン軍に加わって抵抗したとの情報がある。ハイフォンでは高橋ヒロミという旧日本軍砲兵将校や同下士官の宮崎勇雄が戦闘に参加した。

### 5. 全国抗戦宣言直後の作戦

#### (a) ハノイ防衛作戦（46年12月19日～47年2月17日）

仏軍はハイフォン制圧に続いてハノイへの進撃を開始、DRV政府とヴェトミンは交渉による完全独立の達成が不可能になったと判断し、ホー・チ・ミン主席は全国民に徹底抗戦を呼びかけた。ヴェトミンの首都防衛軍は激烈な戦闘のちヴェトバック地方へ脱出、ハノイ全域は60日間の戦闘のち仏軍の手に落ちた。この防衛戦では、のちに人民軍参謀本部軍訓局スタッフとして勤務中に消息を断ったアイ・ヴェット（本名不詳）ら少なくとも5名の日本人が参加し、うち3名が戦死したとの確度の高い情報がある。ハノイ防衛軍主力が中原光信の進言した夜間渡河によって成功したことは第1次報告書参照。

#### (b) ナムディン作戦（46年12月19日～47年3月8日）

ヴェトミン軍はハノイ南方の戦略的要衝ナムディン市にパラシュート降下した仏軍を紡績工場に包囲して攻撃したが、仏軍は増援部隊を得て反撃に転じ、ヴェトミン軍は87日間の防戦のち市外へ逃れた。この戦闘には中原光信がヴェトミン軍顧問として参加している。

#### (c) フエ作戦（46年12月19日～47年2月7日）

グエン朝の王都フエ（中部）の攻防戦。立花功ら日本人戦士2名の奮闘が記録されている。仏軍は50日間の戦闘のちフエ市を占領したが、同市とその周辺部を完全に掌握するには至らず、小規模な戦闘は50年ごろまで断続した。

#### (d) ハイズオン市と国道5号の作戦（46年12月19日～47年1月15日）

仏軍は国道5号を通過してハノイに進撃し、途中の要衝ハイズオン市を占拠した。これに対する抵抗戦に日本人戦士が参加したかどうかは不明。

(e) **ヴィン作戦**（46年12月19日～12月20日）

ゲアン省都ヴィンとその周辺で行われた戦闘。当時ゲアン省には少なくとも20名以上のヴェトミン参加日本人がいて、その一部はヴィン市周辺部でのゲリラ戦に加わったらしい。

(f) **ダナン作戦**（46年12月19～31日）

中部最大の港湾都市ダナンの攻防戦。日本人戦士が参加したという明文の記録はないが、ダナン市の南に位置するホイアン（16～17世紀に日本人町のあった朱印船寄港地）の周辺で日本人戦士がゲリラ活動を続けたという伝聞がある。

6. **ヴェトバック（越北）戦役＝ロー河戦役**（47年10月7日～12月19日）

仏軍が中越国境に接する東北の国道4号とテエンクエン省を流れる西方のロー河からDRVのヴェトバック根拠地を挟撃し、これを制圧しようとしたのに対する防衛戦。これはヴェトミン軍最初の大規模広域防衛戦となった。ヴェトバック根拠地とその周辺部にいたヴェトミン軍の日本人戦士のうち数十名は、多かれ少なかれこの防衛戦に参加した（実戦部隊では、例えば吉田勝太郎や山崎善作）。

**戦争第2段階**（47年12月～50年10月）

局地反攻・機動戦段階。この時期のほぼすべての重要作戦に日本人戦士が参加したと見られる。DRV正規軍の編成規模も拡大し、49年に初めて大団（のちの師団）が編成された（翌50年に第2の大団編成）。

7. **ラオハー戦役**（48年4～5月）

ヴェトナム最北端のラオカイ省とハザン省からヴェトバック根拠地に迫ろうとした仏軍に対する防衛戦。日本人戦士が参加したかどうかは不明。

8. **国道3号戦役＝フォートン戦役**（48年7月）

ヴェトバック根拠地西部で行われた戦役。我々は日本人戦士の参加の有無を含めて詳細を確認していない。

#### 9. 国道13号戦役＝アンチャオ戦役（48年8～9月）

中越国境に近いヴェトミン武装勢力が行った仏軍後方攪乱作戦。日本人戦士の参加実態はよくわからない。

#### 10. ソンタイ・ヴェトチー・ホアピン戦役（48年末）

ヴェトバック根拠地の西南を縁取る仏軍の包囲線を攪乱・打破するための一連の戦闘活動。日本人戦士の参加はほぼ確実。

#### 11. ホアン・スー・フィ戦役＝ラオカイ戦役（49年3～4月）

ヴェトナム最北端のラオカイ省で仏軍の陣地群に対して行われた一連の戦闘。ヴェトミン軍はこのころから仏軍に対して反撃を試み、この種の積極的な戦略行動に過去の民族英雄の名を冠するようになった（ホアン・スー・フィも民族英雄の一人）。日本人の役割は不明。

#### 12. ダーバック・スオイヅット作戦（49年4月）

詳細は不明。

#### 13. カオバックラン戦役＝国道4号戦役（49年4月）

仏軍のヴェトバック根拠地覆滅作戦をクエンニン～ランソン間の国道4号で決定的に阻止し、ランソンなどの重要都市を解放した一連の戦闘。戦局を均衡・対峙段階に移行させるうえで極めて大きな意味を持った戦役であった。多数の日本人戦士が参加したが、中でもDRV人民軍（正規軍）第174中団（連隊）の偵察中隊長岩井古四郎らの活躍が特筆される。

#### 14. ロー河・フートー・テュエンクアン防衛戦役（49年5月）

ロー河を舞台の一つとする大規模な抗戦で、日本人戦士も参加。これと前記「ヴェトバック戦役」は、ヴェトナム戦争初期に至るまで流行した歌曲『ロー河の歌』で北部の人心に深く刻み込まれた。日本人戦士は49年のこの戦いにも参加し、一部はその前後に戦病死している。

#### 15. タオ河戦役（49年5～6月）

北部。詳細は不詳。

#### 16. レ・ロイ戦役（49年11～12月）

ホアビン省、タインホア省西北部、国道6号と12号の沿線で行われた一連の仏軍陣地攻撃作戦。レ・ロイは明帝國軍を破ってレ朝を建てた民族英雄。ヴェトミン正規軍中隊長としての橋信義の活躍はこのころと思われる。

#### 17. タップヴァン・ダイソン（十万大山）戦役（49年4月）

中国の国共内戦で敗北必至となった中国国民党軍（中華民国軍）の一部（約5万人）は、広東・広西両省から国境を越えてヴェトナムに入り、仏軍支配下の平野部を通過して南下した。これを南部へ行かせればDRVにとって重大な脅威となるが、仏軍と対峙している北部のヴェトミン軍主力にはこれを阻止する余裕はない。そこでDRV中央は、国土が最も狭隘で山地が多く、仏軍の配置も比較的手薄な中部のクアンナム省（ダナンとその周辺部）で彼らを阻止する一種の秘密作戦を現地（第5戦区）のヴェトミン軍に命じたのである。それゆえ日本人は全く参加していないと考えられる。しかし、この阻止作戦をめぐりぬけた中国国民党軍は、のちにサイゴン経由で米国、台湾、香港へ移動、一部はサイゴン郊外に麻薬密売などを業とする「自由村」をつくって定着した。

#### 18. クアンナム北部戦役（49年7月）

前項の作戦に続いて第5戦区のダナン周辺で行なわれた中国国民党軍および仏軍との戦闘。このときホイアン周辺では青木茂ら日本人戦士数人が作戦に参加。

#### 19. アンケ戦役（49年3月——「8月」の誤記?）

第5戦区を中心クアンガイ市に進出した仏軍との一連の戦闘。中部ではこの地域に最も多く集まっていた日本人戦士も参加した（峰岸貞意、藤原朋蔵、安藤昇三など）。

#### 20. ザウティエン戦役（49年3月——「8月」の誤記?）

北部で膠着していた戦局を打開し、ヴェトバック根拠地を包囲する仏軍に兵力分散を強いるべく、DRV中央はこのころから仏軍の金城湯池である南部で中部の精鋭部隊を加えた機動戦を試みた。この戦役はその一つで、石井卓雄ら日本人戦士グループ（約20名）を中核としてクアンガイ省で編成された通称「バ・ズン大隊」が南下したのはこのときらしい。この部隊の日本人隊員は全員消息不明である。

## 2.1. カウガン戦役（50年1月）

南部での機動戦（前項参照）。

## 2.2. レ・ライ戦役＝クアンビン戦役（50年2月）

フエ北方の海岸省クアンビン（中部）における仏軍への一連の攻撃（奇襲）作戦。この地域の仏軍の配置は、大都市がなく、それまで地元のヴェトミン武装勢力も弱体であったためか、比較的手薄であった。参加した日本人の有無は不明。仮に参加していたとしても、この地域の平野部は後年の対米戦争（ヴェトナム戦争）のとき米軍の空爆と艦砲射撃で完全に荒廃したため、地元には口伝えの情報すら残っていない。

## 2.3. 国境戦役＝レ・ホン・フォン戦役（50年9月5日～10月15日）

中国内戦における中国共産党の勝利はすでに確定していたが、同党支配地域とヴェトナムが完全につながったわけではなく、国境地帯には相当な兵力を擁する中国国民党の敗残部隊がいた。これを一掃することは、中国の援助を効果的に受けるため、また国民党軍の侵入を阻むために必要であった。一方、ヴェトバック根拠地における物資欠乏に苦むDRV中央は、仏軍の包囲網に穴を穿ち、その背後を脅かすと同時に、物資補給を少しでも容易にするため、北部平野（紅河デルタ）で機動戦を展開する必要にも迫られていた。この戦役は、これらの必要を満たすためのもので、戦局がこの時期から機動戦段階に入ったことを物語っている。レ・ホン・フォンはインドシナ共産党の初期の指導者である。

（1）ラオカイ陽動作戦：中越国境のラオカイ省で行われた中国国民党軍駆逐作戦。

（2）ホアビン陽動作戦：ホアビン省は日本でいえば近畿の金剛山系のような極めて複雑な地形を持ち、軍事行動には不便ではあるが、それだけにハノイ西方を迂回してナムディン、ニンビンなど紅河下流の平野部に出て仏軍の後方を攪乱するには好適の回廊地帯であった。橘信義らは、この作戦でも活動したと見られる。

（3）北部デルタ陽動作戦：ハノイ東方の平野部における機動戦。主として大隊（旧日本軍の中隊）規模の正規軍部隊が44箇所の仏軍陣地を破壊した。これにも若干名の日本人戦士が参加したとの伝聞情報があるが、個人名などは未確認。

## 2.4. チャヴィン戦役およびベンカット戦役（50年10月）

前項のレ・ホン・フォン戦役と連携する形で南部のチャヴィン市周辺部（メコン・デルタ）とサイゴン北方のベンカット市周辺部（トゥーダモット省）で行なわれた仏軍陣地攻撃作戦。前記「ホービック

大隊」の生き残り隊員を含む日本人戦士が参加したことは容易に推測されるが、我々は明文記録と証言を全く入手していない。

南部は仏軍が逸早く制圧した地域であり、しかも主戦場が北に移ったためDRVの行政・軍事・情報機構が完備せず、政治・軍事状況は極めて錯綜し、しかも後年、対米戦争という史上最大の局地国際戦争の主舞台となって、独立戦争期の公式・非公式記録の保存すら不可能に近い状態となったためか、独立戦争におけるこの地域の日本人戦士の事跡を探ることは至難事中の至難事である。

## 25. クアンナム北部戦役＝ホアン・ジェウ戦役（50年10月）

第23項の国境戦役と連携する形でダナン市周辺部で行われた。我々はまだ日本人戦士の活動に関する具体的情報を入手していない。

## 〔戦争第3段階〕（50年12月～54年）

反攻段階。新中国の援助によって物資補給面の弱点を補うことのできた人民軍は、ようやく本格的な機動・陣地攻略戦に乗り出し、最後のディエンビエンフー決戦へと雪崩込んでゆく。

## 26. チュンズー戦役＝チャン・フン・ダオ戦役（50年12月27日～51年1月16日）

DRV政府は、49年の中華人民共和国成立と同国による直接援助の開始によって兵站分野の危機を脱した。「台所の不安」に怯える必要がなくなったといってもよく、その結果、DRV武装勢力、とりわけヴェトミン正規軍（人民軍）は、北部平野の仏軍に対する本格的な反攻機動作戦をようやく展開することができるようになった。ヴェトナム軍事史上最大の名将チャン・フン・ダオ（13世紀に元帝國の侵略軍を撃退）の名を冠するこの戦役は、その嚆矢をなす大作戦といってもよいが、我々はこれに参加したであろう日本人戦士に冠する明文の記録を入手していない。

## 27. 国道18号戦役＝ホアン・ホア・タム戦役（51年3月23日～4月10日）

北部での反攻作戦。ホアン・ホア・タムはフランスのヴェトナム侵略に対し、中越国境地帯で最後までゲリラ戦を行って抵抗した民族英雄。以下、前項と同じ。

### 28. ハナムニン戦役＝クアンチュン戦役（51年5月28日～6月30日）

紅河デルタ西部のハドン、ナムディン、ニンビン各省で展開された作戦。クアンチュン（光中）は18世紀末にレ朝後半の南北抗争を收拾して全国統一を達成したヴェトナム近世最大の英雄グエン・フエの帝号。以下、前項と同じ。

### 29. 北部デルタ反攻戦役（51年夏）

北部平野の仏軍陣地に対する広域攻撃作戦。以下、前項と同じ。

### 30. ギアロー戦役＝リー・トゥオン・キエット作戦（51年10月）

同上。リー・トゥオン・キエットは11世紀に宋帝國の侵略軍を撃退した名将。

### 31. ホアビン戦役（51年11月14日～52年2月25日）

ホアビン省における仏軍の前線基地2箇所への攻撃と、紅河デルタにおける仏軍後方攪乱作戦。以下、前項と同じ。

### 32. 西北戦役（52年11月14日～12月2日）

ヴェトバック根拠地西縁辺部のフートー、チュエンクワンなど人民軍の重要拠点に接する仏軍拠点を攻撃する一方、紅河デルタや第5戦区（中部）で仏軍の後方攪乱を目的とする機動作戦を展開したものである。この戦役には、抗戦初期にバクソン軍政学校教官（砲術専門）を勤めた旧陸軍将校矢澤鶴次（グエン・ヴァン・タイン）が第312中団（旧日本軍の連隊）の砲兵部隊を率いて参加、吉田勝太郎（クエット・タン、栃木県出身）と太田竹一（福岡県出身）も第308中団の副大隊長（副中隊長）級指揮官として参加した。

人民軍野戦部隊の副大隊長（旧日本軍の編成では副中隊長）であった元クワンガイ陸軍中学副教官の青山浩と、人民軍第174中団（連隊）の大隊長であった日本人ホン・フォン（本名不詳）がハノイ東方で戦死したのは、この戦役の前後である。井川が青山の戦死したハイズオン省ビザン県ビードー村の古老数人から聞いたところでは、彼の部隊は52年4月ごろ、付近の仏軍の小陣地を攻略したあと村に入り、村民あげての歓迎会のあと村に宿営した。翌日未明、仏軍の戦車隊と歩兵部隊が村を包囲して砲撃し始めた。青山は決死隊を率いて脱出路を切り開き、部隊と村民を村外へ逃れさせたあと、村はずれの大木の下で部下数人とともに仏軍の動きを見守っていた。そこを仏軍の砲弾が直撃し、青山と部下数人は即死した。「黙

ってにここにこしていて、部下全員に信頼されているようでした」と古老たちは語った。

### 33. 上部ラオス戦役（53年4月13日～5月17日）

ヴェトバック根拠地とその周辺地域における人民軍の力量は、このころ中国の援助による物質的条件（武器、被服、食糧など）の改善に伴って飛躍的に増大しつつあった。仏軍はこれに対し、西方のラオス国境地帯に大規模な攻撃拠点を築き、この地域と東方の平野部の両側面からヴェトバック根拠地を一気に挟撃する戦略に転じ、ラオス経由の兵站線を強化し始めた。上部ラオス戦役はこれを妨害するためのもので、第66連隊の大隊長（旧日本軍の中隊長）をしていた橘信義もこのとき初めてラオスで戦った。

### 34. 北部デルタその他の地域での敵の掃討作戦に対する反撃作戦（53年）

この年、ヴェトバック根拠地に対する総攻撃を準備しつつあった仏軍に対する本格的な機動反撃戦が北部諸地域で行われた。少なからぬ日本人戦士が参加したと見られる。戦局は反攻段階に移行した。

「ヴェトバック連区」の参謀部作戦班（情報班？）にいた駒屋俊夫は、この年、師団級の人民軍大部隊が中国軍事当局の要望もあってクアンニン～ランソン間で中越国境を越え、中国広西省で展開した中国国民党軍掃討作戦に、同じ参謀部にいた通信専門の藤本猛省らとともに従軍したという。ただし、駒屋の参加した中国領内作戦は、50年の国境戦役のとき行われたものかもしれない。

### 35. ドンスアン戦役（53年末～54年）

独立戦争最終段階における一連の作戦で、おおむね最後のディエンビエンフー決戦に関連している。

- (1) 中部・下部ラオスにおける作戦（53年12月～54年）
- (2) 上部ラオス作戦（54年1～2月）
- (3) 中部高原作戦（54年1～7月）
- (4) ダイ川作戦（期間不明）
- (5) ディエンビエンフー作戦（54年3月13日～5月7日）

上部ラオス作戦では橘信義の大隊が2回目のラオス出撃を行った。ラオス国境に近いソンラ省のディエンビエンフー基地に終結した仏軍大部隊に対する総攻撃に日本人が直接参加



したという情報はない。しかしタインホア省で兵站支援に従事した中原光信（当時人民軍参謀本部軍事参議官）のように、この決戦に間接的に参加した日本人は少数（10名内外）ながら存在したようである。山崎善作（当時西北軍区第359大隊副指揮官）も何らかの後方支援活動を行ったと見られる。

#### [関連事項] 調査の方法および謝辞

この年表に関連して、我々の調査方法と、この調査に協力してくれた人々への謝辞を述べておきたい。

個々の戦役あるいは作戦における日本人の参加または不参加、参加した場合の人数、氏名、地位、職務、死傷というようなことの確認は極度にむずかしい。この困難の原因は実に単純で、彼らが独立戦争の全過程を通じて外国人義勇兵としてではなく、ごく普通のヴェトナム人として処遇されていたということに尽きる。彼らは事実上、ヴェトナム名を持つヴェトナム国籍者とされていた（「新ヴェトナム人」という中部以北での一般的呼称はそのことを意味する）。そのため独立戦争に関するヴェトナム共産党・政府・軍の公式戦闘記録には、日本人を特定した記述は極めて乏しい。彼らが個々の戦役または作戦で何らかの功績を立てたとしても、それはヴェトナム名を持つヴェトナム人の功績として記録されているのである（\*）。これは軍事以外の領域で活動した日本人についてもいえることである。

\* ややまとまった公式記録（履歴書類）は、北緯16度以北からの第2次集団帰国者（1959年）と第3次集団帰国者（60年）に関するもののみであるが、これは彼らが帰国に際しヴェトナム人から外国人（日本国籍者）に戻ったからであろう。独立戦争が実質的に終結した直後の第1次集団帰国者（54年）については同種の記録がないが、これはDRV当局に彼らの経歴などを確認する時間的余裕がなかったためと考えられる。

従って我々は、独立戦争に参加した個々の日本人が、どういう氏名と前歴を持ち、DRVのどういう政府機関あるいは軍事単位に所属し、いつ、どこで、どういう活動をし、どこで、どのように死んだか（または、いつ、どこから、どういう形で帰国したか）等々の調査に際し、主として①彼らの上司、僚友、部下あるいは生徒であったヴェトナム人の個人的な談話とメモワール、②帰国した独立戦争参加日本人の談話とメモワール、③独立戦争における外

国人の役割の掘り起こしに努めてきた少数の戦史研究者（例えばグエン・ヴァン・コアン博士）の私的資料、④旧日本軍諸部隊戦友会の記録（離隊者に関する記述部分）、⑤現地妻子の談話、という五つの情報源に頼らざるをえなかった。最も役に立ったのは①と②であるが、独立戦争参加者が日越双方で高齢に達し、しばしば病身、しかも年々物故している状況にあっては、この方法による調査も極めて不完全なものにならざるをえなかったと正直に述べておこう。

調査のもう一つの手掛かりは、ヴェトナム全国各地の烈士墓地（戦死または刑死した愛国闘士の墓地）に葬られている日本人の墓標である。我々は第2次の調査項目にこれを加えるつもりであったが、この作業はヴェトナム政府・軍の公式記録の山の中から個々の日本人の活動記録を発掘するのに比べてさえ困難である。烈士墓地は一万数千。碑銘はすべてヴェトナム名（\*）。しかも被葬者のリストは、烈士墓地全体を管轄するヴェトナム厚生労働省ではなくて烈士墓地所在地の自治体にしかない。従って烈士墓地を訪れて、地元自治体の記録や古老の話から日本人の墓標を発見し、その日本人の本名や履歴を探るのには、気の遠くなるほどの時間と労力が必要であろう。それゆえ我々は当面この作業を諦めるほかはなかった。

\* 南部におけるヴェトナムの重要拠点の一つで、対米戦争のとき南ヴェトナム解放民族戦線の重要拠点の一つとなったベンチェ省モーカイ県（メコン・デルタ）に、同県人民委員会（県庁）が1990年代に県内の一部町村の烈士墓地を統合して新設した県営烈士墓地があり、2基の墓石には故人のヴェトナム名に加えて「Nhat」（ニャット＝日系）の4文字が刻まれているが、これは統合前にこれらの墓石のあった村の古老たちの記憶にもとづいて同県の担当者が新たに刻みつけたものであって、2基が県営烈士墓地に移されなかったなら、それらが日本人戦士のものであることは恐らく永久に他県の人々の目に触れず、従ってここを調査した井川の目にも触れなかったに違いない。南部でヴェトナム独立戦争に倒れた日本人大多数の魂は、今なお本名を知られることなく烈士墓地に眠り、あるいは墓石すらないままに虚空を漂っている。

ところで、①の方法による調査に協力してくれたヴェトナム人は、第174連隊長を勤めたダン・ヴァン・ヴェット退役大佐（戦史研究家）、元国防省戦史研究所長ホアン・フォン中將、クアンガイ陸軍中学卒業者数名（ファン・タイン少將、チャン・ディン・マイ退役大佐、レ・カック・フィン退役大佐ら）などである。クアンガイ陸軍中学出身の作家タイ・ヴーの作成した同中学卒業生名簿は、人民軍の日本人関係人脈を辿るには極めて有効であった。

②で聞き取り調査の対象となった元独立戦争参加日本人は、中原光信、加茂徳治、谷本喜久男、藤田勇、岩井古四郎、駒屋俊夫、矢澤鶴次、伊藤久雄、青木茂、富永朋蔵、安藤昇三、松崎兼夫、大西貞男など約40名。中原や加茂のように10～20回に及ぶインタビューに応じた人もいる。一部帰国者の家族（例えば猪狩和正元中尉の長男でカメラマンの猪狩正男、安藝昇一未亡人幸など）も調査への協力を惜しまなかった。

諸種の事情により、インタビュー対象者・資料提供者全員の氏名を挙げることは避けるが、ここに場を借りて深い感謝の意を表しておきたい。これら日越両国の協力者なくしては、我々の調査研究は半分も進捗しなかったであろう。物故者とその遺族には、同じく深い哀悼の意を表する。

## ヴェトバック根拠地の生活

ヴェトナム再征服をめざす仏軍は、45年9月にまずサイゴンを占領、46年前半までに南部の諸都市を制圧し、46年11月に北部の大港湾都市ハイフォンに上陸した。ここに至ってホー・チ・ミンDRA主席はフランス政府との交渉による独立達成を諦め、12月19日に「全国抗戦」を宣言、全国民に武装闘争を呼びかけた。それ以前から主戦場が北部になることは明らかであった。そのためDRV政府は11月までにヴェトミン正規軍（抗戦初期には衛国軍、のち人民軍）の主要部隊を北部に終結させていたが、仏軍は「全国抗戦」直後に激戦のすえ首都ハノイを攻略した。DRV中央政府とヴェトミン軍主力は、装備（特に武器）と戦闘技術の点で段違いに優勢な仏軍との正面衝突を避け、ヴェトナム最北端のヴェトバック（越北）地方に根拠地を築いて長期持久の態勢に入った。中部以北でヴェトミン正規軍に属して軍事教育や野戦に従事していた日本人戦士も、推定3分の1程度は所属部隊とともにヴェトバックに移った。

ヴェトバックは現在のハノイ（ノイバイ）国際空港あたりから北、ランソン、ハザン、カオバン、ラオカイ、ライチャウの中越国境各省を含む広い地域（日本でいえば関東・甲信越地方に相当）であるが、1947年末から対仏抗戦の最重要根拠地となったのは、首都に最も近いバクタイ、チュエンクアン、フートの3地域で、特に山岳と河川の複雑に入り組むバクタイ省西部の森林地帯に位置する約5,000平方kmの区域は、DRV中央政府・軍の諸機関と労働党中枢機関の集中する警備厳重な「安全区」となっていた。

「安全区」の中心はチョーチュー町を中心とする区域（デインホア県）とダイツー町周辺区域であった。井川がバクタイ省都タイグエンの歴史博物館などで調べた戦時史料によると、ホー・チ・ミン主席の住居はチョーチュー区域のフーディン村、党・政府・軍首脳居住区はディエンマック村、人民軍の総司令部と参謀本部はビンイエン村、軍中央兵器貯蔵所はチュンルオン村、グエン・アイ・クオック党幹部学校はダイツー区域のビンタイン村にあった。加茂徳治（ファン・フエ）ら日本人スタッフの多かった参謀本部の軍訓局と軍政学校は、ダイツー区域のビンソン村ソイミットにあったが、52春に仏軍に爆撃されたためビンイエン村の総司令部の近くへ移った。ビンイエン村には参謀本部補給局（食糧など軍需物資の供給を担当）もあった。

それ以外の軍中央機関・施設が集まっていたのは、チョーチュー区域のキムソン、クイ

キイ、バオリン、タインディン、ディンビエンの6ヶ村である。チャン・クオック・トアン陸軍中学（チャン・クオック・トアン武備学校とクアンガイ陸軍中学を合併した士官学校）、バクソン軍政学校（のちの中級幹部学校）など各種の中央軍事教育施設はダイツー区域に分散していた。

藤田勇を必須の人材としていた財務省や、高澤民也元軍医中尉が指導的役割を果たした同省管轄下の医務局はチョーチュー区域にあった。高澤は日本人の部下数名とともに同区域のフクスアン村フクチューで医療・製薬活動に専念していた。元クアンガイ陸軍中学教官の猪狩和正が歯科を担当していた軍中央病院第7分院は、同区域のソンカム村にあった。

ダイツー区域は第2次大戦末期に米国のOSS（CIAの前身）が日本軍を攪乱するための活動拠点を置き、ヴェトミンを支援していたことで知られている。北部で活動していた日本人戦士の集団帰国第1陣70余名が54年の夏と秋に集合したのもダイツー区域である。

ヴェトバック地方は全体として山岳が多く、冬（12月～翌年2月）には気温が摂氏0度近くになることも珍しくない貧しい地方で、テイ、タイ、ザオ、トー（ヌン）などの少数民族が混住していた。抗戦開始と同時に、そこに軍人と民間人を併せて数十万というヴェトナム人が一気に流入した結果、人口と生活必需物資のバランスは大きく崩れた。食糧補給その他、ヴェトミン軍の兵站作業が困難を極めたのは当然のことである。日本人戦士は比較的優遇されていたが、それでもしばしば食物にも事欠く状態を強いられた。駐屯の場所によっては、半年近く米飯を口にできない時期もあったという。

以下は、帰国した元日本人戦士やヴェトミン古参幹部であったヴェトナム人から井川の聞き取ったその生活の実態である。

## 1. 住居・衛生

DRV政府機関の勤務者やヴェトミン軍将兵の多くは、少数民族の高床式の家に寝泊まりするか、木か竹の柱に亜熱帯植物ラタニアやシュロの葉、あるいは野草で屋根を葺いた掘立小屋に住んだ。壁は竹を編んで枯草を混ぜた粘土を塗ったもの、あるいはラタニアの葉や野草で覆ったものが普通であった。移動することの多い野戦部隊の戦士たちはしばしば野営を余儀なくされた。DRV中央省庁や軍の中枢機関もすべて掘立小屋で、ベッド、机、椅子、ベッドに敷くアンペラなども主に竹製であった。夜間の照明には、もっぱら簡単な灯油ランプを用いた。自家発電による電灯は、藤本猛省が主任を勤めていた通信基地

のような特殊施設以外にはなかった。

独立戦争のころはヴェトバック根拠地の大半が野獸の多い原生林に覆われ、住居もすべて開口部だらけであったので、蚊を防ぐのはむずかしく、マラリアに罹患する者が相次いだ。こういった生活環境ゆえ、アメーバ赤痢のような伝染病も完全には避けられなかった。医療活動を指導していた高澤軍医とその部下たちが最も苦勞したのは、マラリアとアメーバ赤痢の予防および治療である。近代的な医薬品は極めて乏しかったため、彼らは地元の薬草や鉱物を主たる原材料とし、これに仏軍支配地域の都市部から辛うじて入手できるわずかな化学製品を加えて、抗マラリア薬、抗菌薬、胃腸薬、感冒薬、蚊取り線香などを製造しなければならなかった。彼らは負傷者のための手術用消毒剤、麻酔剤、蒸留水、食塩水なども地元の材料でつくっていた。

独立戦争前半期には、ヴェトバックに限らずヴェトナム全土の至るところで日本人戦士は貴重品扱いで、ヴェトミンのあらゆる機関と部隊、また民衆大多数が彼らを歓迎した。彼らの多くがヴェトバックで「ザオスー」（教授、先生、転じて一般に上級インテリ）と呼ばれ、同じ地位のヴェトナム人より一段上の給料を与えられていたのがその証左であるが、日常生活の基本については「同甘共苦」（楽しみと苦しみを共にする）というヴェトミンの原則が日本人戦士にも適用された。彼らに特別な衣食住の条件が与えられていた形跡はなく、日本人戦士の方もヴェトナム人の同僚と同じ暮らしの形を当然のこととして受け入れていたようである。

この地方で生まれ育ち、多くの日本人戦士に接して日本語を学び、のちにヴェトナム外務省プレス・センターの日本班主任を勤めたグエン・クイ・クイは、「日本人戦士は軍事教練や戦闘指導では実に厳しかったが、普段は誰に対しても自己を主張せず、年長の女性にはとりわけ優しく、衣食住についての不平不満を口にすることは全くなかった」と井川に語った。これはヴェトバック地方で井川の出会った古老たちの、ほとんど例外のない日本人戦士評である（\*）。

\* そういう日本人戦士にも一つの泣きどころがあった。それは若くて元氣な独身男性なら避けようのない異性への欲求である。彼らが若いヴェトナム女性との結婚を急ぎ、ヴェトミン指導部もまた結婚を勧めたのは、一つにはそのためであろう。ヴェトバックではなくて中部でのことであるが、クアンガイ省で戦闘や軍事訓練に従事した安藤昇三（岐阜県出身、元兵長、旧日本陸軍第3航空軍所属）によると、49年ごろ、あ

る村にいた日本人戦士グループが、ヴェトミン幹部の村長に「みんな結婚させるという約束」の実行を迫ったことがあるという。しかし日本人戦士は男女関係で極めて倫理的であった。井川の調査した限りでは、彼らの不倫行為やレイプを伝える情報は皆無である。

少数民族の人々は、日本人には格別に好意的であったらしい。ヴェトミンの部隊が少数民族の村々に宿営するときは、政治委員が先行して、泊めてくれる家々を隊員それぞれに平等に割り振っていた。隊員たちは豚や鶏のいるような階下の吹き抜け部分にハンモックを吊って寝るのが普通であった。しかし日本人はしばしば階上の部屋、それも囲炉裏のある長老の居間に招かれ、茶、酒（雑穀焼酎）、黒砂糖などでもてなされ、時にはアヘン吸引を勧められたうえ、その部屋で寝具まで与えられて寝ることが珍しくなかったという。

## 2. 食糧

クアンガイ陸軍中学で教官を勤めた中原光信（ミン・ゴック）が1946年秋に北部に移り、ナムディン攻防戦に参加したのち、47年初頭に参謀本部勤務を命ぜられ、同陸軍中学の通訳であったヴェトナム人チーを連れてテュエンクアンからダイツーへの道を辿っていたとき、同じテュエンクアンから帰る途中のヴェトミン軍参謀総長ホアン・ヴァン・タイが馬に乗って追い抜きざま、「ここから先はろくに食べ物もないところだが、我慢して努力してくれ！」と叫んだ。ダイツーに着いてみると、そこは果たして農地（特に水田）が乏しく、従って食糧自給力が極めて小さく、もともと紅河デルタ（平野部）からの米の移入に頼らざるをえない地方であった。

ヴェトバック根拠地には工業・手工業施設もほとんどなかったから、DRV中央は流入人口数十万の生活と戦闘の必要を満たすための衣料、食塩、事務用品、機械部品、電線、医薬材料、燃料（主に灯油と石炭）その他あらゆる物資を、仏軍の警戒線を潜って平野部から調達しなければならなかった。腹が減ってはいくさができない以上、米と塩（\*）の調達は何事にも増して重要であった。

\* ハイフォンには海塩の2大産地（ハティンとファンティエット）から大量の塩が輸送されていたが、そこから先の流通網は仏軍に抑えられていた。ヴェトバック地方にも岩塩があったが、その量はヴェトミン軍の必要を満たすには到底足りなかった。ハイフォン近傍の倉庫から塩数トン盗み出してヴェトバック根拠地へ運んだ女性が英雄視される時代

であった。

中原や藤田勇の記憶によると、約10本の秘密ルートを通ずる必需物資の調達活動を組織していたのは、独立戦争終結ののちDRVの貿易省次官となったギエム・バー・ドックである。この分野での彼の指導力は際立っていたし、物資調達機関そのものの実行力にも脱帽に値するものがあった(\*)。しかし平野部の大半が仏軍支配下にあった1947～49年には、根拠地の最低限必要とする物資の半分でも確保できれば大成功であって、根拠地の政治・軍事機関とヴェトミン戦士は例外なく食糧を含むあらゆる物資の不足に悩まされていた。

\* 井川の調査によれば、物資調達活動には野波勝三郎ら複数の日本人も命懸けで従事し、その行動範囲は中部南半にまで及んでいた。

当時、この地方でヴェトミンの「3大敵」といわれていたのは、前記のマラリア、アメーバ赤痢と食糧難である。食糧事情は時期や場所によって大きく異なっていたが、平均的に見れば「飢えない程度には供給されていた」ということになるうか。

ヴェトバック根拠地における食事の標準とされていたのは、米飯、タケノコなどと一緒に炒めた少量の鶏肉や豚肉、そして茹でたザオムンである。ザオムンは今でもヴェトナム人の好む水草で、ヴェトバック根拠地では胡麻塩やヌックマム（魚醤油）やチャイン（ライム）の汁をふりかけて食っていた。だが、この標準通りの食事が毎日できるようになったのは、ヴェトミン軍が中国の援助を得て平野部で小規模ながら機動戦を展開することできるようになった51年以降、それも軍訓局など中央諸機関に勤めていた人々であって、一部の戦闘部隊では51年以降も「飢えない程度」が多少ましになった栄養失調すれすれの状態が続いた。

多くのヴェトミン戦士の主食はタピオカを半分以上加えた米飯（糯米を含む）で、49年まではタピオカだけということもあった。副食はザオムンとタケノコで、ザオムンのない山地では野草のザオトーバイ（飛行機草）の塩茹でで我慢しなければならなかった。塩のないときは竹の節や根を焼いて、その灰を代用した。動物性蛋白質は決定的に足りず、豚肉や鶏肉にありつけるのはテット（旧暦の正月）のような祝祭のときだけであった。テットにつきもののバインチュン（肉ちまき）にも、小指の先ほどの豚肉しか入っていないことが多かった。蛋白質不足を補うため、抗戦の初期には爆薬で川魚を獲っていたが、この漁法はのちに禁止された。

人民軍第174中団（旧日本軍の連隊）の偵察大隊長（中隊長）として活躍した岩井古



四郎（グエン・ヴァン・サウ）によると、47年末から48年春にかけて米と糯米が特に不足し、4～5ヶ月間トウモロコシ粥だけで胃袋を満たした。ときたま豚肉も食べたが、たいていは脂身であった。何日間か小豆だけを主食にしたこともある。蛇は貴重な蛋白源で、みつけ次第つかまえて、首を切って皮を剥ぎ、胴体のまわりの肉を棒に巻いて焼いて食うのが常であった。肝臓はバナナの葉に包んで蒸し焼きにし、マラリア患者に優先的に与えた。ヴェトナム人は概して蛇を怖がっていたが、日本人は蛇を平気でつかまえて料理していたという。

岩井と部下たちは、いつもポケットにトウガラシを5～10個入れておき、ときどきチャインの汁と岩塩をつけて齧っていた。これは心身の活性化と冬の防寒に役立った。空腹を忘れる効果もあった。

また中級幹部学校の教官を勤め、しばしば「安全区」北方の要衝バクカン市の周辺やカオバン省南部で実戦指導にも携わった矢沢鶴次（グエン・ヴァン・タイン、富山県出身、旧日本陸軍第21師団第62連隊将校）は、タケノコやバナナを豚の脂で炒めたものが主な副食で、ごく稀に牛や水牛を潰し、皮まで食ったと語っている。牛の皮はドラム缶で2日2夜煮て、ベッコウ色になったのを食うと実に旨かったが、水牛の皮は堅くて歯が立たなかったそうである。彼が実戦に参加していた地域では、主に女性たちが食糧や弾薬を天秤棒で最前線まで運んでいた。運搬の途中、仏軍機のナパーム弾にやられて死んだ女性も少なくない。

湿潤で河川の多いヴェトバック根拠地には、水だけは無尽蔵にあった。しかし地域によっては、どんなに澄んでいてもそのままでは飲めず、煮沸しなければいけない水があった。現地民は「毒水」と呼んでいた。瓶に入れておくと、白い沈殿物がたまった。有害な鉱物質が溶け込んでいたらしい。

### 3. 衣料

抗戦初期の日本人戦士の服装はまちまちであった。画一的な制服はなく、ヴェトバック根拠地に入る前に都市部で買ったりヴェトナム人から貰ったりした普通の民間人の服装の者もいれば、日本の軍服のズボンを穿いたままの者もいた。軍服の上衣や戦闘帽は、日本人であることの証明書のようなものなので、誰も着用しなかったようである。いずれにせよ、そういった衣服は茨と岩石の多い森林地帯で雨風に打たれながら泥まみれになって活動するうちに、数ヶ月で汚れ、破れ、擦り切れ、つぎはぎだらけのポロ着になった。それ

でも全然気にならなかったというのが、井川の聞き取った多くの元日本人戦士の追想である。仲間のヴェトナム人戦士が同じように雑多で貧しい風体であったからでもあるし、民族解放に挺身する者としての精神の高鳴りが、服装への関心など吹き飛ばしていたからでもあるだろう。

彼らはやがて現地で草木染めの衣服を購入したり、ヴェトナム人の妻の家族から貰ったりして着用するようになった。焦茶色、緑色、紫色が主流で、敵味方に目立ちすぎる白衣は医療関係者も着用しなかった。

旧日本軍の軍靴は、荒地を踏破するのには向いていたが、ヴェトバック根拠地では諸刃の剣であった。ヒルという大敵がいた。戦闘や軍事訓練で沼地や水田を歩くと、必ずヒルが靴の内側に入り込み、またたくうちに血を吸って膨れ上がる。裸足でもヒルは避けられないが、この場合はすぐに払い落とせるし、ガンという果実の汁を塗っておくとヒルの方で避けてくれる。そこで一般に使われるようになったのが自動車の古タイヤでつくったホーチミン・サンダルである。抗戦初期にはピンチティエン・サンダルと呼ばれていたから、中部のピンチティエン地方で考案されたものかもしれない。だが、これは足の皮膚が露出しているので、砲弾の破片などで負傷することの多い本格的な野戦には不向きであった。

人民軍中央諸機関の勤務者と正規軍の将兵に、年に2回、軍服（戦闘服）、肌着、冬用の綿入れチョッキ（アオチェン）が支給されるようになったのは、正規軍、地方軍、民兵という3種の軍隊と、中団（連隊）を最大単位とする正規軍の機構がほぼ整った48年後半である（\*）。軍服はコットン製でカーキ色、上下とも分厚く、上衣は両ポケットのついたYシャツ式のものであった。

\*大団（のちの師団）は49年8月に初めて編成された。

軍帽はそのころサファリ帽の形に竹を編んだものであったが、やがて本物の戦闘用ヘルメットと偽装用のネットが支給されるようになった。50年には中国製のズック靴、51年には個人用の蚊帳とゴム引きの布の支給が始まった。ゴム引きの布は野営用で、地面にじかに寝ると体力を消耗するので考案されたい。底が堅くて分厚いホーチミン・サンダルは、川を渡ったり仏軍陣地を攻撃するときに鉄条網を突破したりするにはズック靴よりも都合ということで、抗戦の最終段階まで使われていた。

#### 4. 交通手段

もっぱら徒歩であった。物資輸送には自転車も使った（1台120kg）。自動車も多少はあったが、狭くて凹凸の多い道ばかりなので余役に立たなかった。上級幹部は急ぎのとき馬を使っていた。単独または小グループの長距離旅行にも馬を使うことが多かった。軍事参議官であった中原は、何度かハノイ近辺やタインホア省まで仏軍陣地のすきまを駆け抜けて旅したことがあるという。ヴェトミン軍の使っていた馬には、フランス人の使っていたヨーロッパ種の馬や、日本軍の残した軍馬もあったが、最も頻繁に使われていたのは地元種の通称インドシナ・ポニーである。これはロバほどもない小柄な馬なのに耐久力はヨーロッパ種に勝り、軽いので渡河のとき舟に乗せるのにも便利であった。

独立戦争終結後60年を経て、旧ヴェトバック根拠地の風景はまるで別世界のように変わった。90年代からのヴェトナムの経済発展による変化はとりわけ激しく、道路・住宅建設などの「開発」に伴って原生林と野生動物は大幅に減り、70年代までわずかながら棲息していた虎や大鹿は絶滅したと見られている。旧「安全区」のピンソン村とその周辺地域は、今は保養・観光地を兼ねた広大な人口湖になっていて、対仏抗戦期の様子は想像もつかない。井川がチョーチュー町の人々にヴェトミン戦士たちの食事を再現してほしいと頼んだところ、ザオトーバイはもう地元にはないから山奥で探してくるといわれ、4時間も待たされることになった。

しかし旧「安全区」には、まだ当時のことをヴェトバック根拠地の通称であったチェンケー（戦区）という言葉やジョートー（上等）などの日本語もろとも覚えている元ヴェトミン戦士が多少は生き残っている。

チョーチュー町の市場でたまたま出会った老人は、ドウオンという日本人とともに戦った日々のことを懐しそうに語った。ドウオンは30歳前後の背の高い男で、47年に編成されたばかりの人民軍第72中団の大隊長（旧日本軍の中隊長）を勤めていたという。「勇敢な男で、みんなに信頼されていた。私も武器の使い方や戦闘技術を彼から学んだ。バツカンの北の方で仏軍に包囲されたが、彼の指揮で血路を切り開くことができた」と語る老人の目は、遠い40～50年代の戦野を眺めているかのようなようであった。井川は後日、ドウオンなる人物のことを調べてみたが、本名や経歴は遂にわからなかった。

[井川付記]

加茂徳治によると、彼の勤めていた軍訓局は47年に開設された。最初は何をすべきかわからず、いわば手探り状態であったが、やがて日本人スタッフがふえるにつれて、人民軍諸部隊から軍事訓練に関する報告を受け取って検討・評価したり、スタッフが諸部隊を回って訓練状況を実地に調査し、その場で指導したりするのが主な任務になった。

抗戦後期（49年以降）になると、軍人動作の統一や部隊編成の整頓について人民軍参謀本部に意見を具申するのも仕事になった。軍人動作の統一は、「気ヲツケ」、「休メ」などの日常動作や拳手札から射撃、突撃、匍匐その他の戦場動作まで日・仏・中3ヶ国の方式がばらばらに採用されていたのを日本式を軸に平準化しようとしたもので、例えば銃剣術は両手でという日本式になった。部隊編成も旧日本軍のそれに準じて統一された。ただし機関銃がほとんどなかったため、機関銃分隊を加えた日本式の4・3・3編成（4個分隊で1個小隊、3個小隊で1個中隊、3個中隊で1個大隊）は3・3・3編成となった（中国援助の本格化した51年からは、これとは別に多数の現代兵器を持つ特別な部隊が編成されることになった）。

軍訓局スタッフの月給は米150kgで、1人1日の食費（副食費コミ）は小団長級（大隊長級）の部隊指揮官と同じ1.2kgであった（兵士は900g）。これを家族とともに消費した残りは換金したり衣類などと交換したりしていた。局内での昼食は無料で、5人1組で車座になって食うのが常であった。軍訓局は独自の農場を持っていたので、副食は戦闘部隊よりもかなりジョートーであった。→

## 第1次報告書の一部訂正・補足

### 1. 「新ヴェトナム人」という呼称について

第1次報告書では「新ヴェトナム人」という呼称が独立戦争に参加した外国人すべてに与えられていたと述べたが、彼らの事跡について最も幅広い知識を持つと思われるヴェトナムの戦史研究者グエン・ヴァン・コアン博士によると、この呼称は日本人にだけ与えられていた。また、この呼称を発案したのは共産党中央やDRV中央政府ではなくてグエン・ソン将軍である。グエン・ソンは中国国民党・共産党第1次合作時代の黄浦軍官学校で、日本留学の経験を持つ中国両党の幹部や、蒋介石とともに日本で軍事を学んだヴェトナム人ホー・ホック・ランから日本事情をしばしば耳にし、日本と日本人にかなりの親愛感を抱いた。1946年6月、クアンガイ陸軍中学設立に際して教官全員に旧日本軍人を採用したのはそのためである（井川少佐への友情もあったようであるが）。彼はこのとき「新ヴェトナム人」という呼称をみずから考案した。それゆえ独立戦争初期には、この呼称は彼の第5軍区（中部）でしか通用せず、南部の第7戦区（メコン・デルタ）では1950年代初頭まで「平和戦士」（チェンシー・ホアビン）という呼称が一般的であった（\*）。

\* 資料：バクリュー省のDRV機関誌『民軍』51年3月号（コアン氏提供）。これには日本人を含む外国人戦士のヴェトナム名（ロックなど）が記されているが、本名やその後の運命はすべて不明である。

### 2. グエン・ゴックと井川少佐について

井川少佐と最初に接触したヴェトミン幹部の一人で、のちに中部の公安責任者となったグエン・ゴックは、マダガスカルではなくてレユニオン島に幽閉されていた。またコアン博士によると、彼は中部山地（フエ近傍）に米軍機から落下傘で降下したのではなくて北部に降下し、DRV中央政府によって上級情報要員として中部に派遣された。彼は部下のダン・タインを通じてグエン・ソン将軍を井川少佐に紹介し、その後も井川少佐やその部下の中原光信少尉と接触し続けた。井川少佐にヴェトミン幹部との交渉のためのアジトを提供したのはグエン・ゴックである。アジトに世話役として住み込んだフエ上層社会の女性ハイ・ダンとその妹はダン・タインの従姉妹であった。ダン・タインは独立戦争終結のちサイゴンで第1次と第2次のインドシナ戦争を題材とする大衆作家となった。井川少佐や中原少尉を主要登場人物とする彼の作品には、井川一久の評価によれば少々ロマンテ

イックにすぎない脚色部分があり、それが井川少佐をめぐる人間関係について現地の元ヴェトミン幹部たちの間に若干の、ただし好意的な誤解をもたらしている。

### 3. 新たに判明した日本人戦士

ヴェトミン軍は46年に中部のニャチャン市で100日にわたって仏軍の攻撃に抵抗したが、そのとき同市近傍のニンホアに置かれていた新兵訓練所では、猪狩和正中尉（ファン・ライ、のちにクアンガイ陸軍中学教官）とホー・チ・タンという日本人が教官を勤めた。メコン・デルタの第7軍区で活動した地方部隊の「C連軍」（通称タントアン部隊）には、フタガミという旧日本軍下士官がいた。47年、仏軍の落下傘部隊がDRVヴェトバック根拠地（北部）に近い要衝バツカンを急襲し、DRV中央諸機関が大混乱に陥ったとき、日本人ホー・タム（真脇佳廣）が防戦に活躍した。DRV正規軍第66中団（連隊）にはホアン・ヴァン・ティ、ホー・チ・チャン、タン・ヴェットと名乗る3名の旧日本軍人がいた。また46年のDRV中部行政委員長チャン・ヒュー・ズックの収支報告書（コアン博士提供）には、旅費などの支給対象者として中原少尉と猪狩中尉のほかにパイという日本人戦士の名が記載されている。しかし、中原、猪狩、真脇の3名以外は本名も経歴も不明である。

### 4. 日本人戦士グエン・チ・フンとヴェット・フンについて

ヴェトナム中部で立花功とともにヴェトミンの実戦部隊に加わって独立戦争のほぼ全期間にわたって活躍したグエン・チ・フンは、クアンガイ陸軍中学の教官であった加茂徳治によると、第2師団通信隊の下士官であった山田利之である（富永朋蔵の項参照）。加茂は第1次帰国団の学集会（54年）で初めて山田と会った。そのとき山田は、なぜか昭和戦前・戦中期のマルクス主義哲学者と同じ「三木清」という偽名を使っていた。彼は54年に帰国した元ヴェトミン戦士の親睦団体「ベトナム友の会」に名を連ねている。

一方、元共産党トアティエン・フエ省書記で1994年まで同省退役軍人協会副会長を勤めたグエン・フンが井川に語ったところによると、日本敗戦までフエ市チャン・フン・ダオ街にあった彼の家の近くに日本人の無線技師が住んでいて、通信機器の修理業を営んでいた。46年12月に全国抗戦が始まると、その日本人はフンとともに市外のヴェトミン支配地域に移った。彼はその後どこかへ姿を消したが、フンは1950年ごろ省内の戦場で彼と再会した。彼はヴェトミン軍野戦部隊（小団＝旧日本軍の大隊）の指揮官となり、

ヴェット・フンと名乗っていた。親切だが規律に厳しく、また勇敢な男で、隊員の信望は極めて厚かったという。このヴェット・フンなる人物は、前記グエン・チ・フンすなわち山田利之とは恐らく別人であろう。山田が日本敗戦時に中国から南下中の第22師団の兵士であったことはほぼ確実だからである。してみるとヴェット・フンは、民間人を装ってフエ市内に住んでいた第34旅団参謀井川省少佐指揮下の諜報要員であったということになる。

元地方党書記グエン・フンは、ヴェット・フンにはフエ市に住んでいたころからヴェトナム人の妻子がいたと語っている。その妻子の運命は不明である。

#### 5. 南部の日本人戦士について

映画シナリオ『最後の一振り』の項で述べたように、南部で戦った独立戦争参加日本人の事跡を知ることは極めて困難である。そのことは行方不明のヴェトミン戦士(MIA)がティエンザン省(メコン・デルタ東部)だけでも2,000名に余るほどに混乱を極めた戦況からも察せられよう。その詳細な調査は今後の課題であるが、これまでの南部調査で井川が断片的にせよ知ることのできた日本人戦士は次の通りである(メコン・デルタで戦死したと推測される石井卓雄元少佐とその部下たちを除く)。

(1) 松嶋春義元上等兵(レ・ハ・ティン)および同時離隊の旧第22師団(原兵団)ミト一駐屯部隊の兵士7名(第1次報告書参照)。松嶋以外の6名は戦病死または仏軍ないしサイゴン政権による捕殺、1名は行方不明。

(2) ホーチミン市ホクモン県アンフードン村で1945年9月ごろ民兵訓練中、村民を逃がすために仏軍と白兵戦を演じて死んだ旧日本軍兵士グエン・ヴァン・ミンとグエン・ヴァン・トゥアット(第1次報告書参照)。

(3) ベンチェ省(メコン・デルタ東南部)モーカイ県の烈士墓地に葬られている6名(いずれも本名不詳)。

(4) サイゴンまたはビエンホアで離隊し、ビエンホアの日本軍駐屯地から大量の武器弾薬を運び出してヴェトミンに提供したと伝えられる旧日本軍人アラキ。彼は南方総軍第1憲兵隊の荒木三郎准尉(兵庫県出身)である可能性が大きい。

(5) ティエンザン省カイベ県タンタイン村に墓のある元日本兵フルカワ(トゥー・ティエン)。地元の言い伝えによれば、彼は砲兵出身で、ヴェトミン地方部隊に迫撃砲の使い方などを教えていた。独立戦争終結ののち彼は同村でバナナ農園を営み、相当な財産を築

いたが、ヴェトナム戦争末期の75年1月に住民の土地争いに巻き込まれて殺されたという。46年2月にサイゴン東方のバリアで離隊した旧日本軍第2師団歩兵第29連隊の古川正記上等兵（福島県出身）と思われる。現地に二人の妻がいた。

（6）元ホーチミン市文化局長グエン・ヴァン・トンと面識のあった二人の日本人戦士。一人はヴェトナム名をティンという元日本軍人で、46年初頭にティエンザン省のヴェトナム指導部が雑多な若者を集めて組織した「ファン部隊」（隊員約100人）で軍事教練を行うかたわら、同省カイライ県などでゲリラ戦を行っていたが、サイゴンとミトーを結ぶ国道4号のカイチウオイ橋をめぐる戦闘のとき、仏軍陣地から狙撃されて死んだ。ゲリラ戦の基本は、この部隊ではもっぱらティンが教えたといつてよい。弾丸が足りなかったので、ティンはメコン河の支流に落ちた葉莢を拾い集め、これに火薬を詰めて再使用するというような技術まで教えていた。もう一人は、トンが50年に第311小団長になったとき、この小団の第948大隊の副大隊長を勤めていたチュン（忠）である。彼は小集団による戦闘に熟達していて、その指導は実に効果的であった。背が高く、肌が白く、顎鬚を蓄えた筋骨隆々たる男で、仏軍がドンタップムオイ（メコン・デルタ北部の水郷）に侵入したとき勇戦したが、その後、別の戦区に移った。ヴェトナム人の妻がいた。

ティンとチュンの本名はわからない。これ以外に彼らの事跡を伝える記録はない。恐らく戦病死したのであろう。なお、このことを井川に語ったグエン・ヴァン・トンは、54年にインドシナ停戦協定の仏越両軍分離規定に従って北緯17度以北に移り、第2次インドシナ戦争（ヴェトナム戦争）前半期の64年に中団長として南部へ復帰、戦局の一大転機をもたらしたビンジアの野戦（米軍事顧問団の指揮するサイゴン政権軍の機動部隊を南ヴェトナム解放軍が初めて完敗させた戦闘）で決定的な役割を果たした人物である。



## 日本人の立場からの歴史的評価

独立戦争参加日本人の事跡を調査する作業は、彼らが日本近代の何を象徴したのかを探求する試みでもある。それは日本近代とは日本人にとって、またアジア諸国民にとって何であったのかを知るための足場の一つでもある。以下は、この問題に関する井川の個人的見解である。

### 1. 東遊運動と日仏協約

16世紀～17世紀初頭には日本とヴェトナムの関係は極めて密接で、日本の貿易船（朱印船）が北部のフォーヒエンと中部のホイアンに頻繁に渡航し、文化的にも双方に大きな影響を残したが、これは徳川幕府の鎖国令で中断、ホイアンの日本人町も消滅した。両国が再びつながったのは、20世紀初頭のヴェトナムの東遊運動（日本留学運動）によってである。

19世紀から欧米帝国主義諸国の侵略と支配に苦しんでいたアジア諸民族の間では、20世紀初頭、自力で近代化に成功した唯一の非白人国家日本に対する期待感が急速に高まった。1880年代からフランスの植民地となっていたヴェトナムでは、代表的知識人の一人で独立運動指導者でもあったファン・ボイ・チャウが、日露戦争が日本の勝利に終わった1906年、独立を志すヴェトナム全国の青年に、彼の組織した越南維新会の名で日本留学（東遊）を呼びかけた。ヴェトナムの若者たちはチャウの呼びかけに応じて続々と日本へ密航し、東京同文書院や振武学校（亡命中国人のための軍事教育施設）で学ぶことになった。その数は、やがて270人にも達した。これがヴェトナム近代史の一角を彩る東遊（ドンズー）運動である。

日本政府は当初は彼らに寛容で、一部の有力な政治家、財界人、軍人なども援助を惜しまなかった。東京はヴェトナム国外における対仏独立運動の大拠点になりつつあった。だが1907年、日本政府はフランス政府とアジアにおける両国の地位および権益を認め合う条約（日仏協約）を結び（\*）、同年秋、この条約にもとづくフランス政府の要求により、越南維新会の留学生組織に解散を命じた。

\* 日本政府はフランス以外の欧米諸大国とも同種の条約を結んだ。

留学生たちは勉学の道を失って次々に日本を離れた。抗議の自殺を遂げた者もいる。チャウを中心として日本に残留した数十人は、チャウ本人や越南維新会総裁クオンデ（グエン朝の王子の一人）とともに日本警察の監視下に置かれ、その生活は祖国からの送金の途絶（現地フランス当局の妨害によ

る)や日本人有志の援助の中断によって困窮を極めた。そのとき彼らに援助の手を差し延べた浅羽佐喜太郎(小田原市に病院を開いていた静岡県浅羽町出身の医師)の名を知る人は、今のヴェトナム知識層にも少なくない。彼は多額の支援金をチャウに贈り、さらに住居を追われた留学生たちを彼の病院に保護した。1908年、チャウとクオンデは日本政府から国外退去命令を受けた。佐喜太郎はこのときも支援金を渡して彼らを激励した。

1917年、チャウは佐喜太郎に会うために日本をひそかに再訪したが、佐喜太郎はすでに病死していた。翌1918年、チャウはまた訪日し、2人の同志とともに浅羽町に佐喜太郎に感謝する石碑を建てた。その費用の大半は、チャウの話に感動した地元住民が提供した。碑面には「公(佐喜太郎)は施すこと天の如く、我は受くること海の如し。我は志いまだ成らず、公は我を待たず。悠々たるかな公の心、それ億万年」という、チャウの起草した「越南光復会同人」名の漢文が刻まれている。

この東遊運動の歴史は、近代日本の運命を左右した基本的矛盾の一つ(最大の矛盾といえるかもしれない)を物語っている。日本は欧米帝国主義から身を守るために欧米を模倣した近代化の道を急ぎ、その結果、国内では欧米近代文明と伝統民族文化の摩擦に悩み、世界に対しては帝国主義的志向と反帝国主義的志向(アジア諸民族解放の志向ともいえる)の対立に苦しまざるをえなかった。これらの矛盾要素は、多くの日本人の意識にも混在していた。その矛盾が最も鮮明な形で現れたのは、まさにヴェトナムに対する日本国家および日本人の態度においてである。

## 2. 日本近代の基本矛盾

19世紀、世界は帝国主義の時代を迎え、イギリス、フランス、米国、ロシアなどの「欧米列強」がアジア南部・東部諸地域で大々的な侵略活動を展開するようになった。その状況はアメリカ太平洋艦隊の開国要求や、アヘン戦争の情報によって、日本知識層の目には幕末期にすでに明らかであった。欧米列強に侵蝕されるかもしれないという深刻な危機感から、欧米諸大国への二つの対応路線が生まれた。欧米の要求に応じて鎖国をやめ、欧米との協力を通じて日本の近代化を図るという妥協路線と、当面安易な妥協はせず、戦争手段に訴えてもあくまで国家主権を守るという日本国民の意志を示したうえで、欧米と対等の関係を結ぶという対決路線と。前者を代表したのは徳川幕府であり、後者を代表したのは皇室中心の新たな権力機構を築こうとした「尊王攘夷」勢力である。明治維新は後者の勝利であった。

それは国内要因だけによる国家体制の変革ではなかった。欧米帝国主義の脅威が生み出した強烈なナショナリズムが、一方では日本の歴史と文化を代表してきた皇室の権威と結びつき、他方ではす

に機能不全状態に陥っていた幕府および日本的封建制に対する失望感と結びついた。その結果、欧米帝国主義に対抗するには欧米諸国と同じ機能的な国民国家を築かなければならないという認識が武士を中心とする知識層に浸透し、それが幕府打倒の武力行動となって現れたのである。つまり明治維新とは、日本を欧米帝国主義の侵略から守るための、つまり国家防衛のための、近代的統一国家の形成をめざす体制変革であったといえることができる。

その時代は、欧米帝国主義諸国の世界規模の征服活動の結果、近代の諸価値はすべて欧米キリスト教圏の文明によって普遍化される——近代化とは欧米化である——という認識が全世界に普及した時代である。日本もこの「常識」の影響下にあった。当時の日本の、世界情勢に最も敏感な知識人の多くは、欧米近代文明の暴力的性格やエゴイスティックな功利主義に疑問を感じながらも、欧米の高度な科学技術や効率的な政治・経済・社会機構を物質面における近代化の唯一のモデルとみなしていた。

それゆえ、彼らを指導者とする明治の新政府にとっては、欧米諸大国による「ありうべき侵略」に抗して日本の国家主権と精神的諸価値（その象徴が皇室であった）を守るために、できるだけ短期間に科学技術、産業組織、行政・軍事機構、法制度など物質的諸領域で欧米的近代化を達成することが最大の使命となった。彼らは富国強兵のための欧米近代文明の吸収（文明開化）に全力を注いだ。欧米近代文明をみずから移植するというこの国家方針は極めて効率的に実行され、司法、行政、産業、教育、学術研究、交通・通信、軍事・警察などの制度と機構は、すべて欧米的なものに生まれ変わった。人文・自然科学、産業技術、文学・芸術、スポーツの各領域、さらに衣食住の様式においても、欧米の最新レベルに到達しようという運動が精力的に、また成功裡に展開された。長い歴史を誇る国が、外国の文明を自力でこれほど急速かつ全面的に摂取した例は、19世紀後半の日本以外にない。

しかし、欧米諸大国に抵抗するために欧米諸大国の文明を取り入れるというのは、そもそも矛盾した作業である。この矛盾から、後年の日本に悲劇的運命をもたらすことになった二つの重大な矛盾が必然的に生じた。

その一つは、日本人の内面に生じた矛盾である。

明治の大変革の指導者たちは、日本の伝統文化と民族固有の精神を守りながら近代欧米の科学技術、政治・経済システム、社会管理のノウハウなどを取り入れるという「和魂洋才」を唱えたが、ひとたび欧米を唯一のモデルとする近代化を開始した以上、欧米文明の精神的要素、つまりキリスト教倫理や政治・社会思想（民主主義、自由主義など）が、極めて闘争的な競争原理や功利主義、また欧米人の風俗や習慣とともに流入することは避けられなかった。「洋才」は「洋魂」と不可分であった。その「洋魂」が明治維新まで物心両面で日本人の生活を支えていた伝統的な諸理念や倫理および美の観念と衝突することもまた不可避であった。

日本人、とりわけ知識人の多くは、神道、仏教、儒教などを基盤とする日本伝統の価値観と、新たに彼らの意識に流入してきた近代欧米の価値観の対立に悩まされることになった。例えば、社会秩序の永続性を尊ぶ「和合と安定」の日本的価値観と、秩序破壊を辞さない「闘争による発展」の欧米的価値観の対立や、物質的利益の追求を恥とする日本武士道の精神と、それを善とする欧米資本主義精神の対立がそれである。日本伝統の価値観に立って近代欧米の価値観に反発しながらも、同時に近代欧米の価値観に引き寄せられるという矛盾した意識は、その後、一種の「精神における癌」となって日本人の心理に深く残り、次に述べるもう一つの矛盾と相俟って、欧米諸大国との関係が悪化するたびに、反欧米の方向で表面化することになった。

もう一つの矛盾とは、欧米的近代化の成功そのものがもたらした国家的矛盾である。先に述べたように、欧米を模倣した近代化の努力は、欧米帝国主義に対して自衛するという極めて愛国的な、また反帝国主義的な動機によるものであった。それは欧米帝国主義の支配に苦しむアジア諸民族への共感、さらにアジア諸民族の自己解放運動を助けようという志向を生んだ。これが後年、「アジア主義」または「大アジア主義」と呼ばれるようになった理念である。しかし欧米帝国主義諸国を模倣した近代化の成功は、日本自身を必然的に帝国主義へ導いた。そこから、欧米諸大国とともに、または欧米諸大国と競争しつつ、アジア諸地域に日本の勢力圏を拡大しようという志向が生まれた。この志向は単純ではなく、欧米諸大国による世界分割支配に参加しようという純然たる帝国主義的野望から、日本の政治的・経済的・軍事的進出を通じてアジア諸民族の近代化を指導しようという一種の善意を含んだ「半帝国主義」的意図まで、さまざまなヴァリエーションがあったが、いずれも少なくとも結果として日本を帝国主義化するものであったことに変わりはない。

明治維新をもたらした日本人のナショナリズムは、欧米的近代化の過程で、こうして二つの相反する方向——帝国主義の方向と反帝国主義の方向——に分岐し始めた。帝国主義か反帝国主義かというこの対立軸には、「親欧米」対「親アジア」という別の対立軸が微妙に交差していた。それ以後、日本人の対外意識は、帝国主義的志向と反帝国主義的志向、また「親欧米・反アジア」の志向と「反欧米・親アジア」の志向の間で動揺し続けることになった。

その兆候は、日本が軍事大国となるはるか以前からあった。1885年に出版された2冊の著書——福沢諭吉の『脱亜論』と、これに真っ向から対立する樽井藤吉の『大東合邦論』——は、これを端的に示すものであった。ただし、19世紀末までは、帝国主義か反帝国主義か、「親欧米」か「親アジア」か、という二重の選択肢が明確に意識されていたわけではない。この二重の選択肢が日本の知識人多数に意識されるようになるのは、日露戦争以後のことである。

### 3. 日本近代史の苦悩を体現した群像

明治時代の日本では、朝鮮半島は日本の安全保障に不可欠の防波堤と考えられていた（現在もそうである）。日本が数百年ぶりに敢行した対外戦争——日清戦争と日露戦争——は、そこに帝国主義的意図が多少含まれていたとしても、基本的にはこの半島が欧米帝国主義諸国の勢力圏となるのを防ぐためのものであった。

両戦争における日本の勝利、特に日露戦争における勝利は、日本が一応の近代化を達成し、少なくとも軍事的には欧米の国々に対抗することのできる国となったことを意味していた。欧米諸国の支配に苦しんでいたアジア諸民族の知識層は、この日本の勝利をわがことのように喜び、日本が彼らの自己解放運動の支援者となるであろうこと、また将来の独立国家建設のモデルとなるであろうことを期待した。

しかし日本は、この期待に応えることはできなかった。日露戦争に勝利した結果、日本国内では、自力による近代国家建設に成功したという国民あげでの自信に伴って、自国の進路をめぐる二重の選択肢がようやく鮮明なものとなったのである。帝国主義か反帝国主義か、「親欧米」か「親アジア」か。

国家としての日本の選択は明白であった。日清戦争で台湾と一部島嶼群を獲得し、日露戦争で中国遼東半島と南サハリンを獲得し、さらに南満洲鉄道の運営権と韓国保護権を得たこと、日露戦争の直前に結んだ日英同盟条約を戦後も継続したこと、また日露戦争の4年後（1910年）に韓国を併合したことは、当時の日本政府が帝国主義プラス「親欧米」の道に進み始めたことを物語っている。

1907年の日仏協約もまた、こういう日本国家の選択を示すものであった。日本とフランスがアジアにおける両国の既得権益を相互に承認したこの条約は、欧米諸大国からなる「帝国主義クラブ」に唯一の非白人メンバーとして加入するという日本の国家意志を物語っていた。それは欧米諸大国をモデルとする近代化という明治維新以来の国家的選択が必然的にもたらした運命であった。日本は工業資源の極めて乏しい国であり、また明治維新以降は人口の爆発的増大に苦しんでいた。そのような国が欧米的近代化を強行しようとするれば、全世界が欧米諸大国の排他的支配圏に分割されつつあったという当時の条件のもとでは、海外に独占的な資源供給地と市場を求めざるをえなかったのである。

しかし、日本国民の多くは、帝国主義的「親欧米」という国家的選択を容認する一方で、これとは逆の反帝国主義的「親アジア」の志向、つまりアジア諸民族の独立を支援しようという心情を持ち続けていた。この志向は、帝国主義的「親欧米」路線を設定した各界指導層の心理をも奥深いところで規制するものであった。これまで述べてきたような近代日本の矛盾がいかに深刻なものであったかは、このように、その矛盾が個々の日本人の心の中にわだかまり、内外状況の変化につれて、さまざまな

形で表面化したということで説明できるであろう。

日露戦争前後の日本は、欧米帝国主義に対する抵抗を志すアジア諸国の亡命者や留学生を多数受け入れていた。それは日本官民の心理に根づいていた反帝国主義的「親アジア」の志向を示すものであった。だが日本政府は、日仏協約締結ののち、東遊運動のヴェトナム人留学生に対して、例外的に厳しい態度で臨んだ。ヴェトナムは中国とは違ってフランスの排他的支配地域となっていたうえ、ヴェトナム人留学生全員が越南維新会という独立運動体のメンバーであったからであり、またフランス政府の明確な要求があったからである。

東遊運動の人々を助けようとした浅羽佐喜太郎の行動は、当時の日本国民の胸中にひそかに息づいていた反帝国主義と「親アジア」の志向の反映であった。ドイツ医学を学び、ドイツ留学まで予定しながら、ヴェトナム独立に協力しようとした佐喜太郎は、帝国主義対反帝国主義、「親欧米」対「親アジア」という明治維新以来の近代日本の二重の矛盾を一身で生きたのである。ファン・ボイ・チャウらが彼に感謝する石碑を建てようとしたとき、これに資金援助を惜しまなかった浅羽町住民の行動もまた、帝国主義的な国家路線とは異なる日本民衆の反帝国主義的心情を物語っている。

その後、日本は第1次世界大戦にイギリス、フランス、米国など連合諸国の側に立って参戦し、ヴェルサイユ講和会議の主要参加国の一つとなって「帝国主義クラブ」への正式加入を果たしたが、その日本の前途には新たな矛盾が待ち受けていた。それは欧米帝国主義諸国との間の矛盾であった。

欧米諸大国は「遅れてきた帝国主義国」日本が、彼らの支配地域を含むアジア諸地域へ独自に進出し、あるいはアジア諸民族の独立運動を支援して、既成の帝国主義的秩序を脅かすのではないかという警戒心から、日本の対外行動を陰に陽に妨害しようとした。日本の政府と指導者の言動には、実際に欧米諸大国の警戒を誘うような反帝国主義的な、または「親アジア」の側面があった。例えば、ヴェルサイユ講和会議の日本代表団は「人種差別撤廃」の決議案を提出した。

実際のところ、欧米諸国におおむね支配されていた当時のアジアには、日本の進出しようる地域はほとんど残されていなかった。わずかに残されていたのは中国大陆である。世界大恐慌によって経済的苦境に陥った日本は、その中国への進出を本格的に急ぎ始めた。この過程は、軍（特に陸軍）が政治に関与し、遂には政治の主導権を握る過程と並行していた。

1931年の「満洲事変」と翌年の満洲帝国樹立は、欧米諸大国の対日非難と中国における反日運動の高揚を招いた。これに対し、日本はいわば痙攣的に反応した。国際連盟からの脱退、政府の制止命令を無視した陸軍の中国北部への進出、中国国民党軍との全面衝突による日中戦争の開始などがそれである。米国はイギリスとともに中国国民党政権（中華民国政府）を支援し、日本に対し経済関係縮小などの制裁措置を取った。日英同盟条約はすでに廃棄されていた。

日本は同じ「遅れてきた帝国主義国」であるナチス・ドイツおよびファシスト・イタリアと手を結び、第2次世界大戦勃発直後の1940～41年、米英の中華民国支援ルートを断つため、ナチス・ドイツに敗れたフランスの親独政権（ヴィシー政権）と半ば強制的な協定を結んでベトナム北部へ陸軍部隊を派遣した（北部仏印進駐）。それは南方に工業・エネルギー資源と日本人の活動舞台を求めようという「南進政策」の初実験でもあった。これが東南アジアの大半を支配する米国、英国、オランダ各国を刺激したことはない。

当時、米国は日本に対する鉄鋼と石油の主な供給国であった。そのため日本政府は日米関係の修復のための外交的努力を重ねたが、もはや米国はそれを許さず、鉄鋼と石油の対日輸出を全面的に禁止した。この事態が続けば、日本経済の崩壊は必至であった。事実上の軍事独裁政権となっていた日本政府は41年末、米英との全面戦争に踏み切った。

このとき——厳密に言えば1943年——日本政府の打ち出した国家方針は、アジア東部・南部の諸民族を欧米諸大国の支配から解放し、それら非白人独立諸国の連合体を結成して、日本の主導で欧米帝国主義に対抗するという「大東亜共栄圏」の建設である。それは帝国主義対反帝国主義、「親欧米」対「親アジア」という日露戦争以来の近代日本の宿命的矛盾を、帝国主義的要素を残しながらも反帝国主義的「反欧米・親アジア」の方向で一気に解消しようとするものであった。もともとこれらの矛盾要素を内面に抱き、日本の対外進出を一面で歓迎しながらも他面でアジア諸民族への共感を抱き続けていた日本国民大多数は、この国家方針を熱狂的に支持した。

この戦争は日本の完敗に終わった。東アジア各地に展開していた日本軍は、200万に近い戦病死者の遺体を残して撤退し、日本全土が史上初めて外国軍に占領された。首都東京を含む多くの国内都市が米軍の爆撃で荒廃し、広島と長崎の両市は原爆で壊滅した。沖縄は地上戦で焦土となった。それは日本近代に宿命的に孕まれていた諸矛盾が深化の一途を辿ったあげく、昭和戦前・戦中期に連続的に爆発した結果といえよう。

6年余にわたって日本を支配した米軍は、明治維新以来の日本の近代化過程を「抑圧と侵略の暗黒時代」として断罪する徹底した情報工作を行った。疲れ果てた日本国民大多数は、その情報工作や米國を主役とする連合軍の極東軍事裁判（千人以上の政治指導者や旧日本軍将兵が死刑に処された）の結果、日本の行った一連の戦争を悪夢であったかのように忘れ去ろうとした。だが、祖国の敗北を知りながら東南アジアの欧米植民地諸国に残留し、現地諸民族の独立闘争に身を捧げようとする一群の日本人がいた。その典型がベトナムの独立戦争に参加した人々である。

#### 4. 現代世界史に生きる日本人の一道標

中国大陸への日本の軍事的進出は、個々の国民の意識はともかく、客観的にはかなり帝国主義的な性格を帯びた国家行動であった。日本軍の仏印進駐は、その行き詰まりを打開するために決行された。それは対米英戦争の引き金となった。仏印派遣軍の将兵は、つまり対米英戦争の「開戦に先立つ尖兵」であった。そのこと自体、彼らが日本近代の矛盾を体現する存在であったことを物語っている。

彼らの内面は単純ではなかった。「帝国主義・親欧米」対「反帝国主義・親アジア」の矛盾が彼らの胸中に渦巻いていたことは、日本敗戦前の個々の将兵の言動からも察することができる（いささか粗野かつ横暴ではあったが）。

敗戦は彼らにその矛盾に直視させる事態であった。その直視の最も真剣であった者たちが、生還の保証のないことを知りつつ、あえて独立戦争に挺身する道を選んだ。彼らは日本近代の巨大な矛盾に生き、その矛盾を「反帝国主義・親アジア」の方向で、つまり「大東亜共栄圏」という官製理念に形式的にもせよ含まれていたアジア諸民族解放の方向で、身一つで解決しようとしたのである。これが第1次と第2次の調査を通じて井川の得た結論である。

これは彼らの独立戦争参加がいかなる私的利益をも約束するものではなかったということ、また彼らがいかなる私的利益をも期待していなかったということからもいえることであろう。それは祖国における公的榮譽にも全くつながらぬ献身であった。

この結論が正しいとすれば、彼らの事跡は日本近代史の構造と、近代における日本人の精神史を最も鮮烈な形で物語っているということになる。彼らの精神は、日本国家の意志に抗して東遊運動を支援した浅羽佐喜太郎の精神の延長線上にあるとあってよい。彼らの事跡を調べることは、いわば日本の近現代史、とりわけ近現代における日本人の精神史を映す鏡の一つなのである。

彼らの精神が今の日本人多数の胸に受け継がれているのか、それとも受け継がれていないのか。受け継がれていないとすれば、彼らの事跡を、いかなる確度で、いかに未来に生かすべきなのか。これは極めて真摯な考察に値する問題であろう。

もう一つ、彼らの献身はインドシナと世界の現代史にいかなる位相を占めているのか、という問題がある。これも真剣な考察に値する問題であろう。第1次インドシナ戦争（対仏独立戦争）は第2次インドシナ戦争（ヴェトナム戦争）に直結する戦争であった。また第2次インドシナ戦争は冷戦を代償する史上最大の局地国際戦争（局地化された第3次世界戦争）であって、現代世界史の構造に重大きわまる影響を及ぼした。してみると、対仏独立戦争に参加した日本人の活動は、その役割の質的深みと量的重みに比例して、現代世界史の無視すべからざる構造的要因の一つになったということができよう。少なくとも21世紀に生きようとする日本人にとっての重要な一道標であることは確かであ



る。しかし、これは本報告書で扱うには大きすぎるテーマである。本格的考究には別の機会を待ちたい。

注：ベトナム独立戦争そのものにおける日本人戦士の役割の評価は、第1次報告書で行ったので、ここでは省略した。

## 提言

### 一 ヴェトナム独立戦争参加日本人の事跡を今後いかに生かすか

第2次大戦末期、ヴェトナムを中心とする仏領インドシナに駐留し、またはインドシナを移動中であった日本軍将兵約9万人のうち、推定約800名は日本敗戦直後に所属部隊を自由意志で離脱し、このうち600余名は若干の民間人とともにヴェトナム独立同盟を主役とする独立戦争（第1次インドシナ戦争、1945～54年）に参加して、少なくともその前半期において戦局の帰趨を決した最大要因の一つといえるほどの役割を果たした。彼らが命懸けでヴェトナムとDRV政府諸機関に提供した軍事・民事の各種近現代技術は、後年の対米戦争（第2次インドシナ戦争＝ヴェトナム戦争、1960～75年）を経て、現在のヴェトナム国家にまで何らかの形で受け継がれている。

敗戦国の軍人・民間人多数が帰国を拒み、駐留先の植民地諸民族の独立戦争に挺身し、独立達成に大きく貢献したというのは、インドネシア残留日本人数百人の対オランダ独立戦争参加とともに、近現代の世界に類を見ない歴史的事実である。この歴史的事実は、しかし、ごく最近まで、日本ではほとんど知られることなく、いわば歴史の地下に葬られていた。これは同胞の過去の軍事活動一切をタブー視するという、世界の常識に照らして甚だ異常な戦後日本の世論状況の産物であって、これまた極めて異常な現象であった。ヴェトナムにおいても、これとは異なる歴史的事情により、この事実―独立戦争における日本人の貢献という事実―は、半世紀近く世論に忘れ去られ、または語ること自体が半ばタブー視されていた。

だが、ヴェトナムでは2005年秋から、対仏独立戦争に参加した日本人の功績にわかに脚光が当てられるようになった。現地紙誌にはしばしば独立戦争初期に活動した井川省少佐やクァンガイ陸軍中学の日本人教官たちの功績（第1次報告書参照）に触れたエピソードまじりの記事が登場し、歴史学界では独立戦争参加日本人の役割に注目する声が出始めた。それまで沈黙していた彼ら日本人の現地妻子たちも、ハノイ都心で公然と夫や父の過去を肯定的に語り合うようになっている。ヴェトナムとともに戦った日本人の事跡は、今ようやく社会的に認知されたと考えてよい。

この「認知」に明確な突破口を開いたのは、ハノイ国家大学ヴェトナム学・開発科学研究所（I V I D E S）の協力による我々の調査研究である。ヴェトナムの国立研究機関が

この問題で日本の研究者と公式に協力関係を結んだのは初めてであり、これが上記「認知」を支える強力な柱となった。ヴェトナム国防省戦史研究所がこの問題に公式に関心を示し、我々との対話を試みるようになったのも初めてである（\*）。

\* 井川はこの問題について1990年代に戦史研究所の元所長2名とインタビューしたことがあるが、現役の戦史研究所幹部たちとは2005年に初めて公式に対話する機会を持った。

まだ一部研究者の範囲にとどまってはいるが、我々の第1次報告書に対するヴェトナム歴史学界の評価は極めて高い。「初めて」を連発させてもらうが、独立戦争参加日本人の事跡を体系的に記述した文献が日越両国人の目に触れたのは、これまた初めてだからであろう。現地有数の独立戦争史研究者グエン・ヴァン・コアン博士は、2006年3月、「これほどに正確かつ包括的な独立戦争参加日本人に関する記録を見たのは初めてである」という最大限の讃辞を我々に寄せた。I V I D E Sはこの報告書をもとに内輪のセミナーを開き、ヴェトナム歴史学界としての対応を話し合ったという。

ヴェトナムにおける社会的「認知」の背景として、また我々の調査研究の成果として、もう一つ、チャン・ディン・マイ元陸軍大佐その他クアンガイ陸軍中学卒業者たちが、これまた公然と日本人教官たちのことを感謝と敬愛の念をこめて語るようになったということが挙げられよう。マイ元大佐は第1次報告書に寄せた手記の中で、元日本人戦士たちを公式に顕彰するようヴェトナム政府に提言しているが、元上級軍人によるこのような提言は、これまたヴェトナムでは初めてである。

我々は第1次・第2次の両報告書によって、ヴェトナム独立戦争における日本人の役割を概略明らかにすることができたと考える。しかし、これで我々の任務が終了したとは思っていない。発掘すべき細部の事実はまだまだ多い。その中には、近現代における日越関係史の隠された部分に光を当てる貴重な事実もあるはずである。ただし、関係者が次々に世を去り、あるいは超高齢であること、文献史料が極めて乏しいことなどを考えれば、この調査研究がますますむずかしい作業となることは容易に予想できる。その困難を打開する一助として、我々はヴェトナム共産党中央やヴェトナム国防省の公式記録を入手したいと考えている。日本の防衛庁や厚生労働省（\*）の保管する未公開史料も、その一環をなすであろう。

\* 厚労省のものは主として第2次大戦直後から1950年代前半にかけての復員関係記録（例えば仏印未帰還者名簿）であるが、それらはかなり

不備であるうえ、最近はプライバシー保護ということで閲覧自体が極めて困難になっている。

ヴェトナムが市場経済化と全方位対外開放を二本柱とするヴェトナム共産党のドイモイ（刷新）路線に沿って急発展し始めた1992年以来、日越関係は表面上極めて友好的に推移している。過去3年間を別にすれば、日本の対越政府援助（ODA）は投資・貿易総額もろとも累積額では世界第1位であり、それが年間経済成長率8%内外という「東南アジアの昇龍」ヴェトナムの発展に大きく寄与してきたことに疑問の余地はない。だが、こういう、経済にのみ偏した日越友好関係に確固たる未来があるのか、と問われれば、我々の回答は明確に「否」である。経済の関係とは要するにカネの関係であり、カネの関係は所詮水のものであって、国際政治・経済環境の変化によっていかようにも変動する。永続的安定性は期し難い。

歴史の異なる二国間の友好関係を長期かつ永続的に保証するもの、それは我々の考えによれば精神の領域における紐帯である。600人に余る日本人にヴェトナム独立戦争への参加を促したのも、我々の調査によれば、ヴェトナムの土と人に対する強烈な共感であった。そのことを考えれば、今後の日越関係を磐石の友好基盤に据えるために何が必要であるかは明白であろう。それは両国関係の歴史を掘り起こし、その歴史に奉仕した「生身の人間」の事跡を明らかにすることによって、両国民の間の精神的紐帯を強化することである。まさにそこにこそ、ヴェトナム独立戦争参加日本人の事跡を調査研究することの意義がある。

彼らはヴェトナムという異国の民の独立のために血を流した。主体的かつ自覚的に戦う者の流す血とは何か。それは精神の極限的な物質化（肉体化）形態にほかならない。これは、かつて戦争ジャーナリストとして少なからぬ同業者の死に接し、みずからも九死に一生を得る体験を重ねた井川の実感でもある。少々美化しすぎた言い方になるかもしれないが、あえていわせてもらうとすれば、ヴェトナム独立戦争に参加した日本人は、濃淡の差こそあれ、ともかく国境を超えたヴェトナム人との「精神における連帯」のために身命を捧げようとしたのである。

彼らの事跡を客観的に発掘し、これを現在および未来の日越両国民の心に残す作業は、従って経済のみならず文化や社会の領域、さらには安全保障（防衛協力）の領域にも及ぶ両国友好関係の永続的発展に大いに資するであろうし、第2次大戦後に見失われて久しい日本国家および日本人の歴史的位相（位置と役割）の再発見と、これに伴う民族的矜持の

回復にも大いに役立つであろう。それはまた、かつて東南アジアで展開された日本軍および民間人の活動を現地諸民族がひとしなみに「悪」とみなしてきたつまり東南アジア諸国民は基本的に反日的である—というかのような誤った歴史認識姿勢にも批判の一石を投ずるものとなるに違いない。

この視点に立って、我々は日本政府機関および民間諸団体に以下のような事業への支援を要請したい。

1. 2006年ないし2007年前半に、I V I D E Sとともに、ハノイでベトナム独立戦争における外国人（主として日本人）の役割と、その歴史的意味に関する公開シンポジウムを開催する。このシンポジウムの主役は両国の歴史研究者と防衛関係者（例えばベトナム側は国防省戦史研究所の関係者、日本側は防衛研究所や防衛大学校の関係者）であるが、多数の現地知識人、報道関係者、当該外国人の現地妻子なども参加すると思われる。できれば外国人戦士の遺品類の同時展示が望ましい。これは現代世界史に一時代を画した第1～3次インドシナ戦争の歴史とその国際構造について新たな知見をもたらすものともなるであろう。

2. 同種のシンポジウムを東京でも開催する。

3. ハノイにベトナム独立戦争参加日本人に関する文献・写真資料や彼らの遺品を集めた小規模な記念資料室（一般公開）を設ける。これは日越両国民の歴史知識の拡大に役立つのみならず、日越関係史の研究機関としても機能するであろう。

4. 既述のように、ベトナム独立戦争参加日本人の事跡の概要は2次にわたった我々の調査研究によって明らかになったと思われるが、概要はあくまで概要である。未解明の細部の事実は無数にある。関係者が超高齢で年々死没していることや散佚資料が余りにも多いことを考えれば、その調査研究が困難を極めるであろうことは容易に予想できる。例えば、烈士墓地その他の墓地で日本人戦士の墓標を発見する作業だけでも多大の時間と労力を要するのである。どのような形で調査研究を継続するかは今後の問題であるが、然るべき公私の機関による適切な支援体制が必要であることは論を俟たない。彼ら日本人戦士の事跡解明が後代の日本人の歴史的責務であることに鑑み、そのような支援体制の構築を

特に要望したい。

---

東京財団研究報告書 2006-2  
日越関係発展の方途を探る研究  
2006年5月

---

著者：  
井川 一久

発行者：  
東京財団 研究推進部  
〒107-0052 東京都港区赤坂1-2-2 日本財団ビル3階  
TEL:03-6229-5502 FAX:03-6229-5506  
URL: <http://www.tkfd.or.jp>

---

無断転載、複製および転記を禁止します。引用の際は、本報告書が出典であることを必ず明示して下さい。  
報告書の内容や意見は、すべて執筆者個人に属し、東京財団の公式見解を示すものではありません。

---

東京財団は日本財団等競艇の収益金から出捐を得て活動を行っている財団法人です。









**TKFD**  
THE TOKYO FOUNDATION  
東京財団